

おっぱいドラゴンに柱間ア……！大好きクレイジーサイコホモがin
しました(休載中)

ふくちか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おっぱいドラゴンと呼ばれる兵藤一誠の肉体に宿ったのは、嘗て最強の忍と呼ばれた柱間ア……！大好きおじいちゃんだった。そんな前世で争いのない世界を作ろうとした彼は新しい生き方を模索するって言う話……！「イズナア……!!」

※只今休載中です

目次

主人公？紹介	1
第一章：旧校舎のディアボロス	
第一話「兵藤一誠は転生者らしい」	4
第二話「兵藤一誠は告白される」	9
第三話「兵藤一誠は勧誘される」	14
第四話「兵藤一誠は聖女と出会う」	20
第五話「兵藤一誠は墮天使と戦う？」	24
第六話「エピソード」	29
番外幕「閃光の再会」	32
第二章：戦闘校舎の種撒き鳥	
第七話「兵藤一誠は不死鳥と会う」	36
第八話「兵藤一誠は若者をしごく」	43
第九話「兵藤一誠は若者と語らう」	52
第十話「get the glory」	57
第十一話「後日談？」	72
第三章：月光校庭のガシヤコンソード	
第十二話「騒動の予感より妹」	78
第十三話「どうせ折るなら割り箸の方が良い」	86
第十四話「予習復讐を口煩く言う奴ほど多分昔にやらなくて後悔したんだと思う」	93
第十五話「……生きていた白髪」	98
第十六話「鴉狩り」	101
第四章：停止教室の女装野郎	

第十七話 「新しい同士」	109
第十八話 「体は子供、精神はお爺ちゃん」	116
第十九話 「三竦み」	124
第二十話 「吸血鬼の矯正」	128
第二十一話 「お前はお前だ」	138
第二十二話 「会談（参加してるとは言っていない）」	147
第二十三話 「兵藤一誠という名の修羅」	166
第二十四話 「女が複数寄れば………五月蠅い」	178
第五章：冥界合宿の………猫!!!	
第二十五話 「冥界に行く事になった修羅」	181
第二十六話 「電車で冥界に向かう時代」	185
第二十七話 「修羅は龍王と戯れる」	191
第二十八話 「修羅は過去を聞く」	197
第二十九話 「修羅はペット？を手に入れる」	201
第三十話 「修羅は黒猫と語らう」	209
第三十一話 「帰宅する修羅」	215
番外幕 「兄の思い、妹の想い」	218
第六章：体育館裏の堀さん	
第三十二話 「兄として……男として」	225
第三十三話 「弱い犬ほどよく吠える」	229
第三十四話 「転校生は幼馴染」	235
第三十五話 「馬鹿は三日会わずとも括目しないらしい」	239
第三十六話 「荒れるぞ、止めてみる」	247
第三十七話 「無限と夢幻？知るかそんな事より体育祭だ」	254
第七章：放課後授業の霸天神龍	

第三十八話 「逢引のち、邂逅」	259
第三十九話 「God降臨」	263
第四十話 「肉親を失う痛み」	268
第四十一話 「God降臨」	274
第四十二話 「怠惰の龍」	280
第四十三話 「決戦？前」	286
第四十四話 「神との戦い」	290
第四十五話 「終幕の咆哮」	298

主人公？紹介

兵藤一誠

種族：(一応) 人間

神器：赤龍帝の籠手

好きな言葉：鎧袖一触

好きな食べ物：稲荷寿司

嫌いな食べ物：白子

前世：うちはマダラ

使い魔：ティアマツト(自称・嫁)

容姿・髪型が前世と同じで眼が赤色。(但し、短髪で髪の色は茶色である)

ー概要ー

駒王学園に通う(自称)普通の高校生。

しかしその実態は、忍界に戦争を仕掛けた最強の忍、うちはマダラが憑依転生した存在。

イツセーの肉体に憑依したのは、彼が紫藤イリナと別れてから起きた交通事故により、死に瀕していた彼に宿ったのが切っ掛け。

故に本来の兵藤一誠を殺してしまったとして、当初は両親や他の人間に心を開かず、一人修行に励んでいた。

そんな彼が己の存在を認めしたのは、妹のイズナが誕生してから。

殺してしまった本来の兵藤一誠の分まで、兵藤一誠として生き、そんな自分を家族としてくれる家族を守ろうと決意し、今に至る。

因みにイズナの名付け親は彼。

前世での経験から、妹の面倒ばかり見るようになってからは、シスコンになってしまう。

だがそれを本人は悔やんでいない。

曰く、前世より充実してるからとの事。

前世と違い、仲間という存在にも理解を示し、また内心では頼りにもしている。

女心には鈍い………と言う事はなく、リアス達の好意にも気づいている。

が、今現在応える気はない。

尚、ちゃんと性欲は存在する。

―戦闘力―

前世からのスペック＋転生してからも鍛えていたと言う事もあり、並の相手では勝負すらさせてもらえず倒される。

写輪眼と輪廻眼は失ったものの、自身の魔力で須佐能乎を再現して見せるなど、魔力方面でも優秀。

取り敢えず才能に胡坐をかいている奴なら片手間で瞬殺できる。

他にも一瞥しただけで他人を幻術に陥れたり、相手の行動パターンを瞬時に見切るなど、眼に関しても常軌を逸している。

性質変化は五大性質変化、血継限界で終生のライバルたる柱間が得意としていた木遁。

主に火遁を使い、水遁は滅多に使わない。(あの扉間と同じ術なんぞ使えるかとの事)

籠手に関してはほぼ使わない。

倍加も普段自身に掛かっている重力を倍にしている以外では使わない。(使わないと言うだけでなく、使う機会がないとも言える)

ただし、ヴァーリとは違い、リスクなしで覇龍を自由自在に使いこなす。(歴代の怨念達を力で捻じ伏せ、屈服させたから)

ドライグ泣かせの宿主である。

前世とは違い、戦闘に関してそこまで意欲的ではなくなったものの、仲間と認められた者や家族に危害が加わるなら、躊躇なく敵を殺す。

とはいえ根本は強者との戦いを渴望しており、しかし決して満たさ

れることのない思いを味わっている。

第一章：旧校舎のディアボロス

第一話「兵藤一誠は転生者らしい」

「あ、兵藤君！おはよー！」

とある世界のとある学園、その名は駒王学園。

そこで日々平凡な生活を送る女性生徒に、俺――兵藤一誠は返事を返した。

「ああ、お早う」

「「「キヤーーーーーッ!!!」」」

……何時も思うのだが、どうして返事をしただけでこうも黄色い声がかかるのだ？

『それは相棒が女受けしやすい顔だからだ』

……それが良く分からないんだよ、ドライブ。

つと、こいつの名前はドライブ。

ウエルシュ・ドラゴン
『赤い龍』と呼ばれる伝説の龍だ。

……龍などは俺の前世には存在しなかったので、初めて目にした時は驚嘆したな。

まあ伝説の龍と言えどももう一体俺の知り合いにいるのだが……

まあ、それはまた後に教えよう。

『相棒は前世ではモテなかったのか？』

……聞くな。一応、子孫はいたのだ！

『……すまん』

……何だ、その嘲笑は。

『いや、何でも。……それよりも、相棒』

……ああ、分かっている。

「……………ハア」

俺は挨拶も早々に切り上げ、俺は教室に向かった。

感じる視線を無視ししながら。

……………そうだ。改めて自己紹介をしなくてはな。

俺は兵藤一誠。前世では……………うちはマダラと呼ばれた忍だ。

~~~~~

さて、勉学の講座も終わりを迎え、門を潜った俺を待っていたのは……………

「あー！お兄ちゃん!!お疲れ様〜!!」

にぱー、と天使の様な……………否！本物の天使以上の尊顔を見せながら俺に抱き付いてきた少女。

兵藤イズナ。俺の可愛い可愛い妹だ。

「おっと……………全く。イズナは甘えん坊さんだな」

「えへへ〜。だってお兄ちゃんが恋しいんだもん……………」

心底幸せそうに溜め息を吐くイズナに、俺の頬は限界まで緩む。

……………ああ、やはり弟や妹と言うのは、こんなにも愛しい！

更には名前が俺の前世の弟と同じ名前なのもあるのだろうか

……………俺は兎に角、イズナに目一杯愛情を注いだ。

両親もそんな俺に呆れつつも出来る限りのサポートをしてくれた。

その結果、イズナは所謂「ブラコン」と言うやつになってしまった。

まあ、俺としても変な男になつくよりはずっと良いのだがな。

『……………シスコンだな』

何とでも言え。

前世では卑劣なモフモフ水遁野郎に弟を殺されたんだ。

絶対に妹や両親は俺が守る!!

『……………そうっすか』

「はやく帰ろー！今日はイズナがママと料理作ったんだ！」

「お、それは楽しみだなー！」

俺はイズナの手を握ると、帰路に着いた。

因みに晩御飯はカレーと卵焼きだった。

形が少し崩れてはいたが、とても美味しかった。

~~~~~

「……………ふう」

夜、イズナを寝かせた俺は町外れで暴れていた悪魔を討伐した。

……………戦いの”た”の字すら知らん雑魚だったがな。

これならオオノキ達五影の方がまだマシだったな。

因みに今の俺の格好は前世での俺の子孫であったオビトが着けていた渦巻き状の仮面と前世の俺が身に纏っていた甲冑で正体を隠している。

まあバレる事はないだろうが、一応念には念を入れてだ。

……………さて、長居は無用だな。帰ろうー

「……………待ちなさい」

……………と思ったが、どうやら現実には非情らしい。

俺の目の前には紅髪的美少女……………リアス・グレモリーがいた。

隣に何故か巫女服で控えてる姫島朱乃含めて通称「二大お姉様」等と呼称されている。

更にそのリアス・グレモリーを守る様に立っているのは一年生の愛くるしいマスコットキャラと名高い女、「塔城小猫」と同年代のイケメ

ン王子、「木場祐斗」もいた。

……………オカルト研究部のお出座しか。

「…何の様だ。リアス・グレモリー」

「……貴方、こんな所で何をしているの？」

僅かに殺気を滲ませるリアス・グレモリー……………ま、ほんのそよ風程度だな。

「……別に。強いて言うなら、家族の安眠妨害を仕出かす輩を退治しただけだ」

これは本音だ。

コイツらが毎日の様に暴れば、イズナの安眠が妨げられてしまう。

そうなればイズナが寝不足による健康障害になりやがて……………考えただけでも恐ろしい。

「お前の手柄を盗ろうと思つての行動ではない事だけは言っておく」

「……………そう。分かつたわ」

「……部長。宜しいんですか？」

塔城がリアス・グレモリーにそう尋ねる。

「ええ。彼には悪意がないわ。それに……………家族への情愛に偽りはなさそうだしね」

「分かつてくれて助かる。……………じゃあな」

俺は転移魔方陣を展開し、家へと戻っていった。

……………

「……………部長。彼は一体」

私、リアス・グレモリーは謎の仮面の男が去つた後、その場に倒れ伏すはぐれ悪魔の遺体を消滅させて事後処理を行っている、祐斗が私に尋ねてきた。

「さあ……………でも」

「でも……………何ですか？」

私は、何となく知っている気がする。

あの不思議な渦巻き状の仮面の覗き穴から覗かれた赤い瞳――。

そんな人が、私達の学園に1人だけいるのを――。

第二話 「兵藤一誠は告白される」

「わ、私と……付き合ってください！」
「無理」

と、俺は見覚えのない黒髪の女の告白を2秒で一蹴し、帰路に着く。
そんな事よりも今日はイズナのテストの結果が来るのだ。
告白なんぞ、受けられるか！

『マジか……ま、この女は』

堕天使、だろ？

『気付いていたのか』

まあな。

関わったら録な事なさそうだからな。

おまけにこんな人気のない公園で、更に人払いの結界まで張っての
呼び出しなぞ怪しすぎる。

「そっか………うう」

「……………」

が、その女は何故だか涙目になり、座り込んでしまった。

……………これでは俺が鬼畜呼ばわりされてしまう。

それは不味いと判断し、渋々その女………確か天野夕麻に近付
く。

「……………何故泣く？」

「だって……………断ったら、君が……………」

「男一人殺せないとは。情けないな、レイナーレ」

刹那、背後から光力で構成された槍が俺に向かってきた。

「ッ、ダメ！避けてっ!!」

夕麻の声に構わず、俺は敢えて動かない事にした。

何故かって？

「ふん。神器を宿していてもたかが人間。呆気ないな……………」
「何ッ!？」

「えっ……………ッ!？」

「光力からして……………中級墮天使か」

こう言っただけだが、俺は戦闘狂に分類されるタイプだからな。
相手の実力を測る為に態と、と言っておこう。

……………が、どうやら雑魚らしい。

須佐能乎を使うまでもなかったな。

「な、何だそれは!？」

俺の須佐能乎（肋骨）を見て驚愕する墮天使。

そんなに驚く物か？

『誰だっけ驚くさ。俺でさえも見たことがないからな』

……………どうやら本当にこの世界に瞳術は存在しないらしいな。

まあ、どうでも良いか。

……………因みに瞳力がない以上、俺の須佐能乎は魔力とやらで構成
されているらしい。

だがチャクラ等は存在する。全く以て不思議な世界だ。

察しの良い奴なら分かると思うが、どうやら俺の魔力量は凄まじい
物らしい。

それこそ、魔王に勝るとも劣らないとか、何とか。

……………説明が長くなったな。

俺は呆然と浮かぶ墮天使目掛けて須佐能乎の剣を振るう。

「ツ!?ガアアアア!!」

ほう、少しはやるじゃないか。

片腕だけしか持っていていけなかったとは。

が、致命傷には変わりないな。

現に魔力で覆つても出血は止まらない。

「人間、風情が……………ツ!」

「その風情に片腕をもがれたのは何処の誰だろうな」

「ツ!!」

「まあ良い。目障りだ……………もう消えろ」

俺は須佐能乎の剣をもう一度振るおうとする。

が、それは叶わなかった。

「貴方達、一体何をしているの!?!」

……………グレモリー眷属の介入によつてな。

「……………リアス・グレモリー!」

「この辺一帯の、領主……………」

「私の領内で戦争の真似事は止めて貰いたいわね」

ゴウツ、と彼女の体から紅い魔力が迸った。

……………あれが、滅びの魔力か。

『ああ。触れた物全てを消し去る危険な魔力だ。と言うよりも相棒、よく分かったな』

前世から眼は良い方なんでな。

魔力の性質看破や、魔方阵からの攻撃看破まで、俺にとっては兎戯の様なものだ。

……………写輪眼は無くなっても、こればかりは染み付いた物らしい。

「ちつ、覚えておけよ！人間！貴様はこのドーナシークが殺す……ッ！」

「え、えと……ぐめんなきい、イツセイ君」

血を吐きながら、堕天使と夕麻は転移魔方陣で消えた。

さて、俺もおいとまするか……

「何処へ行くつもりかしら？」

と思っていたのに何故声を掛けられるんだろうか……？

『仕方あるまい』

くっそ………写輪眼があれば！

ハア……無いものにねだっても仕方ないか。

そう腹を括って振り替えると、眷属全員が目を見開いた。

「貴方………兵藤君？」

「………ですが何か？グレモリー先輩」

「………驚きですわ」

姫島朱乃が本当に驚いた様子で呟いた。

だから何がそんなに驚嘆する程なんだ？

『相棒。お前は普段魔力を殆ど封じ込めてるだろ？そんな奴があれば異質な量の魔力を持つていたら誰だって驚くだろう』

………そう言うものか？

取り敢えず須佐能乎を解除する。

「………今の力も興味深いけど、取り敢えず貴方には色々聞かなければならないわね。それで良いかしら？兵藤君」

「………拒否権はないんでしょう？」

……ハア、俺は今世でも平穏とは程遠くなるのか？

第三話 「兵藤一誠は勧誘される」

「……成る程」

その後、俺は家に（仕方なく）グレモリー眷属を招き、主のリアス・グレモリーに事の経緯を説明した。

「つまり、墮天使側は貴方の持つ神セイクリッド・ギア 器を脅威の対象と捉えて殺そうとした、と」

「或いは籠絡、だろうな」

ま、恐らく天野夕麻は無理やりさせられたのだろうが。

普通殺す対象の人間の心配なぞしないからな。

「……ですが、あの女の人は兵藤先輩に謝ってました」

「彼女は少しなら信頼出来そうだけど……」

「甘いな」

とは言え、信頼出来るかと言えば答えはNOだ。

「例え心優しくとも向こう側は俺を殺そうとした。腹に一物抱えていても可笑しくはない」

「……」

「人の腑はらわたなど、簡単に理解できんさ。そう、簡単にはな……」

全員が柱間の様に、腑を見せる程お人好しではない。

特に欲を抱いた者の腑は、おぞましく黒い。

穢土転生を創った扉間の様に……奴も何を考えてあんな禁術を創造したのやら。

「……………」

リアス・グレモリーは何か言いたげだったが、言葉が見つからないらしく、言い淀んでいた。

「話が終わりなら帰れ。今日は……」

「おにいちゃん!!」

と、俺の言葉に割り込むように、玄関から声が響いた。

普通ならイラツとなるが、その甘ったるい声音を聞いた俺は頬を緩

めた。

「たっだいまー!」

俺の愛妹、イズナの帰宅だ。

「お帰りイズナ。テストはどうだった?」

「うん!お兄ちゃんの教えてくれた所がテストにも出ててね!100点は無理でも90点は楽勝だよ!」

「そうか。フフ、イズナは賢いからな」

俺は立ち上がってイズナの頭を撫でる。

イズナは擦ったそうに身を振るが、手を振り払おうとはしない。

「えへへく。……お兄ちゃん、この人達は?」

イズナはここで漸くりアス・グレモリー達に気が付いた。

と言うか、俺も忘れていた。

余りにも!イズナが可愛すぎるからだっ!!

「……お兄ちゃんの知り合いだ。今大事な話をしているな」

「ふーん。あ、そーだ!今日お父さん達遅いんだって!ご飯どうする?」

「そうだな……。よしっ、お兄ちゃんと一緒に作るか!」

「……うん!」

にぱーと笑うイズナに、俺は思わず立ち眩みを感じた。

何だろうか。この笑顔を見ると、俺はこんなにも穢れているのを感じる……。

前世の俺なんて……。「待っていたぞー!ー!柱間ア!!!」とか叫んでたなあ……。

ああ、恥ずかしい……昔の自分に樹界降誕をぶちかましたい。「じゃあ部屋で待っててくれるか?」

「うん!イズナ待ってるね!」

俺はイズナと約束すると、改めてリアス・グレモリー達に向き直る。

「貴方の、妹さん?」

「……言っておくが」

俺は試すつもりで、殺気を放つ。

勿論、この部屋だけに充満するように。

「イズナや、俺の家族に手を出すならば……………俺は貴様等を敵と見なす」

俺の殺気に案の定、眷属達は顔をひきつらせた……………が、リアス・グレモリーは違った。

「……………私の領内の人達は、私の家族同然。絶対に手は出さない」

「言葉だけなら幾らでも取り繕える。言った筈だ。人の腑など、簡単には理解できんとな」

「……………祐斗。剣を寄越しなさい」

「え……………？」

「良いから」

リアス・グレモリーの言葉に戸惑いながらも、木場祐斗は何もない空間に剣を作り出した。

包丁サイズのその剣を受け取ったリアス・グレモリーは、自身の首に剣を突き付けた。

「ッ!？」

「部長!？」

「リアス、何を!？」

「……………もし、悪魔が貴方の御家族に手を出せば、私の命をあげる。貴方の大切な御家族とでは、私の命なんて釣り合わない事は分かっているわ。でも……………」

「……………」

「これが……………私、リアス・グレモリーの覚悟よ」

……………クククツ。

嘗てのお前と似たような事をする馬鹿がいたとはな。

―――柱間。

その覚悟に嘗てのライバルを見た俺はリアス・グレモリーの腕を掴んだ。

「お前の腑は、分かった……」

「……！」

「慣れないことをするもんじゃない。震えていたぜ？」

「まさか………試したの？」

「………信じよう、お前を。リアス・グレモリー」

リアス・グレモリーはどつと疲れたようにへたり込んだ。

「……有り難う」

ポツリと漏らされたその言葉には、隠しきれない程に、感謝の念が籠められていた。

「……………烏滸がましい事なのは理解してるのだけれど、兵藤君。私の眷属になってくれない？」

話も落ち着いた所で、リアス・グレモリーからそんな提案が出された。

眷属ね……………。

「悪魔になって、俺にメリットはあるのか？」

「ええ。と言つても……貴方にとってはデメリットかもしれないけど、寿命が延びるのよ」

「……………イズナと、生きれないツ!？」

その発想にたどり着いた俺は、稲妻が落ちた様な衝撃に見舞われた。

何と言う事だ……………だが、イズナは何れ結婚する身だ。

そろそろ妹離れするべき……………なのは分かっているのだがっ!!

「メリット云々は兎も角、この申し出は受けなくても良いのよ。私の身勝手な我が儘だし」

「……………」

「だけど、この申し出を受けないと言っても、私は貴方の御家族を見捨てたりはしないわ。そこだけは安心して」

「……………一応、考えておいてやる」

リアス・グレモリーの言葉に嘘偽りは無い。

少なくとも俺の中では、彼女への信頼は割りと高い方になっていく。

『後ろ楯を得る意味では悪くない話だと思うぞ。それにグレモリーとは情愛深い悪魔で有名だからな』

そうか。

それも視野に入れると、コイツの眷属になるのも悪くないかもな。

俺一人で家族を守れる事は守れるだろう。

だが、今の俺は前世程の力を持っている訳じゃない。

驕れる者は必ず足許を掬われる。

最強と呼ばれた俺やドライグも、最後には敗れた。

……………悪魔、か。

「あ、それと兵藤君。オカルト研究部に入らない?」

「……………悪魔がオカルト研究とはな」

「もうっ、そう言うのは言わないの!世界各地で確認されてるUMAを調査したりする部活なの。良ければどう?」

「それに兵藤先輩、帰宅部ですよね……………」

塔城、何故そんな事を知っている?」

「……………ま、暇潰しにはなるか。ただし、毎日は無理だ。俺には何よりも

イズナを優先する男だからな」

「それでも構わないわ」

「よし、入ろう」

『良いのかそれで?』

ま、新しい人生なんだ。

こう言う刺激的な生活をまた求めるのも、悪いことではあるまい?

『ハア……………』

――

さて、俺達兄妹が帰路についている途中の事だった。

「はうー！」

……………？

何の奇声だ？

しかも今のは外国語……………と、俺が振り向いた場所には、

「イタタ……………どうして転けてしまったのでしょうか？」

修道女服を着た聖女がいた。

どうやら転けたらしい。

「……………これ、お前のか？」

「……………私の言葉が分かるのですか？」

まあ、それなりに語学はかじっている。

「……………それは兎も角、もう一度聞く。これはお前のか？」

「は、はい！ありがとうございます！」

聖女はペコペコしながら受け取った。

そして、首に掛けていた十字架を握り締め、何かを……………と言うより神に申してるのだろう。

「私、アーシア・アルジエントと申します！貴方達は？」

「兵藤一誠だ」

「兵藤イズナです！」

「よしよし、よく挨拶出来たな」

「うー、もう子供じゃないよお……………／／／」

そう言いつつも、頬は緩みきっている。

もうさつきから俺の妹が天使過ぎて辛い。

因みに何故中学生のイズナが異国語を理解できると言うと、俺がイ

ズナの脳に日本語に聞こえる様に錯覚させているのだ。

まあ、幻術の応用だな。

本来ならイズナにこう言うことはしたくないのだが……除け者にして話し込むなど言語道断！

そこでやむを得ず、と言うことだ。

「可愛いですね！妹さんですか？」

「ああ、そうだ」

この少女……アーシアはいい子だ。

そう、俺は認識する。

誰だって自慢の妹を誉められるのは、嬉しいに決まってるからだ。

「……所で、この辺りに教会があるか、御存じですか？」

「教会？……町の外れに寂れたのがあるが」

確か廃墟だった筈だが………どういう事だ？

「外れですか……」

「……良ければ案内するが？」

「へ？」

と言うと、アーシアはポカーンとする。

「……宜しいのですか？」

「構わない」

「うん！イズナも良いよー！」

「……ああ、主よ……この出会いに感謝を……」

随分信仰心の深い聖女だな。

そして案内した後、俺達はアーシアと教会で話をした後、別れた。

そして、アーシアとイズナは友達になった。

妹の友達が増える事……兄として、これ程の喜びはない。

「二度と教会に近づいては駄目よ」
「知らん」

後日、リアス部長（そう呼べと言われた。変な拘りを持つ女だと思っただ。by一誠）に説教を受けたが、俺にとってはどうでも良いことだ。

第一俺は悪魔ではないと言うと、一応悪魔サイドの人間だから云々を口煩く告げられた。

「って、私の出番これだけ!？」

「喋らせてもらえるだけ有り難く思っておけ」

「酷いわ!!」

副部長？ マスコット？ イケメン王子？ 何の事やら

第五話 「兵藤一誠は墮天使と戦う?」

「さて……………」

俺は何時もの通り、イズナを寝かし付けた後で、アジアに案内した寂れた教会へと赴いた。

『相棒が行かずとも、奴ら悪魔がどうにかするんじゃないのか?』

それもそうだが、奴らは均衡状態を保つ意味で迂闊には動けない筈だ。

ならば、人間の俺が一番動きやすいから、動くだけだ。

それに、妹の友達が死ぬ事になるやもしれんからな。

『やはりお前の行動源は妹なのか…………』

当たり前だ……………と言うより、俺の行動源は妹含めた家族がそう
だ。

父さんと母さんを除け者にするな。

『すまん』

……………まあ、怒っても仕方ない。

と、気付けば俺は教会の入り口前に着いていた。

「あんれれく?こおんな所に人間の餓鬼が来ちゃノンノン!ですよお
?アレかな?俺ちゃんに殺されに来た酔狂なバカなのかしらん?
ひゃーはははは!」

……………本当の馬鹿がここにいます。

ふざけた態度を見せながら現れたのは、白髪の男。

手には剣の柄、腰には銃をぶら下げている。

「墮天使の関係者か?餓鬼」

「おいおいおいおい!自分の事棚に上げて俺ちゃんの事は餓鬼
呼ばわりですかあ!?気に入らねえなああ!!そんな訳で、即ぶつ殺
……………ブヘツ!」

奇声を発しながらバレバレのモーションで銃を撃ったソイツの一撃を余裕でかわし、蹴りで壁際までぶっ飛ばしてやった。

まあ、運が良ければ生きてるだろう。
それよりもだ。

「何時まで覗き見している気だ？」

俺は後ろの物陰にそう問い掛けた。

すると物陰からは……………確か、木場祐斗と塔城小猫？が現れた。

「あはは、バレてたんだ」

「バレたくなければここに来る前から気配を消すんだな」

「やっぱり先輩は、規格外過ぎます……………」

ほう……………

「目上の先輩に対して大した口の聞き方だな」

「イダイツ！痛いです先輩…………ツ！」

「ちよちよ、イツセー君!？」

俺は生意気な塔城にアイアンクローを決めてやった。

塔城は悶え、木場が俺を止めようとするが、無視だ。

とは言え、流石に可哀想か。

俺は1分程と考えていたアイアンクローを30秒で切り上げ、塔城を解放する。

「酷いです、先輩……………」

「それは兎も角、何故着いてきた？」

「…………部長からの指示でね」

曰く、この地で墮天使が何やら小細工を仕出かそうとしたらしい。
リアス・グレモリーはそれを知り、それを止めるタイミングを図っていたとか。

「その場に乗じて、俺の観察……………か？」

俺がそう聞くと、二人は黙りになる。

当たりか。

「まあ、今は知らない事にしてやる」

着いてくるなら勝手にしろ、とだけ呟き、俺は先を急いだ。

「着いてくるなら勝手にしろ」

そうイツセー君は言い残すと、その場を去っていった。

恐らく、彼が出会ったと言うシスターさんの元へだろう。

「小猫ちゃんは、イツセー君の事をどう思う？」

すると、小猫ちゃんはまだ頭を擦っていた。

よっぽど痛かったんだね……………でも、確かにあのアイアンクローは受けたくないと思った。

だって…………ただ頭を握っているだけなのにゴシヤツ!!メキメキメキツ!!とか鳴るんだよ？

普通じゃないよ。

「いろんな意味で、規格外です…………」

そうだね。

思えば、僕らの尾行にだって恐らく気付いていた。

イツセー君はここで僕らに声をかけたけど、来る途中にも気付いていただろうからね。

それに……………

「さっきの一撃、まるで見えなかったです…………」

そう、先程白髪の男を蹴り飛ばした一撃。

あの攻撃が全く見えなかったのだ。

スピードにある程度馴れている僕でさえ、だ。

それでいて壁を突き破った事から、蹴りの重さがよく分かる。

ドオンツ!!

「……さて、僕らも行こうか」

「……絶対に、私達無駄骨折りです」

言つてて虚しくなるから止めようよ、小猫ちゃん……………。

木場 side out

「アーシア、生きているか？」

俺はドアを蹴破り、中央の広場に現れた。

そこではアーシアが張り付けにされており、夕麻がそれを止めようと必死でもがいていた。

「イツセーさん?!」

「イツセー君!!」

『やはりあの女墮天使は穩健派らしいな』

……変わった奴だな。

まあ、それはリアス・グレモリー達も同じか。

「アーシア、少し眠っている。直ぐに終わる」

「あつ……………」

俺はアーシアと眼を合わせ、幻術をかける。

するとアーシアはたちまちぐたりと意識を落とした。

「貴様…………あの時の小僧!」

「夕麻。眼を瞑っている」

「えっ?」

俺は襲い掛かってきた神父や墮天使を……

「なっ!？」

「oooooooooo!!？」

須佐能乎の手で文字通り、薙ぎ払った。

その場に残ったのは、五体満足の夕麻と片腕を失った堕天使、そして、上半身の無くなった人間だった物だ。

上半身が無くなった腰からは血が鯨の潮吹きのように迸る。

直ぐ様夕麻は眼を反らした。

……やはり、アイツも眠らせる必要があったか？

「さあ、残るはお前だけだ。まあ、お前にはもう飽きているからな。一瞬で終わる」

「ふ、ふざけoooooooooo」

「水遁・硬水衝波」

俺は硬質化させた水を操り、ドリル状に回転させ奴の心臓目掛けて突き刺した。

その時点でもうその堕天使は死んだ………が、それでは味気がない。

「……弾けろ」

突き刺した水を爆発させ、身体を弾き飛ばした。

アーシアや夕麻に血肉がかかる可能性があるからな、そこは上空に打ち上げて行っている。

俺？見てから須佐能乎余裕でした。

………まあ、しかしあれだな。

「きたねえ花火だな」

第六話 「エピローグ」

翌日。

「今日からこの学校に通うことになりました、アーシア・アルジエントです！よろしくお願ひします！」

「同じく、天野夕麻です！宜しくね！」

『うおおおおおお!!』

リアスの計らいにより、アーシアと夕麻はこの学校へと通うことになった。

そしてアーシアは悪魔——つまり、リアスの眷属となった。

聖女が悪魔とはコレ如何にと思うが、俺が守ると言っても四六時中いれる訳でもないし何より後ろ楯が何もない。

夕麻の方——つまり墮天使側に立たせようにも、今回の事件は墮天使側が引き起こした物だから、あまり信用されなかった。(リアスに。まあそれは俺も同意する)

それだったらある程度の権力を持つリアスの方で保護すると言う形になったらしい。

まあ最終的には本人がそう決めたらしいから、俺はこれ以上何も言わんが。

因みに俺は転生しようにも全く転生出来なかった。

理由だど？察しろ、実力差が掛け離れすぎてるんだ。

『まあ予想は付いていたがな』

~~~~~

放課後。

オカルト研究部ではアーシアの歓迎パーティーが行われている一方で、俺はと言うと――

「おにいちゃん、美味しい?」

「ああ、美味しいよ」

イズナが作ったマフィンという菓子を食べていた。

優しいミルク風味の味が何ともイズナの優しさを現しているように……ふう。

「ねえねえ!今度お兄ちゃんに会いたって子がいるんだ!」

「俺に?」

「うん!……だめ、かな?」

「何を言う!イズナの頼み事なら何でも聞くさ!」

と言うよりもイズナ。お前のその子犬の様な上目使いは無自覚なのか?

くっ……このままではイズナに変な虫がついてしまう!

『もしそうなら?』

完成体須佐能乎で叩き潰す!

『即答かよ!』

悪いか!?

『……って、待てよ相棒。あの須佐能乎……まだ上位体があるのか!?!』  
当たり前だ!!

「それで、何時ならOKなの?」

「そうだな……その子の希望する日で構わないよ」

「分かった!」

ああ、俺の妹は天使の様だ………って言うか天使だったな。

が、その友人の子と会うその日、俺は衝撃的な出会いを果たそうとはこの時、欠片も思っていなかった。

くくくくくくくくくくく

イツセーがイズナの可愛さに骨抜きにされてる頃と同時刻のとある廃墟――

「てやあつー！」

『ぐうおおおおおおおッ!!!』

大きな巨体を押し潰す、青色の螺旋の輝き。

それを繰り出したのは、その巨体と比べるとあまりにも小さいと形容できる程に、幼い体躯の少年だった。

だが暗がりの為、その容姿の全容は分からない。

「ふう……………さて、そろそろ帰らなきゃな」

少年は印を組むように指二本を立てると、

「飛雷神の術！」

その場から姿を消した。

まるで瞬間移動をするかの様に。

## 番外幕 「閃光の再会」

いきなりだが、今日はイズナの友達と出会う約束の日。  
緊張する理由など何処にもないのだが、何故だか落ち着かない。  
もしも……もしもだ。

イズナのか、か、か、彼氏だったら、どんな顔をすれば良い？  
笑顔で樹界降誕か？

憤怒の顔で須佐能乎か？

ドライグよ、どっちがベストだと思う？

『いや……どっちもワーストだと思うのだが……』

何を言う！

もしかしたら……結婚を前提に真剣交際してるやもしれん！

本来であれば、そこは兄貴として笑顔で認めるのだろうか………だが！

もしそうだったとしても、俺は絶対に首を縦には振らん！

イズナに嫁入りはまだ早すぎる!!!

ピンポーン

「……来たか」

俺はスツと立ち上がり、玄関まで向かう。

なおイズナは今日の出掛けており、その友達の家には俺だけがいる  
ことを伝えてあるそうだ。

「はい………ッ!？」

俺は扉を開けた瞬間、呆気に取られた。

性別は、男。

金髪碧眼の、所謂美少年。

だが、俺は……この男を知っていた。

「初めまして、イズナちゃんのお兄さん。俺の名前はーーーー」

何故ならコイツはーーーー

「波風ミナトです。……兵藤一誠さん。いえーーーーうちはマダラ」

前世にて、俺の月の眼計画を阻止すべく穢土より甦ったーーーー火影の一人だからだ。

「……お前、まさか俺と同じ」

呆気にとられていたが、奴が俺の前世の名前を口にした事で、俺は思わず尋ねた。

すると、奴もまた頷いた。

「ええ。僕も、前世の記憶を持っています。木ノ葉隠れの里・4代目火影としての記憶を」

……やはりか。

俺以外にも、忍世界からの転生者がいようとはな。

だが俺が感知できないとは………まあ、やらなかったただけだが。

「そして、あなたと戦った事も」

「……フツ。それで？それを確認する為に態々俺の元に来たのか？」

そもそもイズナから話を聞いたならば、コイツは俺が転生者だと気づかない筈だ。

「以前からこの街で、今までに感じなかったチャクラを感じた。でも

それは、不思議と僕は知っていた。そう……うちはマダラの物  
と、殆んど同じチャクラだったから」

「成る程な……で、本題だ。お前はそれを確認してどうする？今こ  
こで俺と戦うか？」

俺がそう尋ねるが、奴は動こうとしなかった。

「最初はそのつもりでした。あなたが甦ったのなら、また良からぬ事  
を仕出かす前に止めなければ、と」

「……………」

「だけど、こうやって対面して、改めて分かった。今のあなたに、野心  
はないと」

「……野心を持つには、大事な物が増えたからな」

そう、今の俺には守るべき家族がいる。

例え世界の全てを敵に回したとしても。

「それを聞いて、安心しました。それに何より、イズナちゃんはおなた  
を心底慕っていましたから」

「……そうか」

そして、立ち話も何だと言うことで、俺は波風ミナトを家へと上げ  
た。

「ミナト。俺達以外にも、転生者はいるのか？」

「……いえ、俺が確認した中では、俺達以外にはいないかと」

そう言われて、俺もチャクラを感知すべく眼を閉じる。

が、

「……確かに、俺が知る人物はいないな」

若しくは、力を抑えているか、だな。

「でも、あなたはうちはマダラとして転生した訳ではないんですね」

「ああ。気づけばこの少年の肉体に宿っていた」

目の前の男は生前と変わらない姿なのにな。

「じゃあ、コレからも宜しくお願いします？」

「言っておくが、イズナは嫁にはやらんからな」

「アハハ……」

取り合えず、釘は刺しておく。

こうして俺は、前世の記憶を共有する仲間と出会えた。



## 第二章：戦闘校舎の種撒き鳥

### 第七話「兵藤一誠は不死鳥と会う」

……最近魔法使いの俺が躍進しすぎて忘れてないだろうか？

元忍者のイツセーだ。

久しぶりすぎるから俺も話を覚えていないが、もう新しい章に入っているから、そこのところは覚えておけ。

今日、俺はオカルト研究部へと足を進めていた。

何故かと問われればアジアに今日来てくれと言われたからだ。

恐らくはリアス……部長からだろう。

因みにその本人は昨日俺に夜這いを仕掛けてきた。

どうしたか？

木遁で縛ってお帰り願った。

どうせなら火遁をオマケで発火してやろうかとも考えたが止めておいた。

どうせならイズナの彼氏とか言う野郎に噛ましてやろうと思ったからだ。

それに何だかんだで、奴はレベルが高い女だ。

……多少我が儘なきらいがあるが。

『相棒』

分かっている。

……これは、中々の実力者だな。

俺が部室に入ると、そこには変わらぬ面子と……見慣れない銀髪の女がいた。

誰だ？

「リアスお嬢様。此方は？」

「それはこっちの台詞だ」

「……………私はグレイフィア・ルキフグス。リアスお嬢様の従者です」  
「兵藤一誠だ」

俺が名乗り返すと、女……グレイフィアは納得した様に頷いた。

「貴方が……赤き龍の帝王に取り付かれた者」

「……………言っておくが、コイツが勝手に取り付いてきただけだ」

俺が籠手を出してそう答える。

全く赤龍帝等と中学生が考えそうな二つ名で呼ばれるなど、全くもって気に入くない。

『……………酷いぞ、相棒』

宝玉からは気落ちした声が響いた。

が、俺は容赦はせん。

「違うのか？ならば格下の取るに足らない存在の俺達人間に取りつかなければマトモに名乗ることも出来ないのは何故だ？」

『……………もう泣いて良いか？』

「勝手に泣いてろ」

『うおおおおおん……………！』

……………情けない龍の帝王（笑）だな。

「まあ、この泣いてる大蜥蜴は無視して……………何故お前の様な従者がここにいる？」

「……………それはこれから説明致します」

「大丈夫よグレイフィア。私から説明するわね……………実は」

部長が口を開いたと同時に、部室の一室に魔方阵が展開される。そしてそこから巻き上がる炎。

「ローローフェニックス」

そう木場の奴が口にした時、魔方阵から人影が現れた。

「……ふう。久々の人間界だ」

露になったのは、スーツをだらしなく着崩した悪人風のイケメン……?だった。

誰だ?この小虫然とした男は?

「やあ、愛しのリアス。会いに来たよ」

「ライザー……!」

ソイツがそう齒の浮く様な文句を言えば、部長は親の仇の様に睨み付けた。

「兵藤一誠様」

「ん?」

「この方は元72柱のフェニックス家の三男坊の、ライザー・フェニックス様です。そして……ここにおられるリアスお嬢様の許嫁で御座います」

……

「おい部長。許嫁にするならもつとマシな男を選んだらどうだ?」

「私だつて好きで選んだんじゃないわ!!」

……今ので大体察した。

恐らくは親同士が勝手に決めたとかそう言う奴か。

「あ?……って、人間の小僧が何故この場にいる?」

「一応この部活の部員だからな。ぽつと出の貴様にとやかく言われる筋合いはない」

「……生意気だな、小僧。俺の嫌いなタイプだぜ」  
「……………」

「まあ良い。リアス、まだ君は否定すると言うのかい？」  
「当然よ！」

まあ、ここから先はお家の事情云々と、人間の俺にとってはおおよそどうでも良い言い合いが始まりー

「では、レーティングゲームでお決めになられますか？」  
と、ゲームによって決めることになった。

まあカードゲームで世界を救ったりも近年の常識になっているし、有りと言えば有りだな。

「勿論、受けるわ。このゲーム」

「……へえ、受けちゃうのか。で、リアス。まさかとは思うが、この小僧を除いた面子でフルなんて言わないよな？」

「これで全員よ」

「ハハハハ！だったら止めておきな。俺は既に公式戦を体験してるし、何回もタイトルを取っている。それに……………」

奴が指を鳴らすと、ズラリと増える人口密度。

「俺の眷属は全員揃っている。とても無謀な挑戦になるぞ？」

奴の眷属か……………特徴的過ぎるから、嫌でもこの男の本質が分かる。

眷属のどいつもこいつも女、女、女……………ただの助平野郎だ。ソイツは何を思ったのか、側にいた女を抱き寄せ、俺に自慢気な顔を見せる。

……豪火滅却喰らわせたらどうなるやら。

「どうだい人間君。君にとつては羨ましい限りだろう？」  
「……………」

「フツ、驚いて言葉も出ないか？」

「……ああ。仮にも婚約者の前で別の女を抱くなど、俺にとっては考えられん程の尻軽男だと、思った」

尻軽——その言葉に、奴は面白い程に表情を歪めた。

「……小僧。今何と言った？」

「好き勝手に女を侍らせてウハウハしているただの尻軽ローストチキン煩惱野郎、と言ったんだが？どうやら鳥は本当に鳥頭らしいな」

「……ミラー・ソイツに目に物見せてやれ！」

「はい」

奴の怒声に、棍棒を持った女が突っ込んでくる。

……須佐能乎で潰すか？

『止めておいた方が良くぞ』

……そうだな。

こんな蠅程度の奴相手に展開していたら、須佐能乎の貴重さが無くなっていくからな。

『そこかよー！』

俺はドライグの声を無視して、馬鹿正直に突き出された棍棒を素手で掴む。

……魔力とかでコーティングしているのかと思っていたが、そのままとはな。

俺は目の前の女を一瞥すると——

「……………ッ！」

「ガハッ……………!?!」

手刀で奴の心臓を貫いた。

「あ……………ああ……………つ！」

幻術

だ

動かなくなつた女を尻軽男目掛けて蹴飛ばして返してやる。

ソイツは慌てて抱き止めると、此方を睨み付けてきた。

「ミラ!! 貴様、何をした!？」

「俺はただ振りかかる火の粉を払つただけだ。気に食わないからと言つて眷属をけしかけるとは……………どうやらフェニックス家ではマトモな教育をしていないらしいな。よほど人手不足だと分かる」

「ツ!!」

……………やれやれ、何故これを挑発だと分からないのやら。

しかし面白い程素直に反応してくれるな、この尻軽男は。

「……貴様、レーティングゲームに出ろ」

「っ、ライザー様！」

「正気なの、ライザー!?!」

「当然だ。この場にいると言うことはただ者ではないのだろうか？ならば出る権利はある……それに、人数不足のリアスには丁度良いハンデだ」

「……コイツ、人を見る目ないのか？」

『全くだ。何故相棒との力量差に気付かんのか……。リアス・グレモリーも止めていると言うのに』

そうだな。

「……まあ、これもまた面白そうだ。」

それに俺は戦闘狂だ。戦えるなら戦わせてもらう。

「……良いぞ。その挑戦、受けてやる」

「今から精々怯えて暮らせよ？フェニックスの炎に焼かれるんだからな」

「……お前の烏賊臭い炎よりは、マッチ棒の炎の方が数千倍マシだろうな」

「ッ！絶対に、貴様は俺が沈めるッ!!!」

三流悪役の様な捨て台詞を残して、奴は去った。

「……さて、戦いの日が楽しみだ。」

## 第八話 「兵藤一誠は若者をしごく」

「これは立派な屋敷だな」

さて、俺がああ尻軽焼き鳥男からの挑戦を受けて翌日の出来事だ。現在俺はリアスが所有する屋敷にいた。

……本人曰くこれでも「別荘」らしいが。

金持ちの感覚は分らん。

「さて……………早速だがお前達に訓練を付ける」

『はい…』

そしてここに来た理由は……………特訓だ。

懐かしいな……………こうして昔は柱間やイズナと組手をした記憶が甦る。

「木場、塔城、姫島は俺が特訓を付ける。そして部長、お前にも俺と……………後一人付ける」

「イツセー君が全員を見るのかい？」

「ああ……………影分身の術」

俺が印を組むと、実体を持った幻が現れる。

「凄い……………」

「さて、もう一人を呼ぶか……………ハア」

ここで言うのも何だが、俺はあまりコイツを呼ぶのを好まない。

何故か？……………嫌いからだ。

必要ないのだが、前世からの癖だろう。

俺は親指を噛んで血を出すと、地面に手を叩き付けた。

「口寄せの術！」

召喚用の魔方陣から人影が現れる。

そしてその人影は……………俺へと飛び付いた。

「待っていたぞイツセー！早速結婚か!？」

「ハア……………離れる。ティアマツト」

青髪のスタイル抜群の美人。



人間に見えるかもしれないんコイツの名前はティアマツト。

天龍に次ぐ強さを持つ五大龍王の一角で、その中でも最強クラスの実力者だ。

そして……俺の使い魔だ。

「……ティアマツト。自己紹介をしろ」

「フフン、私はティアマツト。イツセーの嫁だ」

「違う。使い魔だ」

バツサリ否定する。

リアス達はティアマツトの名前に驚いていた。

「ティアマツトって………五大龍王の!?!」

「そうだ。こんな残念な性格だが……最強クラスの実力者だ」

「むう、イツセーは相変わらずつれないな。私を完膚なきまでに叩き潰したお前だからこそ、私の婿になれる権利があるのだぞ?」

「そんな権利海の彼方に沈めてやる」

イズナとの結婚なら………。

「リアス。お前には俺とティアマツトの二人で教え込む。良いな?」

「む、無理よ流石に! 龍王にそんな彼女を叩き潰した貴方を相手取るなんて……」

「お前に拒否権は有ると思うか? と言うより、あの尻軽焼き鳥男の嫁になりたいなら逃げてでも良いが?」

まあ、それならそれで俺も楽だ。

それを言うと、奴は漸く決意した様だった。

「……分かったわ。イツセー、ティアマツト。宜しく頼むわ」

「良い度胸だな小娘。イツセーの愛人候補に認めてやろう」

「馬鹿かお前は」

—————

「行くよ!」

ダツ、と木場は木刀を構えて走り出すと、次の瞬間には俺の目の前に迫っていた。

俺は難なくそれを止めると、足払いで奴を転ばせる。

「っ! まだだよっ!」

何とか踏み留まった木場は今度は俺の背後に回り込む。

当然それを見抜いていた俺は木刀を背後に回して防ぐ。

それを見て再び前に現れ、木刀を縦に振るった。

俺が真上に掲げると、フツと木刀が消え、俺の脇腹に決まる。……と、思っていたか?

「……………」

ガンツ!

「っ!」

「隙アリだ」

俺は木刀を呆然とする奴の頭に乘せた。

「……………参ったよ」

……………さて、評価を下すか。

「率直に言わせてもらおう。……単純過ぎる」

「……………」

「基礎は殆ど満点、教科書のお手本通りの太刀筋にフェイント……………ただそれだけだ。お前には応用力が足りない。自分の攻撃が防がれた、ならば次の攻撃に移る……………それは良い思考の判断だ。だがそれすら教科書通りだ。戦いで教科書通りのルールが通用するのは幼稚園のお遊戯会レベルのいざこざだけだ」

「……………」

木場は真剣に俺の話を聞いている。

「それと、もう少し持久力をつけろ。さっきの攻防だけで息が上がっているのも、直すべき点だ。それに……………気付いた事もあるはずだ」

「……………一歩も、動いていない」

木場が噛み締める様に呟いた答えを、俺は肯定する。

「今のお前と格上の相手がぶつかればこうなると言うことだ。まあ、現実を知る者と知らぬ者では大きく差が生まれる。お前は現実を受け止めているだけでも成長性はある」

……飴と鞭は大切だな。

「そのスピードを維持し続ける持久力……それを踏まえて、もう一度だ」

「……うん。もう一度頼むよ、イツセイ君」

――

Lesson 2 マスコットをボコるのって罪悪感湧かない？  
いいえ、クレイジーサイコホモにはそんなのありません

「えいつ……！」

「……………」

塔城が殴り、蹴りを放つのを片手間で防ぐ俺。

数分間そのやり取りが続き、塔城は気づけば荒く息を吐いていた。

「……………っ!!」

勿論まだ休憩などと言ってはいない。

息つく塔城に構わず足で顎を蹴り上げる。

「ふぎやっ!？」

猫みたいな奇声を発して地面にのめり込む塔城。

「おい、生きてるだろ。起きろ」

「……………」

「さっさと起きろ。崖つぶちのチビ助」

コイツが気にしててであろう禁止ワードで呼び掛けると、先程まで死人の如く動かなかった塔城が勢いよく飛び上がり、俺に殴りかかってきた。

心なしか、先程より力が強い。

……さつさとこの程度の力くらい引き出せば良いのだがな。  
俺は塔城の腕を掴むと勢いよく半回転し、宙に浮かせる。  
無防備となったその背中に勢いを付けた拳をぶつけた。

結果――塔城は木々を薙ぎ倒しながら煙の中に消えた。

……………手加減とは、難しいな。

『まさか本気か?』

まさか。

手加減はしてるさ。

『手加減とは一体……………』

「おい、生きてるだろ。返事しなければ死んでる事にするぞ。チビ」

「……………生きてますっ!!」

「だったらさつさと返事しろ。ただでさえ時間が無いんだぞ」

俺は医療忍術で塔城の傷を軽く癒してやると、感じた点を伝えていく。

「塔城。お前は殴る際に素手だろう?」

「はい……………」

「そこに魔力を纏わせろ。それだけでも威力は段違いだ」

「魔力……………でも私、魔力は得意ではなくて」

「お前の場合軽く構わん。地力はかなりある方だからな」

そう言うと、塔城は薄く魔力を拳に纏わせた。

「よし。今度はそれを維持した状態で組手を行う」

「……………宜しくお願いします」

――

Lesson 3 巫女をボコすのって何だか調教プレイみたい

じゃね?」

「行きますわよ!!」

姫島は魔方陣から極太の雷を放つ。

「ふん」

俺は雷遁（名前はまだない）を発動し、奴の雷と同じ大きさのそれ  
で相殺する。

「土遁・地動核」

俺は足元の地面を隆起させて、同じ目線に立つ。

姫島は隆起した土を狙って今度は水流を撃ってきた。

「水遁・水鮫弾の術」

対抗するべく水で形作った鮫をぶつける。

水同士がぶつかり合い、大きな水飛沫を生み出す。

俺は構わずに突っ込み、一瞬で姫島に肉薄する。

姫島に触れると、そのまま術に移行する。

「土遁・加重岩」

「え……きやつ!？」

姫島に掛かっている重力を倍加させると、姫島は一瞬で大地へと吸  
い寄せられる様に落ちていく。

そしてその先には、予め地動核で形成した針山が待ち受けていた。

「っ!!」

姫島は咄嗟に雷で針山を消し飛ばし、直撃は避けた。

が、落下の勢いは止まらず、そのまま地面にのめり込む。

「うっ………体が……」

「……」

俺は降り立つと、姫島の重力を通常に戻す。

「……完敗ですわ」

「………確か女王は王以外の駒の力を扱えるんだったな？」

姫島に返事はせず、俺は確認する。

「ええ、そうですわ」

「魔力を統括する僧侶の方は満点だ。威力も規模も問題ない。騎士は  
……木場程ではないがそこそこ使えている。及第点と言った所か」

「……」

「問題は……戦車だ」

「っ」

痛いところを突かれた様に、姫島は気まずそうにする。

「お前、攻撃は兎も角防御の方を疎かにし過ぎている。攻撃は最大の防御とは言うが、お前の場合は攻撃の為に防御を捨てている様な物だ。さつき威力も規模も問題ないとは言ったが、俺の様にお前の一撃に余裕で耐えられる者は大勢いる。その後、スタミナのないお前では相手の攻撃に対処出来ず……死ぬぞ」

「……返す言葉もありませんわ」

「もう少し力の配分を考えろ。攻撃にばかり片寄っていては、持久力が持たん。そうだな……この後の特訓、お前は一切反撃するな。俺の出す術全てを防御しろ。それと、反撃するなどは言ったが、攻撃の相殺ならば良しとする」

「分かりましたわ」

「では、行くぞ」

—————

Lesson 4 学園のマドンナ？何それ？クレイジーサイコ  
ホモは遠慮しません

「ほれほれどうした？」

リアスとの特訓はひたすらに俺とティアマツトが奴を追いかけて回し、奴は滅びの魔力を使いそれに対抗すると言うもの。

流石に生身では俺でも危ないので、コイツとの特訓では須佐能乎を使っている。

と言っても腕だけだが。

そして今俺は奴が放った魔力を須佐能乎のデコピンで弾いた所だ。

「な、何で消し飛ばさないのよっ!？」

「イツセーだけだと誰が言った？」

「キャアアッ!？」

理不尽なのか、俺に反論するリアスだが、そんな事やってる暇があるなら少しでもその理由を考えてほしい物だ。

須佐能乎が消し飛ばない理由は奴が使う魔力はただ投げているだけだからだ。

言うなれば、滅びの魔力の性質に頼りきった弱い一撃。

そんな程度のもので、俺の須佐能乎が消し飛ばすと思うな。

今、ティアマットの発動した魔法で奴のジャージが一瞬で煙と化した。

乳房が丸見えだが、そんなの気にする俺ではない。

容赦なく須佐能乎のパンチで地面を陥没させていく。

「ハア、ハア……………こ、こんなの無茶苦茶だわ……………」

「それ逃げろー」

その辺の木をへし折って投げつける。

リアスはそれを消し飛ばす。

「ティアマット」

「ふふ、了解だ」

俺は印を組み、ティアマットの手元には幾重もの魔方陣が展開される。

「う、嘘……………よね……………？あ、アハハツ」

この後の展開が読めたのか、リアスは引きつった笑いを浮かべる。

「火遁・豪火滅却!!」

「フルバーストだっ!!」

「あああああああああっ!!!」

リアスがどうなったかは敢えて言わん。

……………この一撃が原因で、周りの風景がこぎつぱりとした事だけ、教えておこう。

「『今日はここまでだ』」

分身を含めた俺達が言うと、全員物言わず倒れた。

………大袈裟すぎやしないか？



## 第九話 「兵藤一誠は若者と語らう」

木場 side

やあ、皆……………。

本当は挨拶するんだろうけど、今はそんな余裕がないんだ……………。

原因は、僕達の仲間のイツセー君の特訓……………もとい拷問だ。

何せ此方の攻撃を悉く往なされ、更に返ってくる攻撃は全て此方の命を削りにかかっているほどなんだ……………。

終いには眼を瞑ったままで僕の剣激を捌ききってしまった……………彼は本当に人間なのかな？

…………とまあ、「これ君のストレス発散じゃないのか？」と言っても過言ではない特訓の一日目が漸く終わりを迎えた。

朱乃さんや小猫ちゃんも同じく死んだ魚の様な顔付きだったから、僕と同じ気持ちを味わったんだと思う。

…………一番酷いのは、部長だった。

龍王最強のティアマツトさんに鬼の様な…………と言うより鬼も逃げそうな強さを持つイツセー君二人と特訓していた部長は、終わった瞬間静かに倒れ伏した。

それに対してイツセー君は「大袈裟な」と言っていたけど……………全然大袈裟じゃないよ！

そしてそんな鬼畜と言う言葉が誰よりも似合うであろうイツセー君は、

「……」

部長の額に手を当てていた。

「イツセーさん、何をしているんですか？」

唯一イツセー君の特訓を受けていないアーシアさんがイツセー君に質問した。

「コイツの気を整えてるんだ。傷はお前の神器で直るが、体力等は回復せんからな。まあ、明日には全快だろう」

イツセー君が手を放すと、心なしか顔付きが穏やかになった。

気まで扱えるんだね、イツセー君は………。

「さて、夕食はしつかり食べておけ。でないと明日の拷も……特訓には付いていけないぞ」

「今拷問って、言いました……」

「うん、言ったね」

「木場、塔城。お前らには倍の特訓量を課してやる。ありがたく」

「すいませんすいません!!」

……本当に鬼畜だよ。君は！

「……ちっ」

舌打ちした!?

――

イツセーside

イツセーだ。

今日はグレモリー眷属の特訓を課して一日目が終了した。

……やはり、十日間では短すぎるな。

まあ、基礎は確りしているし、後は応用力を着けさせればどうとで

もなる。

……ああ、イズナが恋しい。

ラウンジに出ると、そこには先客がいた。

「……起きていたか」

「……イツセー」

リアスは本を閉じて、軽く伸びをする。

「ゲームの参考書か」

「……こんなの、気休め程度にしかならないのだけどね」

リアスは苦笑いでそう呟く。

「……フェニックスか」

「………聖獣として奉られるフェニックス同様、その炎はあらゆる物を焼きつくし、流す涙はあらゆる傷を癒す。だからライザーは負けたことがない」

……ゲームでは、その不死身性はチートと言っても過言ではない、か。

「彼の戦績は10勝2敗。でも、その2敗は懇意にしている家への配慮だから、実質無敗。とてもじゃないけど、無謀よね」

「……なら、何故お前は戦う?」

俺は問うた。

コイツの戦う理由を。

別に理由はないが……敢えて言うなら気になった。

「私は、リアス・グレモリーよ」

奴は眼を伏せると、静かに語り始めた。

「けど、何処まで行ってもグレモリーの娘……そう見られてばかりいる。それが嫌ではないのよ。でも……それが、重くて」

「……名前に縛られ、己が望む事……恋愛が出来ない、か?」

「………ええ。私自ら選んだ人と暮らして、キスをきて、子作りして……他愛ないけど、それが幼い頃の夢。でも、それが叶わないのかもしれない……この戦いは、そんな我が儘を言い通せる最後のチャンス

なのよ」

「……………」

名前に縛られない、己を己として見てくれる者を求める、か……………。

「なら、叶えてみる」

「え？」

リアスは呆気に取られた顔をする。

「幼い頃の夢だろう？夢は叶えてこそだ」

「でも…………私にフェニックスを倒す手段なんてっ」

「そうやって逃げる気か？」

「っ」

逃げる、と言う言葉にリアスは顔をしかめる。

「傷付かず、己の望む夢の中に逃げるのは楽だ。それに対し、夢を求める為に戦うのは辛いし、痛みを伴う。だがな…………夢に、夢に逃げて、そこには何も無い。あるのは空虚だけだ」

「……………」

「空虚な夢に逃げるより、夢を掴む為に進んだ方がよっぽど楽だ。後悔もないしな」

……………俺にとっては、耳が痛くなる説教だ。

『こんなの、嘘っぱちじゃねーか!!!』

『ナルト…………皆の幸せの邪魔をしているのだ。お前は…………』

以前の俺は、手を取り合い、前に進むことを恐れた。

『違う、マダラ……オマエハ、救世主デハナイ』

その結果、哀れな程に踊り、そして果てた。

………フツ、こんな俺を見たら、お前達は何と言うんだろうな。

柱間………ナルト………。

「………信じろ、お前自身を。掴む為に研鑽し続けた、リアス・グレモリーを。お前が望むのなら、俺はお前を勝たせてやる」

最後にそう言い残し、俺は眠りに着くべく戻った。

## 第十話 「get the glory」

兵藤一誠だ。

あれから拷も………もとい特訓を終えた俺達は今、試合場所となる異空間の校舎にいた。

今はリアスの指揮の元、作戦を立てている。

まずは姫島と木場がトラップを仕掛ける。

そして俺と塔城で体育館を確保……あわよくば破壊。  
そこからは一人一人摘まんでは投げていくスタイルだ。

まあ此方は戦力差が少ないからな、あの金髪小便小僧（名前？ 忘れた）も体育館は抑えたいだろうから、此方が先に確保すれば良いことだ。

「さて、行くぞ塔城」

「はい」

塔城はオープンフィンガーグローブを着けていた。

俺は前世から着ている甲冑だ。

因みにアジアはリアスの元につく事になっている。

彼女には単独行動は危険すぎるからな。

そんなこんなで体育館に到着した。

中には………

「四人か」

「……………どうしますか？」

「一気に雷遁で吹っ飛ばすか、火遁で放火するか……」

「突入しましょう」

即答か。

……まあ良い。

「少しは特訓の成果を見せてもらおうぞ」

「……はい」

俺達は扉を蹴破ると、そこには猫耳を着けた双子に、以前俺が幻術にかけた棒使いの女、それとチャイナ服の女がいた。

「来たわね。グレモリー眷属」

「それとライザー様に喧嘩売った人間！」

「勝手に向こうが買ったただけだ」

そう言っつて、俺は体育館の二階にある手摺に飛んで腰掛ける。

「戦わないの〜？」

「お前達程度、ソイツ一人で充分だ」

「……その言葉、後悔させてあげるわ！」

そう言っつと、チャイナ服が塔城に向かって飛び出した。

接近戦闘を仕掛ける辺り、恐らくは塔城と同じ『戦車』か。

ソイツは蹴りやパンチを織り交せて攻撃するが……遅いな。

そんな程度のスピードじゃあ………

「……遅いです」

「っ!!」

地獄の猫は落とせないな。

塔城はそれらを特に大きく動くことなくかわすと、相手の拳に合わせカウンターを浴びせた。

拳には微量だが魔力が宿っている辺り、ちゃんと進歩はしているらしい。

しかもインパクトの瞬間に拳に捻りを加えていたが故の今の一撃は、相手の意識を刈り取るには充分だった。

「っ！」

「今のって……」

「ハァー！」

「キヤーツ!!!」

呆氣に取られる猫耳の双子目掛けて、今度は魔力を纏わせた力強い後ろ回し蹴りを喰らわす。

防御の為に突き出したチェーンソーも纏めて砕き、猫耳は仲良く壁にのめり込んだ。

残った棒使いが慌てて此方に攻撃するが、塔城は冷静にそれを受け止めて、上へと女ごと投げ飛ばす。

「キヤツ!?!」

「ここからは……私のオンステージです」

塔城は空中で背後を取ると、回し蹴りで脇腹を蹴った。

「……ぐっ!?!」

だがそれだけでは終わらず、その反動を利用して一回転すると、今度は反対側から殴打を加える。

そのまま付け入る隙すら与えず、相手の上に回り腹に回し蹴りを叩き込む。

そしてそのまま……地面へと叩き付けた。

「……キヤーツ!!!」

女は口から血を吐いて昏倒する。

塔城も同じ様に叩き付けられる筈だが、そこは考えていたらしく、地面に体が付く手前で受け身を取っていた。

「……ふっ。」

「……ふう、っ。せ、先輩?」

一人で完勝した塔城の頭を乱暴だが撫でてやった。

「……及第点、と言った所だな」

「……厳しいですね」

「まあ、よくやった。行くぞ」

「……はいー」



因みに体育館はしめやかに爆発四散させてもらった。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』三名、『戦車』一名、撃破』

……俺の一撃ではないだろう、多分。

「……………ふん」

「にやつ!？」

体育館の跡地を後にして直後、俺は塔城を抱き寄せた。突然の事で顔を赤らめている塔城だが、無視して須佐能乎を纏う。

直後、爆発音が俺達を包んだ。

「ふふっ。狩りを終えた後が一番油断しやすいのよ。貴方達は駒が少ないから、一人失うだけでも致命的ー！ー！ーツ!!!?」

……………と、馬鹿みたいに悦に入って語らう馬鹿女の頭上から、雷が落ちた。

俺も一応攻撃の準備はしていたがー！ー！アイツも中々やるようになったな。

「良い一撃だ。姫島」

「ふふっ、ありがとうございます」

「ぐう……………!!」

チラリと横目で見ると、女は何やら瓶を持っていた。

「さて、何かを仕掛ける前に…………」

「ええ、分かっていますわ」

姫島は雷の鞭を作り上げると、そのまま馬鹿女を打ち据える。

その度に身体から煙が上がるが、姫島は何のそのと鞭打ちを続行する。

「ちよ、まっ！ー！ーギヤアアアア!!!」

「あらあら、こんな程度で悲鳴を上げるなんて……………羨のなっってい

ないワンちゃんですわねっ♪たっぷり苛めて差し上げますわ!」

.....

「姫島の奴、生き生きしてるな」

「輝いてます、朱乃先輩」

暫くして、漸くその女はリタイアされた。

恐らく、あのメイドも見ていられなくなったのだろう。

何せ気絶しても姫島と俺の水遁で目を覚まさせられ、今度は二本に増やした鞭打ちだ。

しかも俺の木遁で縛り付けて、な。

そして、俺達は「フェニックスの涙」を手に入れた。

あの馬鹿女が持っていた物だ。

まあ持っていて損はないだろう。

アーシアがいる以上、徳も無いだろうが。

次いで、『兵士』三人のリタイアが知らせられた。

————木場か。

「姫島、塔城。リアスの元に向かえ。俺の予想では恐らくこの校庭に奴は眷属をフル動員する筈だ」

「その隙に部長を叩く————そう言うことですか?」

「ああ。何せ此方には本当に戦力が足りない」

————数の上では、だが。

「他に犠牲を強いようとも、『王』一人取れば終わりだ。念には念を入れて、と言うわけだ」

「分かりましたわ」

「了解です……」

「頼む。後で木場も送り込む」

塔城と姫島はリアスの元へと向かった。

「飛雷神の術」

俺は木場に予め仕掛けておいたマーキングに向けて、転移した。

本来なら”あの”扉間の術など使いたくもないが………ミナトから教わったものだと言い聞かせれば不思議と腹が立たなかった。

人徳の違いだろうか。

「うわっ、イツセー君かい？」

「どんな状況か……は聞くまでもないな」

チラリと見れば、木場は汗一つ掻いていない。

「やるようになったな」

「君に褒められるとは、思わなかったよ……」

「慢心はするなよ？」

「勿論さ」

と、その時だった。

「私はライザー・フェニックス様の『騎士』カーラマイン！こそこそと腹の探り合いなど飽きた！リアス・グレモリーの『騎士』よ！いざ尋常に勝負しようではないか!!」

………何だ、あの如何にも狙い撃ちしてくださいと言わんばかりの馬鹿は？

あれか？主が馬鹿だと眷属も馬鹿になるのか？

「名乗られてしまった以上は、『騎士』として出ない訳にはいかないね。ゴメンよ、イツセー君」

そう言っつて、木場は飛び出して行った。

………ここにも馬鹿がいたか。

『どうするんだ、相棒』

何だ、いたのかドライブ。

『……………うおおおおおん!!!』

どうするも何も、あの剣馬鹿が出た以上は、俺も出ざるを得んだろ  
うよ。

俺はドライブの咽び泣く声を見無視して校庭に出た。

「お前もここにいたのか、人間の少年よ」

声を掛けられてそちらを見ると、顔の半分には仮面を着けた女が  
いた。

そして後ろからもう一人現れた。

「全く、頭の中で剣で塗り潰された者同士、泥臭くて堪りませんわ」  
「そんな場所に態々出てくるお前も同じ穴の貉だな」

「な、何ですってえ!?このレイヴェル・フェニックスに向かって何と言  
う口の聞き方ですの!？」

「知るか、チキン・リトル」

フェニックス……………と言うことは、恐らくあの小便小僧の血縁か。

まあ、何でも良い。俺には関係がない。

「ち、チキンですってえ!？」

「そうだ。お気に召さないのなら鳥頭のドリル女でどうだ？」

「こ、このフェニックスを……………鳥頭!？」

「鳥は鳥頭と言うだろう?事実を言ったままで」

「ツ!!イザベラ!!」

激昂した鳥頭(女)が叫ぶと、仮面の女が前に出た。

「ハア、君も中々面倒な事をしてくれるな。お嬢は怒ると面倒なんだ。  
だが……………君は危険すぎるからな。ここで、倒させてもらおう」

仮面女が構えを取る傍らで、俺は木場の戦いを傍観する。

「くっ!剣筋が全く読めない!？」

四方八方から襲い掛かる剣撃に、騎士女は防ぐだけで手一杯らし  
い。

……………アイツ、スピードを完全に出し切っていないな。

とは言え油断の気配もない辺り、慢心は全く持っていないと見て良いな。

「っ!!」

魔力で造り出した剣の幻影が消えて、真なる太刀が迫る。

女は防御しようと、剣の腹を差し出すが——その剣はあっさり貫かれた。

「——ッ!!」

女は驚愕も冷めやらぬまま、リタイアとなった。

「魔剣劇・蒼雷」

奴が俺との拷問の際に編み出した技だ。

奴が創る魔剣に蒼い雷を纏わせる、ただそれだけ。

だがその雷は、奴の魔剣全ての頑強性・斬撃性・刺突性を上げる効果がある。

頑強性ならばちよつとやそつとの一撃では壊されない程の耐久性を与え、斬撃性ならば断てぬ物はないと言わんばかりの切れ味を与え、刺突性ならばそこら辺の槍より遥かに優れる貫通性能を与えてくれる。

奴は他にも雷を応用した技を編み出したが……まあそれは追々だ。

「……どうした、構えないのか?」

……そうだった。完全にこの女を忘れていた。

どうしようかと悩んでいる時、旧校舎側から爆音が轟いた。

「っ、イツセー君!」

「落ち着け。恐らくあの小便小僧だろう」

やはり俺の予想は当たっていたか。

「申し訳ありませんが、貴方達はここから一步足りとも進ませませんわ」

ドリル（鳥頭と付けるのが面倒になった）が言うのと俺達の周囲に結界が張り巡らされた。

何も言わない俺を見てか、ドリルは嘲笑を浮かべる。

「貴方達はここでリタイヤとなつて貰いますわ。これ以上こんな泥臭い戦いをーーー」

「飛雷神の術」

「ゴメンね」

「続けるの、は……………?」

俺はドリルの騒音を無視して、木場”だけ”を飛雷神でリアス達の元へと転送した。

「り、リアス様の『騎士』は……………!?!」

「次からは術を無効化するトラップでも張るんだな」

そう吐き捨ててやると、ドリルは肩を震わせる。

俺はそれに構わず、その場に座り込んだ。

「……………何のつもりですの」

「……………分からないのか?戦つてやると言ってるんだ」

そう言つてやると、仮面女は不快そうな顔をする。

「私達を舐めているのか?」

「お前達小砂利程度、座つたままの方がハンデになるだろうからな。どうせなら一度に掛かつてこい。後から沸いて出られても迷惑だ」

「……………後悔するなよ」

それを最後に、奴等は全員飛び出してきた。

—————

木場 side

「紫電一刀!」

「ぐがあっ!」

イツセー君の術で部長達の元へ転移した僕は、魔剣に紫電を纏わせて、ライザーの腕を切り裂いた!

「この餓鬼い!!」

「お相手は祐斗君だけではありませんわ!」

その通り。

逆上したライザーに向けてけたたましい雷が大地から迸り、ライザーを痺れさせる。

「……我等がオカルト研究部の副部長、朱乃さん。

「隙在りです……!!!」

「ぐっぱあっ!!!」

動けないライザーの腹に、容赦のない拳打を浴びせるのは、僕達オカルト研究部のマスコット、小猫ちゃん。

その一撃の重さは、辺りに響く鈍い音で察せる。

意識が刈り取られそうになったライザーだが、小猫ちゃんに蹴りを見舞った!

小猫ちゃんは後ろに飛んでかわすが、その炎により少しばかりの火傷を負ってしまう。

だが……

「皆さんの傷は、私が癒します!」

それも僕達の癒し担当、アーシアさんが回復してくれる。

それがどんなに心強いか。

「喰らいなさい、ライザー!!」

そして勇ましい声と共にライザーに滅びの魔力の弾丸を見舞うのは……主であるリアス部長。

ライザーは無抵抗のままそれを全弾喰らい消し飛ぶが、瞬時にその肉体は再生された!

「無駄だと言うのが分からんのかリアー!」

「でやあああッ!!」

「グギャアッ!？」

その怒声を無視する形で部長は「ライザー」の腹に蹴りを叩き込んだ!

予想外の攻撃に苦悶の声を上げるライザー!

そしてライザーは目を見開いていた。

何故なら「ライザー」蹴られた箇所が消し飛んでいたからだ。

「ふっ!!」

その隙に部長はゼロ距離で滅びの魔力をぶつける!

その一撃に込められた魔力は凄まじく、旧校舎の屋上が崩壊し始めた!

「こ、この……」

「やあっ!!」

「がはあっ!!」

空中を飛びながら部長は強烈な踵落としを見舞った!

そしてその足には「滅び」の魔力が纏われていた。

これこそが部長の新しい戦い方。

部長らしからぬ体術に、最初は僕達も目を疑ったよ。

でも、滅びの魔力を抜きにしても、部長の脚力は凄まじい強さを誇っていた。

その蹴りのスピードに加え、両足のアンクレットを起点として膨れ上がる滅びの魔力の力は、どんなものだろうと決り、消し飛ばす。

……しかし、イツセー君も突拍子もない事を思い付いたよ。

そのまま旧校舎側のグラウンドに叩き付けられるライザー。直ぐ様復活するが、その再生スピードは心なしか遅い。



「ライザー、これで勝負を決めるわ」

部長が手元に魔方陣で砲身を形作る。

そこにチャージされる莫大な魔力。

それを見たライザーは顔を青ざめさせる。

「ま、待てりアス！この婚約は、悪魔の未来のために必要で、大事な事なのだぞ!!君はそれを理解している筈だ!!」

「ええそうね。でも、この戦いに勝てば自由な恋愛を認めるーーーーそう言う約束の筈よ。そして何より、私が迎える婿は貴方ではないわ!!!私は私の夢を叶える!!その為ならどんな試練だって乗り越えていくわ!!!」  
「ーーーーさあ、行くわよ皆!!!」

『はい!!!』

「四聖元素・阿鼻狂乱!!!」

炎で形作られた朱雀、水で形作られた玄武、風で形作られた青龍、雷で形作られた白虎が次々にライザーを襲い、ライザーは爆炎に包まれる!

「タイタンズブレイクツ!!!」

小猫ちゃんの拳を中心に集まった周りの岩石。

それらが集まり終えると、その手にはまるで小さな隕石の様な岩が出来上がり、小猫ちゃんは宙に浮いたライザー目掛けて直接叩き付けーーーー凄まじい爆発が鳴り響いた!!

「舞えーーーーー剣舞の鎮魂歌」  
レクイエム・ソードダンス

ライザーを蒼雷で空中に留めてーーーー彼の周りを無数の剣が囲んだ。

僕が剣を振るうと、一斉に剣がライザーを滅多刺しにする!

最後に剣を力強く下に下ろすと、蒼い雷がライザーを襲った!!

「殲滅の、ルイン・ザ・バースト滅殺爆砲オオオオオオオオオオツ  
!!!!!!!」

そしてライザーに引導を渡したのは、部長が放った滅びの魔力の大奔流だった。

その一撃はライザーを飲み込みやがてーーーー空間に穴を開けた。

『……ライザー・フェニックス様。強制リタイアです。戦闘不能と判断されたので、この試合、リアス・グレモリー様の勝利となります』

ーーーー

「そ、そんな……………」

レイヴェル・フェニックスは驚愕していた。

兄であるライザーが、不死身であるフェニックスが、敗北する様に。今だかつてない衝撃が、彼女に渡来していた。

そんな彼女に、掛けられた声があった。

「信じていた絶対が崩れ去ったのは、一体どんな気分だ？」

胡座を掻き、頬杖を付いている甲冑を着た人間——兵藤一誠。現在、この場にいるのはイツセーと彼女のみ。

他の眷属は全員、強制リタイアシステムにより先に脱落していた。レイヴェルもボロボロではあるが、彼女は先にリタイアとなった眷属達と比べるなら、意識がハッキリとしているだけまだ幸運である。

他の眷属は皆、意識不明の重体患者として、冥界の病院に搬送されている。

辺りにはその壮絶さを物語る様に、粉碎された剣の成れの果てや服の切れ端、辺りに漂う焦げた臭い、血に彩られた木々の山々で溢れかえっていた。

「自惚れの強いお前達焼き鳥一族に言っておいてやる」

イツセーは立ち上がって、まだ立ち上がる事が出来ないレイヴェルの前に立った。

「この世に絶対など存在せん。お前達が当たり前と信じていた絶対は、今を以て消えたのだ。その事を認知せん限りは……………一生負け犬のままだ」

「……………ッ」

レイヴェルは、この日初めて涙を流した。

自分が今まで小馬鹿にし、嘲笑っていた悔し涙を、彼女は今止めどなく流していた。

「……………文句があれば、何時でも俺の元へ来い。奴はもう、自由なのだからな」

もう興味はないとばかりに、イツセーは勝利を噛み締めるグレモリー眷属の元へと向かった。

「……………兵藤 一誠……………」

そこでレイヴェルの意識は、途絶えた。

## 第十一話 「後日談？」

魔王サーゼクス・ルシファーはかなりと困惑していた。

彼は現在、リアスとライザーの試合を観戦し終えた所であった。

「……………参ったな」

彼は、妹の幸せを第一に願っていた。

たとえ、冥界を統治する魔王であったとしても、彼は何時もそれを願っていた。

だが、そんな肉親への情だけで冥界は変わらない。

彼はそれを分かっていたからこそ、今回の婚約に対しても口を出さなかった。

今回の結果は、恐らくはライザー側の勝利だろうと、他の面々もそうだが、彼自身そう思っていた。

だが、結果は思わぬで覆ることになった。

リアス・グレモリーの勝利——

この結果を見て、他の上級悪魔は驚愕を露わにした。

かく言う彼自身も、この結果に関しては最初は信じられなかった。

だが、勝利は勝利。

彼は、密かに安堵した。

これで妹に、望む恋愛をさせてやれると。

だが、それに関して手放しで喜べない事が一つある。

今、サーゼクスの眼前のモニターに映っているのは、古風な甲冑を身に纏い特徴的な髪形をした赤目の少年、兵藤一誠。

従者のグレイファイアに聞けば、リアス達は彼指導の下で特訓を受けたらしい。

だがそれにしても、あまりにも強くなりすぎている。

そして、彼自身の強さも。

――

時系列はイツセーがライザーの眷属を一人で相手にしていた時まで遡る。

「その余裕ひん剥いてやるにやー！」

「覚悟するにやー！」

胡坐で座り込んだ彼に猫娘の兵士二人が突っ込む。

だがその拳はイツセーに届かず、青いオーラによって阻まれる。

「え？」

刹那――二人は強い衝撃により地面に叩き伏せられ、一瞬で意識を刈り取られた。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』二名、リタイア』

グレイファイアの音声アナウンスで、レイヴェル・フェニックスは我に返ってイツセーの方を見る。

見れば、イツセーの周囲を半透明の肋骨が覆っており、その横から大きい骨の腕が剥き出していた。

おそらくはあれが二人を――と思案がそこまで至る間に、イツセーは次の行動に移っていた。

「火遁・爆龍炎弾」

複雑に手を動かした後、彼は口から火を吐いた。



乎が持つ魔力の剣で受け止め、後方のイザベラの蹴りは須佐能乎でガードした。

「……………ハア」

イツセーはあろうことか溜め息を吐くと、須佐能乎の剣を横にスイングする。

それだけの動作だったが、シーリスの体はいとも簡単に浮かび上がり、持っていた剣は粉々に砕け散った。

無防備な彼女に対し、イツセーは須佐能乎のパンチを食らわせる

「キヤアアアア!!」

だが、それでもイツセーは容赦はしない。

「木遁・樹槍殺」

イツセーの周囲の大地が隆起したかと思うと、樹木が伸びて出てきた。

それは生き物のようになると、先端が鋭い槍上に変化し、宙を舞うシーリスの体を容赦なく貫いた。

シーリスは悲鳴を上げる事無く落ちていき、やがてフィールドからリタイアした。

「シーリ——」

シーリスの名を叫ぶイザベラを須佐能乎の腕が掴み上げた。

そのままイツセーの目の前まで持つてくると、イツセーは彼女を一瞥する。

「……………あ、あぁっ……」

直後、イザベラは何かに怯えるように震えだす。

そんな彼女をイツセーは須佐能乎の腕で強く握りしめ、

「雷遁・恐撃波」

「ッ!!!」

須佐能乎の手から放つ赤い雷でイザベラを感電させる。

轟く雷鳴に悲鳴を掻き消されながら、イザベラもまたフィールドから消えた。

「……………さて」



「っ」

イツセーの瞳がレイヴェルへと振り向いた時、彼女は本能的に一步後退る。

これ以上この場にいれば、自分も先に散っていった眷属達と同じようになる、と。

そう理解できたからこそ、彼女は完全に彼に恐怖してしまっている。

何せ本当に彼は立ってすらいないのだ。

それに汗一つ掻かず、息一つ乱れていない。

「残るはお前だけだ」

「……………貴方の力はよく分かりました。そして、私では貴方に勝つ事も出来ないと言う事も」

「だったらどうする?」

「……………それでも、私にも誇りがあるのです!何があっても引く訳にはいかないのですから!!」

そう決意の啖呵を切ると共に炎を揺らめかせる彼女を見て、イツセーは――

「……………青いな」

その一言で片付けた。

レイヴェルはそれを聞くことはせず、イツセーに特攻を仕掛ける。

そして――

――

「……………ス様、サーゼクス様!」

と、ここでサーゼクスは誰かに呼ばれているのに気付き、そちらに視線を向ける。

「グレイファイアか」

その正体は、彼の眷属であり伴侶のグレイファイア。

「どうかなさいましたか?」

「ちよつと、彼の事でね」

彼、という言葉が誰を指しているのか分かっていたグレイファイアは特に追及はしなかった。

「驚いておられるのですか?」

「ああ。だがあんな強さを見せた以上、彼は嫌が応にも他の勢力から狙われるだろう」

「……その時は、如何なさる御積りで?」

「妹に未来を切り開く切っ掛けを与えてくれた者だからね。その時は必ず守るさ」

まあ、必要ないのかも知れないけど、とサーゼクスは苦笑いで付け加えた。

「お優しいですね」

「そうかな? こういう時は、甘いと言うべきだろうに」

「それは貴方の欠点であると同時に、美点でもあります。咎める事が出来ましようか?」

そう努めて冷静に返すグレイファイアに、サーゼクスは内心叶わないと漏らすのだった。

### 第三章：月光校庭のガシャコンソード 第十二話「騒動の予感より妹」

「お兄ちゃん、ここの計算ってどうやるの？」

「ん？ここはな……」

久しぶりだな、イツセーだ。

今日は久しぶりの妹とのスキンシップを楽しんでいる。

と言ってもそんなやらしい話ではない。

今度のテストのために勉強を見てやってるのだ。

「この公式をキチンと押さえておけば、大したことはないぞ」

「うん！ありがとつ、お兄ちゃん！」

はあ、癒されるなあ……なぜこうもイズナは可愛いのか。

俺が無我の境地に至っている時、空気を読まずに電話が鳴り響いた。

「お兄ちゃん、電話だよ？」

「……もしもし」

僅かに殺意を湧き立たせながら電話に出ると――

『あ、イツセー？実はちよつと――』

「お掛けになった電話は、ただいま使われておりません。死ね」

『ちよつ』

俺は声で誰なのかを察した瞬間、光の速さで電話を切った。

「お兄ちゃん、良かったの？」

「ああ、大丈夫。さ、勉強の続きをするぞ」

「…うん！」

そのとき見せてくれたイズナの笑顔は、額縁に入れて永遠に飾りたいほどの検案だった。

――

「どうして電話を切ったのよ!？」

次の日、リアスから電話を秒速で切ったことを問い詰められる。

「ああ、すまん。丁度携帯が砂漠に埋もれてな」

「嘘おつしやい!留守番電話サービスが死ねなんて無慈悲に吐き捨てないでしよう!？」

「ちっ」

「舌打ち!？」

リアスは暫く肩で息をしていたが、息を整えると、改まって口を開いた。

「……実は今度、ここに教会の関係者が来るの」

「……教会?」

教会といえれば天使陣営の者共だろうか?

何故悪魔の領域に?

「お前、何か問題でも起こしたのか?」

「……一々突っ込まないわよ。何でも教会の保管物が何者かに盗まれたらしいの」

「それが何かは?」

「お兄様に聞いたけど何も教えてくれなかったわ。」

「だが教会の関係者が出向くと言う事は、余程の物が盗まれたと言う訳か」

そう言うと、リアスは頷いた。

「で、それを何故俺に話した?」

「貴方にもその場に参加してほしいの。祐斗のストッパーとして」

……何故木場が?

「…実はあの子、教会の関係者を憎んでいるの。下手にあの子が暴れて、今の状態を悪化させる訳にはいかないから、協力してほしいの」  
「……分かった」

……正直関係ないんだが、一応俺はこいつ等と関わって、非公式だが悪魔のゲームにも参加した。

まあ悪魔陣営と捉えられるのが普通か。

「で、その日付はいつだ？」

「——明日よ」

——ほう。

「そう言うのはもつと早めにいえ??」

「あ、ああ—————っ?!?!?!?!」

俺は目の前の馬鹿にアイアンクロウを仕掛けるのだった。

—————

次の日——オカルト研究部の部室には何時もの面々の他に、客人が二人いた。

青髪に緑のメッシュが入った女と、栗色のツインテールとかいう髪形をした女二人だ。

そう、この二人こそ、教会から遣わされた剣士らしい。

……それと、気づかない振りをしているが、先程から栗色の女がチラチラと此方に送る視線が鬱陶しい。

「——実は、この前に教会で保管されていた聖剣が盗まれた」

……思っていたより話が重いな。

教会が保管している聖剣となれば……エクスカリバー、が妥当な所か？

「私たち教会は3つの派閥に分かれていてね、所在が不明のエクスカリバーを除いて6本の剣を2つずつ所有していた。それが少し前、墮天使によって3本が奪われた」

「エクスカリバー……」

やはりか。

そして、その名を確かめるかのように呟く木場。

……………姫島といい、塔城といい、此奴といい、問題を抱えた眷属だな。

此奴の今の声音——恐らくは復讐か。

「我々がこの地に來たのはエクスカリバーを奪った墮天使がこの町に潜伏したからだ。我々はそれを奪取、もしくは破壊するためにここにきた」

「墮天使に奪われるくらいなら、壊した方がマシなもの」

「…貴方達の聖剣を奪った墮天使のことを教えて貰えるかしら？」

そんなの簡単に教えてもらえる訳が——

「墮天使、コカビエル」

あつた。

そのコカインだかコカ・コーラとかいう墮天使が何を考えてエクスカリバーを盗んだのかは知らんが、ロクな考えの持ち主ではないな。

「これは大物ね……………それで？貴女達の要求は？」

「なに、簡単だ。今回の件に、悪魔の介入を許さない。それが我々、教会側の総意だ。つまり、今回の事件で悪魔側は関わるなどということだ」

随分と横暴な連中なのだな、教会関係者というのは。

と、他人事のように考えていると、

「…そろそろ帰らせてもらおう。お茶などの気遣いは無用だ……………つと、君は確か…アーシア・アルジェントだったな」

「は、はい……………」

青髪は近くにいたアーシアに気づき、声をかけた。

「……………まさかこんな地である『魔女』と会うことになるとはな」  
「ッ！」

”魔女”、その言葉にアーシアは体を震えさせた。

「あなたは確か、一部で噂になっていた元聖女……。悪魔をも治癒してしまう力のせいで教会から追放された少女……」

冷たい目の青髪とは違いツインテールは憐れみを込めた目線で見ていた。

「まさか悪魔になっているとはな……。安心しろ、このことは上には報告しない。……だが、堕ちれば堕ちるものだな。聖女と崇められた者が、今では本物の魔女になっているとは……」

——魔女、か。

随分と自分勝手な奴らだな。

『相棒、あの女を止めんのか?』

俺には関係がない。

こう言うのは主人公がやるべきだからな。

「だが君はもしかして、まだ神を信じているのか? 君からは罪の意識を感じながらも神を信じる信仰心がまだ匂う。抽象的だが私はその言うのに敏感でね」

「捨てきれない、だけです……ずっと、信じてきたものですから……ッ！」

だが、まあ——

「そうか。ならば私達に斬られるといい。我々の神は罪深い君でも、それでも救いの手を差し伸べてくれるだろうからな……。せめて私が断罪しよう。神の名に——」

「もうその辺りにしたらどうだ? 程度の低さがありありと見えてくるぞ」

言いたい事は言わせてもらおうがな。

「……………何だ君は？見た所、悪魔ではないようだが」

「兵藤一誠。一応悪魔陣営の人間だ」

「そうか。ならば邪魔はしないでもらおうか？いくら悪魔陣営といえど、人間を斬る事はタブーだからね」

「……………ふっ」

「何が可笑しい？」

成程な……………大体分かった。教会と言うのがどんな所なのかが。

「いや、失敬。教会と言うのは剣士に全うな義務教育を受けさせていないのだと思うと、哀れでな。いや——自分達が勝手に求めた存在が違う物だったらと分かったら即座に掌を返すような連中の巢窟が、真面目なワケがないな」

「……………今のは、教会への挑発か？」

「だったらどうすると言うんだ？お決まりの神の名のもとに断罪、か？はっ……………馬鹿馬鹿し過ぎて挑発する気も失せた」

「ッ!!」

青髪が激昂したように、布に包まれていた得物を俺に向けて振りかぶった。

「ゼノヴィアッ!! イッセー君、逃げて!!」

私、紫藤イリナは同僚のゼノヴィアに向けて叫んだ。

確かにいくら幼馴染だからって今のは腹が立つけど、ただの人間にエクスカリバーを振りかぶっちゃ……………!!!

だがそんな私の心配とは裏腹に、イッセー君はゼノヴィアが持つエクスカリバーの刀身を掴んだ。

しかも、素手で。

これには私も、ゼノヴィアも、そしてリアス・グレモリー達も驚きを隠せないでいた。

「ッー」

「……………僅かな挑発でこの様か。信者の貴様等がこんなだったら、貴様等が敬う神というのも随分矮小な存在なのだな」



「何イ……!!」

ゼノヴィアったら完全に怒っちゃってる……!!

……でも、今の発言は私だつて容認できる物ではなかった。

「……イツセー君、今の言葉、撤回して」

怒りを押し殺しながらイツセー君にそう言うと、イツセー君は怪訝な顔でこつちを向いた。

「……さつきから誰と勘違いしている?」

「……?」

「俺はお前の様な奴、知らん」

……………え?

そう吐き捨てるように返された言葉の意味を理解するのに、私は数秒掛かった。

そんな私を無視して、イツセー君はゼノヴィアに向けて話し始めた。

「矮小だろう? アーシアは例え悪魔であろうと傷を負っている奴を放っておけないほどに優しい。神と言うのは、どんな存在にも慈悲を与える物だと俺は認識しているんだが? お前達の中の神は、自分が望んだ存在でないから簡単に見放す——ククツ、これを矮小と言わずして何と呼ぶんだ? いや、自分勝手、器の小さい神気取りの三下——とも言えるな」

「——ッ!!!」

教会関係者からすれば最大の侮辱に、ゼノヴィアの顔が大きく歪む。

だけどさつきから握られているエクスカリバーはゼノヴィアがどれだけ動こうが全く動かない。

「——そうだね。やっぱり教会は滅びるべきだ」  
そんな彼に賛同するかのようにゆらりと此方に近づいてきたのは、  
金髪の美男子。

「貴方は……………」

「君達の先輩さ……………失敗作のね」

そう言った途端、部室内に剣が咲いた。

### 第十三話 「どうせ折るなら割り箸の方が良い」

さて……………木場が喧嘩を売った（俺も売った？知らんな）事により急遽教会の剣士二人組と戦う事になった訳だが……………正直、さっさと帰りたい。

「…………イツセー君。本当に私を覚えてないの？」

俺の目の前にいる、確か……………紫藤イリナだったか？が、悲しそうに聞いてきた。

「知らんな。そんな御託はどうでも良い、さっさと来い」

が、俺としてはこんな奴全く覚えがないので一蹴させてもらった。それを聞いてか、奴は泣きそうな顔をする。

……………ハア、これだけでコイツへの興味が失せた。

俺が奴の眼を一瞥すると、意を決したのか日本刀？の様に細い刀を構えた。

「…………これも恐らく我が主の試練！何年かぶりの幼馴染の記憶を、剣を交える事で思い出させるしかないのね！じゃあイツセー君、神の名の元に！私の事を思い出させてあげるわ!!」

……………コイツ、馬鹿だな。それも超がつく程の。

イリナは日本刀を横に持つてくると、馬鹿正直に突っ込んでくる。

…………格上相手に正面突破とは。コイツ本当に戦いを学んでいるのか？

俺は奴の眼で追えない程度のスピードでかわし、一瞬で奴の背後を取る。

刀身が空を切った事に驚くイリナ。

「えっ?!何処………キヤツ!?!」

振り向くよりも早く、俺は奴から刀を奪い取った。

「この波動……………成る程、これも聖剣か」  
「奪った所で無駄よ！聖剣は神の祝福を賜った者にしか扱え  
な————」

俺は奴の戯れ言を無視して————聖剣で心臓を貫いた。

随分と呆気ないな。

「あ、あぁっ……………!!」

この程度の幻術にあっさり掛かるとは。

その場に立ったまま震えるイリナを、俺は軽く蹴っ飛ばした。

それだけだったが、奴の体重が軽かったからなのか、俺が手加減を間違えたのか、イリナは木々を巻き込んで倒れた。

『……相棒。あの女にどんな幻術を掛けた?』

……ただ、奪った聖剣で奴の心臓を貫いただけだが?

『えげつないな』

何を言う。

勝手に魔女だ聖女だと囃し立てるコイツらには負けるさ。

「イリナッ!?!」

「……余所見とは余裕だね」

木場は案外冷静に、だがその目には確かな憎悪を揺らめかせながら、青髪を攻め立てる。

だが青髪も負けじと、木場が飛ばした剣の幻影を文字通り吹き飛ばした。

「破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣……文字通り、あらゆる物を破壊する聖剣だよ」

「成る程……壊しがいがあると言うものさ」

木場は魔剣に紫電を纏わせる。

それを見ていた青髪は訝しげに顔を曇らせるが、そのまま木場に向かって聖剣を振り下ろした。

あらゆる物を破壊する聖剣……とは言うが、壊せない物もあるらしいな。

「な、に……?!」

木場の魔剣は——無傷だった。

明らかに狼狽する様子を隠せずにいた青髪に構うことなく、木場は激しく攻め立てる。

「くっ、何故破壊されないんだ!?!」

「僕達の怨嗟の籠った得物だ。簡単には崩れないよ」

……チツ、あの馬鹿。

調子に乗っているな。

恐らくあの青髪も馬鹿ではない。  
アイツの油断に気付いて冷静に対処する筈だ。

……仕方がない。

俺は剣をぶつけようとした二人の間に立ち塞がった。

「!?」

「イツセー!!」

俺は青髪の聖剣をイリナの持っていた聖剣で、木場の魔剣を素手で受け止めた。

「お前……!」

「イツセー君。一体何の真似だい? 邪魔をするなら……ッ!」

「少し頭を冷やせ」

俺が軽く殺気を放つと、木場は冷や汗を掻いて後退り。

青髪も僅かに後退していた。

が、気丈にも俺にこんなことを言ってきた。

「……お前、何故イリナの聖剣を扱える」

……声に怒りが籠っているな。

そんな教会の無関係者が聖剣を持っているのが気に食わないのか?

「さあな。神の祝福だか何だか知らんが……俺には関係ない事だ」

「……やはり君は、神の名の元に断罪せねばならない様だね」

奴が破壊の聖剣を構えるが、俺は大して構えない。

と言うより構える必要がない。

さつきから見ていたが……コイツでも、俺を楽しませてはくれない。  
所謂雑魚だからだ。

成長性はあるがな。

「……私を嘗めているのか」

「お前程度、構える必要がないだけだ」

「……………そうか。ならば……後悔させてやる!!!」

奴が繰り出した太刀筋「……」眼”を扱うのに長けた俺には全てスローモーションに見えるそれを、態と同じスピードで合わせて弾いていく。

「っー」

正面では敵わないと悟ったか、奴は素早く（くどい様だが俺にはスローモーション）上へと飛ぶと、大きく聖剣を振り下ろした。

「……………」

俺は奴が剣を振り下ろした瞬間に……跳んだ。

ドゴオオオオオンッ!!!

聖剣の一撃により、その場にはクレーターが出来上がる。

奴は大きく肩で息をしている。

「それでももう終わりか?」

「ッ!?!」

土煙が漂う中、奴は必死に辺りを見渡す。

やがて煙が晴れると、俺がいたのは……奴の聖剣の上だ。

「なっ……………」

驚きを隠せない青髪。

奴には見えていないだろうが、コイツの聖剣に、先程マーキングを施した。

そして振り下ろされた寸前で消え、そのマーキングの位置に表れた……ただそれだけだ。

「……………詰まらない遊びだったよ。シスター」

「遊び……………だと……………!?!」

何を驚いている？

今のが戦いだと思っていたのなら……………相当御目出度い戦いしかしていいのだろうか。

「詰まらないさ。力を抑えてやっていたのに、お前は俺の動きがまるで見えていない。……………お前とそこに転がっている馬鹿も、大した強さのない、忠誠だけが取り柄のシスターだ。そして……………このなまくら聖剣もな」

俺は奴の目の前で聖剣を放り投げた。

そしてそれは地面に落ちたと同時に————へし折れた。

「————ツ!？」

エクスカリバーが折れたことに衝撃を隠せないのか、眼を見開く青髪。

「何故、エクスカリバーが……………」

「恐らく、イツセーの力量にそのエクスカリバーが付いていけなくなった……………という事かしら?」

「正解だ、リアス」

全く、もう少しマシンな耐久度にした方が良くはないか？

『いや、エクスカリバーが持ち主に付いていけなくなって壊れるなんて事、絶対有り得ないからな?』

知らん。

現に折れたではないか。

『コイツなら龍殺しすらはね除けそうだな……………』

おい、流石に人を過大評価し過ぎだ。

俺でも龍殺しは怖いさ。

『……………嘘にしか聞こえん』

……………まあ良い。

もう既にこの二人には興味が失せていたので、俺は呆然と立ち尽く



す青髪に、気絶したイリナを放り投げた。

「さつさと国にでも帰れ……………風遁・剛嵐の術」

俺は手に召喚したうちはを目の前の二人に振るうと、凄まじい風と共に吹き飛ばされていった。

「つ……………うあああああああ!!!」

風が止むと、既に二人は消えていた。

「……………先輩。あのお二人、一体何処へ？」

「さあてな。運が良ければこの街の何処かにいった筈だ」

それを聞いた全員（木場とアーシアを除く）から「鬼畜王!!!」と叫ばれた。

何故だ

第十四話「予習復讐を口煩く言う奴ほど多分昔にやらずなくて後悔したんだと思う」

「ダメよ祐斗！貴方は私の騎士なのよ!?!」

「すみません部長……ですが、僕はやはりエクスカリバーが憎い」

女剣士二人が帰って暫くした後、木場は眷属を抜けると言い出した。

「僕は僕の本懐を成し遂げたい……その為に、部長達に迷惑は掛けられません」

「でも……」

「行かせてやれ」

「!」

何時までも続きそうだったので、俺はこの場を纏める意味でもそう発言した。

「そいつの決意は本物だ。ならば好きにやらせてやれ」

「そんなのダメよ！祐斗は……」

「ならお前はそいつの気持ちが分かると言うのか？大事な物を奪われた奴の気持ちが」

「!」

そう言うと、リアスは押し黙る。

「下手な同情や軽い気持ちでそういうった相手に関わらない方が良さそうならば、関わった方も関わられた方も……辛いだだけだ」

「……………」

「それにそいつには本当に大事な物が今は見えていないただだ。頭を冷やさせても良いだろう」

「イツセー……」

”大事な物”、と聞いてか、木場は俺に向かい合った。

「イツセー君、僕に大事な物なんて無いよ。全て……奪われたからね」

「誰が目先の物だけだと言った」

「……………」

「……………普段から見えるが、決して見えないもの。それは今のお前では感じることは出来ん。ならば一度冷静になってこい」

……………フン、俺のキャラではない事を口走ってしまったな。

俺は家族が待っている家へと急いだ。

――――

後日。

「すみません。先輩」

俺は何故だか塔城と歩いていた。

「一体何をやる気だ？こんな休日にも人を呼び出して」

「実は……………祐斗先輩の復讐を、手伝いたくて」

……………コイツ。

「お前、馬鹿か？他人の復讐を手伝いたい等と言う奴は、初めて見たぞ」

「……………分かっています。ただのお節介だと言うのは……………でも、祐斗先輩には、死んで欲しくないんです」

そう不安そうに言う塔城。

俺はそれに何も答えず、眼を閉じた。

「……………」

「先輩？」

.....いた。

「行くぞ」

「にやっ!？」

俺は塔城の手を掴んで歩きだす。

「ど、何処へ行くんですか？」

「復讐を手伝いたい、そう言っただろ？ならうってつけの相手がいる」

俺が” 奴等 ” の気配を感じて向かうと、そこには――

「えー.....迷える子羊に恵みの手を」

「どうか天にかわって、哀れな私達に救いの手を!!」

馬鹿が二人いた。

「あの人達は.....」

塔城をその場に残し、俺は二人の元へと向かう。

「おい」

「む.....!？」

「あ.....」

「来い」

俺は無言を言わず、二人の首を引っ付かんで近くのファミレスへと向かった。

――

「はむっ……………むぐっ……………日本の料理は、こんなに美味しいのだなっ！初めて知ったよっ……………」

「やっぱり故郷の味は最高〜！涙が出ちゃう〜!!」

……………どれだけ腹が減っていたんだ。

気づけば俺の目の前には大量の皿が積まれていた。

「……………それで、私達と接触してきた理由は？」

青髪は口元を拭いて、単刀直入に俺にそう聞いてくる。

「なあに。迷える子羊に救いの手を差し伸べるだけだ」

「君がそう言うとな魔王との契約だと思えてくるよ」

「今すぐにこの分の金を払ってもらおうか？」

「すまない、口が過ぎた様だ」

失礼な奴だ。

「……………お前達のエクスカリバーの破壊。俺達の介入を許可しろ」

「!!」

そう言うと、二人は驚いたように眼を見開いた。

「……………この間の言葉を忘れていないだろう？我々は悪魔の力は借りない」

「お前達程度の技量で何とかなる相手か？そのコチユジャンとか言う堕天使は」

「……………」

押し黙る二人に、俺は尚も続ける。

『相棒一人でも事足りる気がするがな』

「黙れ蜥蜴。……………それはそうと、俺は人間だ。人間の介入なら、お前達にとつてのタブーは避けられる筈だ。そこに悪魔がいても、その陣営からは今は離れている」

「……………この間の彼か」

「奴のエクスカリバーの破壊願望とお前達の任務……………利害は一致

している筈だ」

「……分かった」

「ゼノヴィア!？」

「心配ないだろう。何せ彼は、君のエクスカリバーを壊したんだからね」

勝手に壊れただけだ。

その後、俺が無理矢理連れてきた木場と、何やかんや話し合っ  
てから、お開きとなった。

## 第十五話 「……生きていた白髪」

「おうおう、あの時俺ちゃんを蹴り飛ばしてくれた人間じゃありやせんかあ〜!!」

「……………」

さて、明くる日の帰り道、俺は何時ぞやの白髪のクソガキと鉢合わせていた。

「……そこを退け」

「そいつぁお断りさせてもらうねんっ! あん時の借りを返さなきゃ俺ちゃんもおちおち昼寝も出来ないんだよおだ!」

「そうか、ならば永眠させてやる」

「…ほんつとうに、気に入らねえなあ!!!」

剣を構えた奴は、一瞬にしてその場から消えた。

そして気付けば俺の首元に刀身が——何てことはなく、普通に見えていたので掴んで止める。

「んなっ?! エクスカリバーの力でスピードアップしてんだぞ?!」

ほお、それもエクスカリバーか。

ならここで折ってしまっても問題あるまい。

「……フン」

「うぼおっ?!」

何なら此奴の精神も折ってしまうか。

そう思い、俺は奴を引き寄せて、腹に膝蹴りを叩き込んだ。

「げほっ、げほっ!!」

「……来るのが遅かったな」

俺は背後を振り返る。

「すまない、遅れた」

「……エクスカリバー!」

そこには例の青髪——名をゼノヴィア——と、木場がいた。

「……フリード・セルゼン。教会でも有名になっていた、狂った悪魔祓いだ」

「……確かに言動は狂っているな」

「ちよつ、教会のクソビッチか……！」

もう此奴らに押し付けるか？と思っていたら、

「……………少しお前には分が悪いようだ、フリード」

誰だ？

気付けば、そこには白髪の老人がいた。

「まさか……………バルパー・ガリレイ!!」

「——ツ!!」

その姿を見た瞬間、激昂のような声音でその名を叫ぶゼノヴィア。木場はその名を聞いた瞬間、目を見開いて怒りの表情をあらわにさせる。

そうか、こいつが聖剣計画？なる物を始めたマッドサイエンティストか。

「バルパー・ガリレイ!!」

木場はフリードの傍に立つバルパーへと襲いかかろうとするが、木場の剣はフリードに阻まれ、そのまま鏝ぜり合いになった。

「もしや君は……………聖剣計画の生き残りかね？」

「そうだ……………僕は一度、貴様に殺され、そして悪魔となって生き延びた。僕のこの魔剣は僕の同士の無念を顕現したものだ!!だから僕は貴様を殺して復讐を果たす!!」

……………ちつ、完全に冷静さを失ってやがる。

「その人間は……………危険そうだな」

「じいさん、当たりだぜ。この野郎、滅茶苦茶つえーんすよ！」

「ふむ……………分が悪いな。ここは一旦引くとしよう」

「りよーかい!では、ちゃらば!!」

フリードは閃光弾のようなものを地面にたたきつけ、そして俺以外



の全員が眩しきから目を瞑った。

ゼノヴィアはその仕草を早く察知したのか、エクスカリバーでフリードに切りかかったが、しかし目を開けるとそこにはフリードとバルパーはいない。

『相棒、お前見えていただろ?』

ああ。

『何故追いかけん?』

逆に聞くが、俺が奴等を追う義理があるのか?

『……それもそうだな』

と、そんなこんなでイリナも合流してきた。

「イリナ、追うぞ!」

「分かったわ!」

イリナとゼノヴィアが逃げた二人を深追いする……序に木場も。

………はあ。

「帰るか」

因みに後日、リアスには案の定バレていたらしく、塔城はお仕置きを受けたらしい。

## 第十六話 「鴉狩り」

またまた明くる日の夜、俺はイズナの勉強を見ていた。  
イズナは飲み込みが早いので、教える此方としても楽だ。

……………それにしても、あいつらはもう少し静かにドンパチ出来んのか。

『加勢に行かんのか?』

何度も言っているだろ。

俺に行く義理はない。

それに俺は奴の復讐のお膳立てをしてやったまでだ。

墮天使のコスタリカが何しようが俺には関係がない。

『……………』

「……………どうしたの、お兄ちゃん?」

話し込んでいると、イズナが上目遣いでこちらをのぞき込んでいた。

「いや、何でもないぞ」

「……………お兄ちゃん、何か悩んでる?」

「え……………」

俺が、悩んでいる?

「ん、何となくなんだけど、何か手伝うべきか迷ってる感じがするの」

「……………」

……………まさか、俺は、奴等を心配しているのか?

「もし、そうだとしたら、俺は如何した方が良いかな?」

「むう……………」

俺は敢えて尋ねてみると、イズナは可愛く唸る。

「お兄ちゃんが何に悩んでるか分かんないけど、でも、そんな顔はしてほしくないの……………」

「イズナ…」

「だから、そういう時はお兄ちゃんのやりたい事、一杯やつちやえばいいと思う！我慢は体に良くないって、お兄ちゃん何時も言ってるじゃない！」

……………ふっ。

「そうだな。そうかも、しれないな」

「あ、お兄ちゃん笑った！」

「はは、ありがとうな……………イズナ」

俺はイズナの頭に手を置いた。

すると、イズナは目を静かに閉じて倒れた。

「……………よし、暫くは起きんだろう」

『幻術か』

今頃イズナの夢には俺が出ていることだろう。

『……………相棒』

————さて、行くか。

————

「……………ふん、一端の雑魚だと高を括っていたが、相当やるじゃないか……………！」

駒王学園。

そこでは僕達とゼノヴィア、そして墮天使コカビエルが戦っていた。

僕達が劣勢————と言う事は存外なく、コカビエルには無数の切り傷と打撲の跡が刻まれていた。

僕達の傷はアーシアさんが治してくれているから、奇跡的に損害は

ない。

…とは言え、流石は先の戦争を生き残っただけはあるね。禁手に至った僕であつたけど、決定打を与えれずにいた。

「……凄いな、君達は。私はついていくだけで精一杯だよ」

……それは多分、あの拷問のお陰だろうね。

あれがなければ、僕達は今頃全滅していただろう。

「だが奴は絶対に断罪せねばならない。神の名の元に……」

「神だど？……フン、バカも休み休み言え！——神は既に死んでるんだよ、当の昔に……戦争の時に魔王どもと共にな!!!」

その言葉を聞いて、そこにいる全員が目を見開いた。

だけどその中で、アーシアさんとゼノヴィアの驚き様は他と違っていた。

「う、嘘だ！神が死んでいるなど、そんなわけが！」

『いいや、死んでいる……その聖魔剣使いが良い証拠だ。本来、聖と魔がまじりあうことはない——そう、神がいればそんなことは起きないはずなのにな』

「そ、そんな……神の愛はいつたいどこに……」

「愛などない……だがまあ、ミカエルは良くやっている。神の代わりをして人、天使をまとめ上げているのだからな」

——そんな時だった。

「だろうな。神などいる訳がない」

っ！この声は……

「ん？」

コカビエルも釣られて振り向くと、そこには甲冑を着た一人の人間がいた。

「何者だ、小僧」

「そうだな、貴様に死を送る人間と言っておこうか」

——そんな台詞を言っちゃったら、どっちが悪役か分からないよ。

イツセー君。

「イツセー……」

「まあ、よく持ったと言ってやる」

まさか彼に褒められようとは……………。

「……アシア、これが現実だ。神などいない」

「イツセーさん……………」

「……その現実を受け止めろとは言わん。だが、逃げるな。それが戦いなんだ……………安心しろ。俺は神ではないが、お前の支えぐらいならなつてやる」

イツセー君はそう言うと、改めてコカビエルに向き直る。

「俺に死を送る？ハハハッ！小僧、死にたくなければ……………ツ！」

コカビエルの言葉は最後まで続かなかつた。

原因は、イツセー君が放つたプレツシャーだ。

そのプレツシャーに押され、学園の校舎が半壊し、木々は吹き飛んでいく！

コカビエルもまた、イツセー君を驚愕の眼差しで凝視していた。

「……このプレツシャー、魔王クラス!?いや、それ以上……………」

「……ゼノヴィア」

「…兵藤一誠」

「……………今は泣いている。代わりに俺が、奴を断罪してやる」  
それだけ言うと、イツセー君は彼女の聖剣——デュランダルを  
拾い上げる。

「っ、止せー！いくらエクスカリバーを振るえた君でも、それはっ」  
ゼノヴィアの言葉通り、デュランダルはイツセー君を拒むように先  
程より激しい光を放つ！

「——黙れ」

そんなデュランダルを、イツセー君は鬱陶しそうに一瞥して短く告  
げた。

すると、あれほど激しい光を放っていたデュランダルが大人しく  
なった！

「な、なんだと……………!?!」

これにはコカビエルも驚きを隠せないでいた。

「デュランダルが、イツセーを認めた……………」

「いや……………違う」

恐らく彼女が言おうとしている事が、僕には分かる。

「デュランダルが……………彼に怯えているんだ」

そう——恐らくイツセー君は自身のオーラで、デュランダルを屈  
服させたんだ。

言つてて滅茶苦茶だけど、彼ならやりかねない、そう思っていた僕  
達は何処か納得していた。

そんなイツセー君は、静かにコカビエルに歩み寄る。

「——クククッ！中々面白いことをしてくれるな、小僧ツ!!貴様な  
らば——」

だがイツセー君は、コカビエルの言葉を無視してデュランダルを振  
るった。

そして気付けば——奴の左腕が宙を舞っていた。

「ぎ、いああああああああああああああああ!!!」

「煩いぞ。俺の妹が起きたらどうしてくれる」!!!

「こ、このガツ」

間発入れずに、彼の右足、左足、右腕が次々と斬り飛ばされいく。

「ッ!!!」

……もう、声になっていない。

その圧倒的なまでの蹂躪に、僕達は改めてイツセー君が化け物なのだ実感した。

「……こんな物か」

ほら、だって溜息吐いてるんだよ？

「な、にい……!!?」

「……もう終わらせる。…………おい、デュランダル。さつきよりも特大の力を出せ。でなければ——粉々に砕く」

低く呟いたその声音に応えるかのように、デュランダルから莫大な光のオーラが迸る!

「……ハハハ。もう、私はいらないのかな?」

そう言いたくなるのは分かるよ、ゼノヴィア。

イツセー君、彼女にちゃんとデュランダルを返してあげてね。

もうそんな、君のご機嫌取りに勤しむ聖剣を、見たくないんだ………。

「やれば出来るじゃないか。墮天使コンドーム、寝る前のいい運動になった。礼を言おう。——死ね」

そう告げると、莫大なオーラを纏い巨大な剣になったデュランダルを横薙ぎに振るい、コカビエルを校舎ごと切り裂いた。

「——フン」

崩落していく校舎を眺めていたイツセー君だったが、突然デュランダルを上空に投げた！

一体何を———と思っていたけど、デュランダルの動きが止まった！

「ココソと隠れて何をしている」

「———ふっ、やはり気付いていたか」

そこにいたのは、“白”だった。

ドラゴンを思わせる全身鎧に、青く輝く翼。

彼は一体……

「白龍皇だ……」

『!?!』

と言う事は、彼がイツセー君のライバル(?)………!!

「まあそう気を荒立たせないでくれ。と言っても、俺は今すぐにでも君と戦ってみたいんだけどね」

「……」

「コカビエルの回収に訪れたんだが……まさか消し飛ばされるとは思わなかったよ」

すう、と下に降りると、彼は黒い羽根を数枚拾った。

———コカビエルのだ。

「アザゼルにはこれで説明させてもらうよ。ではまた会おう、俺のライバル」

そう言うと、彼はその場から消えていった。

序でに言えば、イツセー君も。



せめて後始末ぐらいは手伝ってほしかったかな!!

## 第四章：停止教室の女装野郎 第十七話「新しい同士」

「ありがとうございます〜」

イツセーだ。

俺は今、家族の為にアイスを購入したところだ。

季節は夏に近づいてきているからな。

特に風呂上りが一番暑い。

「ちよつと良いかい、その少年」

そういつて横から現れたのは、金髪の年を食ったイケメン？だった。

まあ止まっていたらアイスが溶けてしまう可能性があるんで、俺は止まらずに進む。

「お、おい待ってっ！」

「……………何の用だ、鴉」

鬱陶しい為、俺が僅かに殺気を放つと、目の前の鴉は後退りする。

「……………成程。この殺気なら、コカビエルを倒したのも頷けるな」

「……………誰だ」

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺はアザゼル——墮天使の総督さ」

そう言うのと、奴の背から羽が生えた。

「そうか」

と言うか早く帰らないとアイスが溶けてしまうな。

「……………あ、あのよう…もうちょい驚いてくれても——」

「飛雷神の術」

俺は目の前のおっさんを無視して、飛雷神で帰った。

あ、ちゃんとアイスは無事だった。

おっさん？知らんな。

――

「アザゼルに?!」

後日、特訓をつけ終えた後にリアスにこの事を一応報告すると、奴は驚いていた。

「大丈夫だったの?」

「俺の心配か?」

「それもあるけど……向こうが死んでないかと思って……」

失礼な奴だな。

「大丈夫よりアスさん。ちゃんと総督は五体満足ですから」

お前は俺を何だと思っているんだ、夕麻。

つと……………

「そいつはまだ真っ白なのか」

「アハハ……」

俺はソファで燃え尽きたように真っ白になっている青髪に目を向けた。

隣にいた金髪は苦笑いを浮かべている。

――ゼノヴィアと、ミナトだ。

ゼノヴィアは先日の一件で破れかぶれで転生して、ミナトは俺がリアスに推薦した。

ミナトは中学生だがその実力は前世の時と遜色ない。

故に転生が可能なのかと思ったが、俺との特訓で実力が上がったお陰か、『兵士』の駒を全て使って転生が可能だった。

で、眷属になった記念に、俺は二人に特訓を施した。つい先程だが。

ミナトは何とか食らいついてきたが、ゼノヴィアの方は論外だった。

で、今はああやって燃え尽きている所だ。

「ぜ、ゼノヴィアさん、大丈夫ですか？」

「何だか、過去の自分を見ている気分です……」

「そうだね」

「そうですわね」

「私もあだったわね」

ほお。

「お前達はまだ元気そうだな。ならばもう少しだけ——」

『すいませんすいません謝りますからもう止めて下さいお願いします』

ちっ。

まあこの眷属も実力が上がっている。

『問題は悪魔同士のゲームで制限が掛けられないかな』

問題はないだろう、多分。

……いや、ミナトのあの技は怪しいな。

「アザゼルは昔からそう言う男だよ、リアス……おっと」

何者かの気配を感じた俺はその場に苦無を投げつけた。

が、いとも簡単に受け止められた。

「お、お兄様?! イッセーも何をしているの!」

「見知らぬ奴の気配を感じたんだ。それ相応の対応をさせてもらったまでだ」

「うん、良い反応だね。つと、自己紹介と行こうか。私はサーゼクス・ルシファー——冥界の現魔王を務めさせてもらっている。妹が

お世話になっているね、兵藤一誠君」

「ほお、アンタがそうか」

俺は差し出された手に応える形で握手する。

……………この男、強いな。

『……………相棒のお眼鏡に適うほどのなのか?』

ああ。

本能で分かるものだ、こういうのはな。

「それにしても殺風景な空間だ。リアス、君はまだ若いんだからもつと可愛らしいものでもおいたらどうだ?流石にこの空間に魔法陣とはいささか……………」

「……………それよりもどうしてここに?」

それを聞いて、サーゼクスは一枚のプリントを取り出した。

あれは……………今度の授業参観のお知らせだったな。

「何を言っているんだ? もうすぐ授業参観だろう。これは兄として来なければならぬ理由だよ」

「ぐ、グレイフィアね!お兄様に言ったのは!!」

「サーゼクス様がこの学園の理事をしています故、私にも当然学園の情報が入ってきます。そして私はサーゼクス様の『女王』ですから、聞き耳を立てるのは当然かと」

「そうだ、リアス。たとえ魔王の仕事が激務であろうと、我が妹の頑張る姿は私的にも見たいものでね?」

———この男!

俺は無言でサーゼクスの眼前に立った。

サーゼクスは何事かと思っていたが、何かを察したのか真剣な顔つきになった。

「まさか、ここで同士と出会えるとはな」

「……………ああ、私も驚きだよ。君とは、是非一度本音で話し合いたい物だね」

「それは此方の台詞だ……………と、返させてもらおう」

俺達は薄ら笑いを浮かべ、ガツチリと握手を交わした。

「……………何、これ」

「アハハハハ……………（あの人も多分、マダラさんと同じなんだなあ）」

—————

その後、夜も遅いという事で、俺は二人に家に来るように提案した。  
この男とは、まだ語り尽したい事が山ほどあるからな。

……………序でにリアスとアーシアもついて来た事は、気にしないで  
いた。

「…本当に良いのか？」

「何がだい？」

「布団で」

今、サーゼクスは俺の部屋に布団を敷いて座っている。

「ああ、こういう体験は新鮮だからね。何時もはベッドだから」

魔王と言うには随分庶民的だな、この男は。

「…………君には、色々とお礼を言わなければならないね」

「む？」

「リアスの事、ありがとう」

そう言っつてサーゼクスは頭を下げてきた。

「君のお陰で、彼女は自由になれた。私は立場上、どうしても介入は出  
来なかったから」

「…………気にするな。俺はただ、奴等を鍛えたただけだ」

だが、まあ…………

「どう捉えてもアンタの自由だがな」

「なら、妹を助けてくれたと捉えておこう……………さてと、そこで本題  
だ」

サーゼクスは魔法陣からアルバムのような本を取り出した。  
かなり分厚い。

「先程言ったね、君と私は同士だと……君には、是非これを見てもらいたい」

勢いよく開いたその中には……幼いリアスがいた。

「本当は映像記録も持っているのだがね……流石にバレてしまいうだから」

「いや、これだけでも十分だ……アンタが、俺と同じ領域にいるのはこれで完全に分かったのだからな」

そう言った俺は、鼻から液体が垂れてくるのを感じた。

「拭きたまえ」

「……アンタもな」

……まさかこの俺が、幼いリアスの可愛さにしてやられるとはっ  
!!!

いや、違う。

気に恐ろしきは……この男のリアスを愛する——兄  
心オオオ  
!!!!

だがただではやられんっ!!!

「アンタにも見てもらおうか……これがっ！」

俺はベッドの下からアルバムを取り出す！

そうこれは——イズナの成長記録!!!

赤ん坊の頃から今のイズナまで——様々な可愛い俺の妹がい  
るのだっ!!!

「っ!!!……この撮り方っ……イズナちゃんの顔を様々なアングルか  
ら撮り、尚且つその可憐さを損なっていない……やはり、君は私  
と同じ!!!」

「ふっ……アンタこそ、尊敬する。アンタの撮り方、この写真全てか

ら感じる妹へのラブ!!!常人には出来ん芸当を、アンタは軽々とやつてのけた!!俺の目に————狂いはなかった!!サーゼクスウウウウウウウツ!!!」

「イツセーエエエエエエツ!!!」

俺は前世で柱間に合ったとき並みに——叫んだ!!!

それほどまでにこの男は、俺の心を滾らせた!!!

向こうも同じだったのか、昼間に見せていた理知的な面影は消え失せ、狂喜に満ちた顔をしていた!!!

「……実は、私達以外にも同士はいるのだ」

「なん、だと……!?!」

まだこのような奴が、いると言うのか……!?!

「私と同じ魔王——セラフォル・レヴィアタン!!!彼女もまた、妹を愛し、妹への愛で生きる我等が同士!!!」

「何という事だ………冥界の魔王は、何処までも俺を楽しませてくれるらしいな!!!」

「だが!!今回は二人のみではあるが………今晚は語り明かそうではないか」

当然!!!!

その日俺達は、夜が更けるまで語り尽した。

その様は、俺が前世で柱間と戦った時並みの激闘だった——それだけ言っておこう。



## 第十八話 「体は子供、精神はお爺ちゃん」

さて、俺が真なる同士と出会った翌日、俺達は学校のプールにいた。いやあ、昨晚はとても充実したな。

『どれだけシスコンなんだ……』

何だ？文句あるのか？

まあいい。

で、何故俺達がこの場にいるかと言うと、生徒会からの頼みだから。何でも先日のご……ご……ご……コンビーフの一件で学園一帯に結界を張ってくれていたらしい。

……今思えば学園の周囲に何人かいたな。

兎に角、その礼を兼ねてと言う訳だ。

何、俺が校舎を斬り飛ばしたからだ？

—— 知らんな（真顔）

これが終われば先にプールに入らせてくれるらしいからな……イズナも連れて来てやるべきか？

そう思いながら俺は屋根の上で黄昏る。

何？手伝わんのか？

手伝っているぞ？—— 影分身だが。

——

「イツセー君、やはり遅しいね……」

「言うべき相手を間違っていると思うが」

……此奴、何だか先日的一件以来男色臭くなっていないか？  
おいミナト、顔を背けるな。

「お待たせしました〜！」

振り返ると、そこには競泳水着を着たアジアと塔城がいた。

ゼッケンには平仮名で名前………何だ、このそこはかとなない犯罪臭は。

「どうですか、イツセーさん！」

どう………と言われてもな。

「まあ、良いんじゃないか」

……断わっておくが、俺は男色ではない。

素っ気無いように見えるが、世辞を言えるほど口達者ではないだけだ。

「……いやらしい目線で見られないのは、それはそれで複雑です」

お前の絶壁で誰が興奮するか。

そんなのは幼女フェチぐらいだぞ。

と言うかイズナだってもう少しあるのに此奴と来たら………。

「後さり気なく人の心を勝手に読むな」

「にやん!？」

ローキックを繰り出してきた塔城の背後に回り込んで拳骨を見舞う。

「……ど、どうかな、イツセー君」

振り返ると、そこには水色の水着を着た夕麻がいた。

腰にはパレオ?なる物が巻かれていたり、水着の部分部分にひらひらが付いており、艶やかさよりは可憐さが出てるタイプだった。

因みに何故墮天使の夕麻がいるのかといえれば、自分達の陣営が迷惑をかけてしまったからと言って参加してくれた。

「まあ、お前の雰囲気には合ってると思うぞ」

「ほ、ホント!？」

近いぞ。

「お待たせ……………どうかしら？ イッセー」

何取って付けたかのように恥じらってるんだ、リアス。

上下白のビキニか……………。

「意外だな」

「何が？」

「お前の事だからどぎつい赤の水着を付けてくるのかと思ったが」

「どう言う意味よ!？」

まあ、似合ってはいるんだが。

見ろ、ミナトなんて顔を真っ赤にしているぞ。青いな。

まあ仕方ないか。

何せ布面積が小さいからな——木場に至っては前屈みだぞ。

「あらあら。でしたら此方は如何ですか、イッセー君？」

姫島は赤と青の入り混じったビキニ……………おい誰だ。「心が躍るなあ」とか宣った奴は。

此方も布面積は少なめ——あ、木場とミナトが前屈みでトイレに向かった。

青いな……………いや、青春というのか？これは。

だったらそれは青いと言って間違いではないのか？

——どうでも良いか。

そう言えば、誰か一人足りないような……………。

「それで、実はイッセーにお願いがあるのよ」

む？

—————

「いち、に、いち、に」

そんな訳で、俺は塔城の泳ぎの練習に付き合っていた。

しかし高校生になってカナズチだったとは………因みにアーシアも泳げないらしく。別のプールサイドで影分身に見てもらっている。

「……イツセー先輩、付き合わせてしまつてゴメンなさい」

「気にするな」

特にする事もなくて退屈だったからな。

「よし、端に着いたぞ」

「……ありがとうございます。やっぱり先輩つて…怖いですけど、優しいです」

優しい、か。

「そんな事、イズナにも言われたな」

「……やっぱり、妹さんなんですね」

「何か言つたか？」

「……いえ、何も。お願いします、イツセー先輩」

……まあ、聞かなかつた事にしてやるか。

――――

アーシアと塔城は疲れて眠ってしまった頃、俺はプールサイドで木場とミナトの水泳を見ていた。

すると、向こう側のプールサイドでリアスが手招きをしていた。

……どうせロクな事ではないだろうとは思うが、一応向かうことに。

「ねえ、イツセー。良かったらオイルを塗ってくれないかしら？」

「……拒否権は」

「…ダメ？」

そんな上目遣いで騙されると思うなよ。

「……まあ、暇潰しにはなるか」

そう言うと、リアスは待つてましたとばかりにビキニを取り持つ

た。

「……痴女か」

「あなただからよ。さ、お願い」

「………はあ。」

第一魔力を纏っている時点で要らんだろうとか、お前は男に対し無防備すぎるとか、言いたい事を飲み込んで俺はオイルを掌で温める。そうして塗りたくっていくが………しかし何故女というのは、こうして肌が柔らかいんだろうな。

此奴は中でもトップクラスだろう。

まあ、比較対象がイズナしかないから不動はイズナの柔肌なんだが。

「ううん、イツセーの手、気持ち良い………ねえイツセー、後で前も塗ってくれるかしら？」

「お前は阿保か」

俺はオイルで光を反射する奴の背中を叩いた。

「イツセー君♪私にもオイル塗ってくださいませんか？………部長だけずいですわ」

そう言っただけ俺の背中に抱き着いて来た奴——— 姫島。

「………離れる。重い」

「あらあら。重いというのは………こちらかしら？」

姫島は離れるどころか更に密着してくる。

………女と言うのはこんなに重い物をぶら下げているのか。

これなら男がぶら下げてる………おっと、まだ昼間だな。

「ちよつと朱乃！私のオイル塗りはまだ終わってないのよ!」

そう言っただけリアスが立ち上がった。

おい、乳房が丸見えだぞ………お構いなしか。

「いいじゃない、少しくらい。私は日頃からお世話になってるお礼にイツセー君に溜まってるものを吐き出させてあげたいだけですわねえ、部長。私にイツセー君をくださいませんか？」

「だめよ！イツセーは私のよ………イズナちゃんなら兎も角、あなた

には絶対にあげたりするものですか！イツセーが獣になってしまうわ！」

俺は溜まつてる物もないし、誰の物でもないんだが。

だがそんな俺には構わずこの痴女二人組は更にエスカレートしていく。

「第一あなたなんかにはイツセーを満足させられるの？」

「あら、でしたらその言葉、そっくり返させてもらうわ。紅髪の処女姫さん？」

「……………言ってくれるじゃない。卑しい雷の巫女さん」

「……………あなたなんかには、イツセー（君）は渡さな——」

ガシツ!!

「……………え？」

お前ら——

「煩い」

俺は有無を言わず、須佐能乎の腕で掴まんだ二人をプールに叩き付けた。

……………はあ、若い女の相手は疲れる。

更衣室に戻った俺は、見知った青髪を見た。

「兵藤一誠か」

「何をしている」

ゼノヴィアは青のビキニを身に着けていた。

「いや、着替えに時間が掛かってしまっただけね」

「そうか……………似合っているぞ」

「あ、ありがとう」

思った事を言っただけなのに何故顔を赤くする？

やはり女と言うのはわからんな。

「……そうだ、時に兵藤一誠」

「イツセーで構わんぞ」

「…ではイツセー。私と子作りしないか？」

.....

「何を言っている」

そう言った時には、俺は奴に押し倒されていた。

「私は以前まで協教会のシスターとして活動してきた。その生活で私達は私欲を持っていなかった。だが悪魔は自らの欲に忠実な生き物だとリアス部長に教えられたんだ」

あのバカ……ちゃんと教育しないからこうして曲解してる奴が出て来てしまってるじゃないか。

今度須佐能乎でお仕置き確定だな。

「そして君は赤龍帝……私は子供を産む以上、強くなってほしいからね」

「成程、俺は打って付けの相手と言う訳か。分かったから退け」

だがゼノヴィアは俺を無視してビキニを脱いだ………いくらあの痴女二人組でも下は脱いでいなかったぞ。

ゼノヴィアは何の反応も起こさない俺を見て怪訝になるが、気を取り直したのか、俺の手を掴んで自身の胸に触れさせた。

「……どうした？私では魅力がないかな？」

「………ああ」

「！」

僅かにたじろいだゼノヴィアを押しつけて、俺はパーカーを着せる。

「俺を落としたいなら、もう少し“女”になることだな」  
「？」

「今のお前達は……特に魅力に感じないって事だ」  
俺は外で聞き耳を立てている連中にも向けてそう言うと、飛雷神で  
帰った



## 第十九話 「三竦み」

イツセーだ。

今日は授業参観……しかし、高校生にもなって授業参観とは、気が滅入るな。

『相棒の妹も来るだろう?』

そうだな。

イズナが恥ずかしい思いをせぬ様に真剣にしなければな。

「イツセー」

「む?」

席に座っていると、ゼノヴィアが俺の席に向かってやって来た。

「私は誓うよ。いずれ必ず君と子作りを成し遂げてみせると」

「……お前、学び舎でそういう事を言うのは止めろ」

見る、周りの奴らが顔を真っ赤にしているじゃないか。

「ん?何か可笑しな事を言ったかな?」

……教会ももう少ししっかりと教育をしろよと思った俺は悪くない筈だ。

—————

授業風景は残念ながらカットだ。

と言うか、イズナと絡んでない時点で描写する気はない。

「お兄ちゃんカッコ良かったよ!」

「ありがとうな、イズナ」

因みに今は昼休み。

俺達は食堂でご飯を食べていた。

「むう、イズナちゃんが羨ましい……」

「はう、勝てそうにありません……」

それは当然だろう。

俺の中での最優先事項はイズナなのだから。

「アハハ……」

一方のミナトと木場は苦笑いだ。

「やぁイツセイ君」

「む、サーゼクスか」

そこにやって来たのはサーゼクスとグレイファイア……そして、紅髪の紳士っぽい男だった。

「初めまして、兵藤一誠君。私はリアスの父だ」

「……どうも」

俺は差し出された手を掴む。

あの焼き鳥と違って、真に貴族と言った感じだな。

「そう言えばリアス。セラフオールを見かけなかったかい？」

「セラフオール様ですか？いえ……」

セラフオール……どこかで聞いた名だ。

と、俺は体育館に集まる気の中で、特大の物を感じた。

「行くぞ」

俺は椅子から立ち上がると、体育館へと向けて歩き始めた。

体育館につくと、そこには男子生徒の群衆がいた。

「おいおい散れ散れ！……ここはコスプレ写真会場じゃないぞ！」

と、その群衆を追い払おうとしている男が一人。

確か、生徒会の男だった筈……

「匙元士郎か」

「ん？……って、ひ、兵藤おおお!？」

何を驚いている？

『俺も驚きだ。まさか……相棒が他人の名前を憶えていようとは』  
確かにこいつは取るに足らん雑魚だ。

が………将来性は充分に感じるからな。

「大変だな、お前も」

「おう、サンキューな………って、アンタもこんな格好しないで下さい

よ！保護者でしょ!!」

「えく？だってこれがアタシの正装だもん☆」

そこにいたのは、魔法少女のコスプレをした女………だが、感じる魔力はサーゼクスの物と遜色ない。

………まさかとは思うが、魔王か？

「んく………あ、君はもしかして！」

魔法少女はキラキラと目を輝かせて此方へと体を寄せてきた。

………幼い印象だが、いい身体つきをしているな。

「兵藤一誠………アンタがサーゼクスの言っていた、セラフオルーか？」

「うん！その通りだぞい☆………うんうん！サーゼクス君の言った通り、君も妹ちゃんを愛しているようだね！」

「当然だ………アンタも話に聞いていた通りの、妹愛好家のようなな」

俺とセラフオルーは、不敵に笑いあう。

「な、なあ木場。この二人、一体………」

「えくつと………つて、イズナちゃん!」

と、その声を聞いて振り向けば、イズナが此方へとやって来ていた。

「み、ミルキーだあ!!」

見れば、イズナは目をキラキラとさせてセラフオルーを見ていた。

ああ、そう言えばこの女のコスプレ、イズナが見ていたアニメの物だな。

「おお！ミルキーだつて分かるんだねえ☆君の名前は？」

「兵藤イズナです！」

「つて事は………イツセー君の妹!?可愛いく!!」

セラフオルーはそう言いながら興奮していた。

それに関しては全面的に同意だ。

「ソーナちゃんの次に可愛いく☆」

だが、それは到底容認できるものではないっ!!!

「何を言っている……イズナの可愛さに叶おう者などこの地上には存在せん!!!」

「むくーそんな事ないっ!!家のソーナちゃんの可愛さはアアア、世界一イイイイイ!!!なんだからっ!!!」

「ならば俺のイズナは銀河系で一番の可愛さを誇る!!これだけは譲れん!!!」

「私だって譲らないんだから!!!」

ちっ……どうあつても分かり合えないというのか!

「待て!!」

だが、その均衡を破らんとする者が現れた——サーゼクスだ。

「家のリーアさんの可憐さは、この世に現存する何者も太刀打ちできないのだ!!!」

よろしい——

「二ならば戦争だ (よ)!!!」

俺は赤と青の鬨気を、セラフォルーは触れる物全てを凍てつかせるほどの冷気を、サーゼクスは紅い滅びのオーラを滾らせながら——

——三者三様、巨大なアルバムを取り出した!!!

「リ、リアス……お姉様をどうかしてください……!!!」

「わ、私だってお兄様を止めてほしいのよ……もうっ!お兄様のおたんこなす!!!」

「お姉様のバカっ!!!」

「えへへ……お兄ちゃん、恥ずかしいよお／＼／」

『ひよつとして、この子が一番強いんじゃ……』

## 第二十話 「吸血鬼の矯正」

さて、授業参観の翌日の放課後。

俺達は旧校舎一階の所謂「開かずの間」と言われる部屋の前にいた。何でもこの閉めきった扉の向こうに、もう一人の『僧侶』がいるらしい。

リアスの実力が認められた事で開放が許可されたとの事だが………にしても、大袈裟な封印だな。

「一日中ここに住んでるのよ。一応深夜には術が解かれて旧校舎だけなら部屋から出ても良いのだけれど………中にいる子自身がそれを拒否してるの」

「要は引き籠りか」

俺がそう言うと、リアスは頷いた。

そうしている間にも、封印が解除された。

リアスが扉を開けると――

「イヤアアアアアツ!!」

………悲鳴？

いや、恐らくは他人が自分のテリトリーに入って来た事への驚きだろうな。

引き籠りと言っていたな。ならば中の住人は――対人恐怖症も患っていると見た。

俺も入っていくと、そこは女っぽい内装を施されており、生活感に溢れていた。

そして――

「あうう……………」

いた。

さっきの悲鳴は此奴か。

しかし、解せない事がある。

「リアス。なぜ此奴は女の服を着ている？」

疑問に思い聞いてみると、奴は目を丸くした。

「……流石はイツセーね。この子が男の子だと気づくなんて」

「そんな事はどうでもいい。俺の質問に答えろ」

「……この子、女装趣味があるのよ」

……………此奴の周りには、やたら濃い面子が揃うのだな。

「と、所で、この方々は誰ですか？」

女装野郎が俺とミナトとアーシア、ゼノヴィアをチラ見して聞くとリアスはソイツに説明した。

「あなたがここにいる間に増えた眷属よ。『兵士』の波風ミナト、『騎士』のゼノヴィア、そしてあなたと同じ『僧侶』のアーシア。そしてこつちが……人間だけど、オカルト研究部の部員の兵藤一誠よ」

だが奴は「人が増えてますうううう!!」として驚く一方だ。

「お願いだから、外に出ましょ?もうあなたは自由なのよ?」

「嫌ですうう!僕に外の世界なんて無理なんだああああ!怖い!お外怖いいいい!!」

言っても聞かなさそうだな。

なら……

「来い」

強引に連れていくまでだ。

と思っていたが――

「イヤアアアアアア!」

「……………む?」

すると一瞬、時が止まったかのような錯覚を感じた。  
それは直ぐに消えたが、相変わらず女装野郎は俺から離れようとも  
がいてる。

チラリと辺りを見渡せば、他の全員は固まっていた——いや、  
二人だけいた。

「き、木場先輩?! 一体どうなって……………」

「……………はあ」

ミナトとリアスだ。

時計を見れば、針も壊れたかのように止まっている。

「——時を止めたのか」

「もしかして、彼が封印されていたのって……………」

「見たところ、無意識化で発動している……………つまり、此奴自身がコン  
トロール出来ていないからか」

俺の言葉に、リアスは同意するように頷いた。

「この子は視界に入った物体を任意で停止させる神器を持っている  
フォービトウン・パロール・ピュウの。停止世界の邪眼。ただし、対象が自分のスペックより上な場合  
は対象外なのだけど」

とは言え、コントロール出来ん力ほど厄介な代物はないな。

「怒らないで！怒らないで！ぶたないでくださあああいつ！」

女装野郎は端で泣き叫んでいた。

「誰が怒っている様に見える？第一俺は止められていない、怒る理由  
がない」

「で、でも不機嫌そうですううう!!」

「失礼な奴だな。生まれつきだ」

リアスは奴の頭を撫でながら、今更ではあるが紹介を始めた。

「この子の名前はギヤスパー・ヴラディ。私のもう一人の僧侶よ。そ  
して、元人間と吸血鬼のハーフなの」

奴の口から、きらりと尖った歯が見えた。

—————

さて、リアスは今度の会談がどうかでサーゼクスの元へと向かったため、残った俺達で、此奴の性格を矯正してほしいとの事だ。

因みに、ギヤスパーに関しては木遁で縛って無理矢理連れてきた。

「一先ず須佐能乎で追い回すか」

「止めましょう先輩。お願いですから止めてください」

「……………ならどうする」

「私に任せてくれ」

そう言つて前に出てきたのはゼノヴィア。

その手には何故かデュランダルが握られている。

「ほら、走れ 逃げなければデュランダルの餌食になるぞ！」

「ひいひいひい！デユランダルを振り回しながら追いかけてこないでええええ！ハントされるううう!!」

……………

「おい塔城。俺がやろうとした事をそのまま実行してるぞ」

「……………イツセー先輩より加減は分かって——にゃん!!!」

失礼な奴だ。

俺は生意気な猫を拳骨で沈めると、アーシアが近づいて来た。

「ゼノヴィアさん。活き活きしてます」

「やはりか」

「はい。スツゴク輝いてますので」

恐らくあれでストレスを発散しているのだろう。

「も、もう駄目ですう……………!!!」

見た目通り体力はないな。

「…ギャー君、大丈夫？」

と、いつの間にか復活した塔城がへばっている奴へと近づいて来た。

「小猫ちゃん……………」

「疲れた時は……………にんにくが一番だよ……………」



「やああああん!!ガリリックくらめえええええ!!!」

何だ、まだ元気があるじゃないか。

「おーっす、オカ研!」

この気配は……匙か。

「どうした、匙」

「あ、どうも。匙先輩」

「よ、兵藤にミナト君。解禁された眷属を見に来たぜ」

「今追い回されてる奴だ」

俺がにんにくから必死に逃げるギヤスパーを指さすと、匙は目を輝かせる。

「おお!アジアちゃんと同じ金髪僧侶か!良いなあ!!」

「男だぞ」

「……え」

「女装趣味があるそうなんです」

ミナトの言葉がとどめとなったのか、奴は静かに崩れ落ちた。

「そんなの、あんまりじゃねーか……ッ!!」

若いな。

まあ、気持ちは分からんでもないが。

……む。

「……先輩」

「ああ」

——俺は近くの茂みに向かって苦無を投げた。

「兵藤?!」

隣の匙は驚いているが、苦無は構わず茂みへと向かった。

が、それは後ろの木に刺さる事無く弾かれ、木の前の地面へと落ちた。

「……………おいおい、殺す気がよ!？」

出てきたのは、作務衣を着た怪しげなおっさん……………。

「……………確か、アルデンテ?」

「アザゼルだツ!!」

アザゼル、と聞いてか、俺以外の連中は全員顔を青ざめさせた。

「落ち着け。もう奴は終わりだ」

「な、何言ってるんだ……………ツ!？」

アザゼルだけでなく、匙達も驚いていた。

何故なら、アザゼルの背後から、特注苦無を首筋に当てるミナトがいるんだからな。

「い、いつの間に……………!？」

「……………ははくん。さっきの苦無、だな?」

……………ほう。

「墮天使総督とは名ばかりではないらしいな」

「あんがとよ……………さて、そろそろ離れてくんねーかな?争いに来たわけじゃねーから」

それは恐らく本当だろうな。

ミナトもそう思ったのか、苦無を離して俺たちの元へと戻ってきた。

「それはそうと、聖魔剣使いはいねーのか?」

「木場ならいないぞ」

「ああ、そうか。そりゃ残念……………って、おいそこのヴァンパイア」

アザゼルは木の影に隠れたギヤスパーを凝視していた。

『停止世界の邪眼』か。そいつは使いこなせないと害悪になる代物だ。神器の補助具で不足している要素を補えばいいと思うがな。……………そういや、悪魔は神器の研究が進んでいなかったな。五感から発動する神器は、持ち主のキャパシティが足りないと自然に動きだして危険極まりない」

次に、その視線は匙に移る。

「そっちのお前は『黒い龍脈』の所有者か？」

……確か、対象者にラインを接続して力を吸収する、だったか？

「丁度良い。そのヴァンパイアの神器を練習させるならお前さんが適役だ。ヴァンパイアにラインを接続して余分なパワーを吸い取りつつ発動させれば、暴走も少なく済むだろうぜ」

「後は、俺の血か？」

「——ああ、それが一番の近道だ。ヴァンパイアなんだし一度やってみな」

それだけ言って、アザゼルは去って行った。

「……………墮天使と言うのは、暇人なのだな」

その後の特訓は、程なく順調なものになった……………とだけ、言っておこう。

————

「ギヤスパー、出てきて。無理してミナトと一緒に行かせた私が悪かったわ」

後日、吸血鬼がまた引き籠った。

何でもミナトと共に契約者の元に向かった際、その契約者がギヤスパーを見て興奮したらしく、恐怖に駆られたギヤスパーは契約者を止めてしまったらしい。

今は懸命にリアスが説得しているが、奴はただ泣くだけ。

『ぼ、僕は、こんな力いらないっ！だ、だって、皆停まっちゃうんだ！怖がる！嫌がる！僕だって嫌だ！と、友達を、仲間を、停めたくないんだ……………！大切な人の停まった顔を見るのは、も、もう嫌だ……………！』

それは、奴自身の慟哭だろう。  
なら、俺達に出来る事は一つだ。

「放っておけ」

「！」

俺がそう言うのと、リアスとギヤスパーは驚いたように息を飲んだ。  
「此奴自身が出たくないと言っているんだ。なら、その意思を尊重してやれ」

「だ、だけど……」

「第一、ずつと自分に宿った運命に泣き喚いてる奴が何をしようが、変われる訳ないだろう」

絶句するリアス。

俺は構わずリアスを引っ張っていく。

「ちよ、ちよつとどう言うつもりよイツセー!？」

まあ、教育を頼んだのに行き成り突き放すような発言。  
驚かない方が稀か。

「お前、まだこれから用事があるんだろう?」  
「っ」

そう、此奴にはまだこれからサーゼクスの所へ用事がある。

ならば、其方に集中して貰わねばならん。

「……火は付けてやったんだ。後は奴がそれを燃やすか、消すか  
……俺が見極める」

「イツセー……」

「さあ、行け」

名残惜しげではあったが、リアスはその場を後にした。

「……………飛雷神の術」

場所は変わって、ギヤスパアの部屋。

「僕は……………僕は……………ツ！」

……………やれやれ。

「いつまでウジウジ泣いている気だ？」

「っ!!」

ギヤスパアは驚いたように俺を凝視していた。

「ど、どうやって……………」

「初めてこの部屋に入った時に、予めマーキングを施していた」

まあ、こうなるのはある程度予想はしていたからな。

……………正解だったな。

「……………お前が生まれ持った力、それはお前がいくら泣き喚いても無  
くならん」

「っ……！」

辛いだろうが、此奴には一度、現実を受け入れてもらわねばならん。

「……………でも、僕はッ、先輩みたいに、強くないから……………!!」

「……………言い訳はそれだけか？」

「へ……………」

俺は奴の視線へと腰を下ろした。

「お前が言っている事は自分の弱さを正当化して、逃げているだけだ。  
……………良いか。逃げて逃げて、逃げ続けて、自分だけの牢獄に蹲ってい  
ても、誰もお前に手など差し伸べん。それにな、一人でどうにかしよ  
うとしても必ず限界がある。……………だから他の眷属が、仲間がいる  
んだろう？お前が変わりたいという意志さえ見せれば、必ず手を貸す  
さ。……………初めからこう言うべきだったんだ、リア  
スもな」

「あ、う……………」

「さて、お前は どうしたい？ 一生この空虚な箱庭に籠るか、辛くとも、

外の世界に飛び立つか………決めるのはお前だ」

俺の言葉に、奴は直ぐに返す事無く、俯いた。

………数分後、奴は恐る恐る顔を上げた。

「………僕は、僕は、変わりたい！僕を救ってくれた、リアス部長の助けになりたい!!!何時までも——泣き虫のままは、嫌だ!!!」

——上出来だ。

「………ちゃんと、自分の考えを言えるんじゃないか」

俺は乱暴にはあるが、奴の頭を撫でてやる。

「お前は一人ではない。他の眷属がいる。それに………俺も、出来る限りは協力してやる。だから、他人からどう言われようが戸惑うな。お前は、お前の生き方を貫け」

「———はい!!!」

さつきまでと違い、ギヤスパーは笑顔だった。

## 第二十一話 「お前はお前だ」

「……………か」

ギヤスパアの性格矯正後の次の日、俺は姫島に言われとある神社へと来ていた。

普通悪魔は神社などには入れないものだと思うが……………何か特別な手配をしているのだろうか。

……………姫島は分かるが、もう一人のこの気配は誰だ？

「いらっしやい、イツセー君」

…見上げると、鳥居の下には姫島がいた。

しかし、こうして見ると巫女服が様になっっているな。

「…お前の他にもう一人来ているようだが、一体誰だ？」

「うふふ。流石はイツセー君。鋭いですわね」

「私をお呼びですか？」

そういつて姫島の後ろからやって来たのは、金髪を長く伸ばした柔和そうな男だった。

「こうして会うのは初めてですね、兵藤一誠君」

「アンタは？」

「私はミカエル。天使の長をしております」

そう言うと、奴の背後から翼が開いた。

—————

立ち話もなんだと言う訳で、俺は今、神社の本殿にいる。

「まず、あなたにはお礼を言わなければなりませんね。先日のコカビエルの一件。本当にご苦労様でした」

「……………俺は何もしていない。あそこにいたりアス・グレモリー達が戦った。それだけだ」

「成程、ではそういう事にしておきましょうか」

ミカエルは可笑しそうにクスリと笑った。

……気に食わん反応だな。

『素直ではないと言いたいのだろう』

………何だ？今何処からか声が聞こえたな。

『……相棒、ボケでもそれはきついんだぞ？俺、他の作品と比べて出番がほぼ無いんだぞ？』

そんな外部事情、俺が知る訳ないだろ。

「………アンタが本題に入る前に一つだけ聞く」

「何でしようか？」

「何故、アーシア・アルジエントを追放した」

以前からこれがずっと俺の中で引っかかっていた。

俺は無神論者ではあるが、彼女の信仰心は本物だと言うのがありありと伝わってくる。

ずっと神を信じ、辛い時の中を生きてきた彼女を、なぜ悪魔をも癒せるという理由だけで追放したのか。

だから一度確かめたかった。

天界側はそんな下らない理由で信徒一人を追放するほど唾棄すべき勢力なのか、そうではないのか。

「悪魔を癒せるから、と言う言い訳なら聞かんど。場合によっては俺が教会や貴様等天界を滅ぼす。正直に言え」

座りながら、俺は脅しの意味を込めて殺気を放つ。

奴は瞑目すると、静かに語り始めた。

「それに関しては、申し訳ないとしか言えません。………神が消滅した後、加護と慈悲と奇跡を司る『システム』だけが残りました。この『システム』は、神が行っていた奇跡等を起こすための物。神は『システム』を作り、これを用いて地上に奇跡をもたらして来ました。悪魔払い、十字架等の聖具へともたらす効果……これらも『システム』の力です」

「だが神がいなくなった事で、『システム』に不都合が起こった……」



か？」

俺の問いにミカエルは頷いた。

「正直、『システム』を神以外が扱うのは困難を極めます。私を中心に『熾天使』全員で『システム』をどうにか動かせていますが………神がご健在だった頃に比べると、神を信じる者達への加護も慈悲も行き届きません……残念な事ですが、救済出来る者は限られてしまうのです」

「……………」

「その為、『システム』に影響を及ぼす可能性の有るものを教会に関する物から遠ざける必要があったのです。影響を及ぼす物の例としては、一部の神器———アーシア・アルジェントの持つトワイライト・ヒーリング『聖母の微笑み』も含まれます。そして、貴方の持つ『赤龍帝の籠手』、デイバイン・デイバインング白龍皇の持つ『白龍皇の光翼』も同等の物です」  
「……『神滅具』ではないアーシアの神器が弾かれるのは、悪魔や墮天使も回復出来るから、だな？」

ミカエルは再度頷いた。

「はい。信徒の中に『悪魔と墮天使を回復出来る神器』を持つ者がいれば、周囲の信仰に影響が出ます。……信者の信仰は我らの天界に住まう者の源。その為、『聖母の微笑み』は『システム』に影響を及ぼす禁止神器としています。それと、影響を及ぼす例に———」

「神の不在を知る者……か。つまりゼノヴィアは、悪魔にならずとも追放される対象だったんだな」

「ええ、その通りです。戦士ゼノヴィアを失うのは此方としても痛手ですが、神の不在を知った者が本部に直結した場所に近づく『システム』に大きな影響が出ます。———申し訳ありません。ゼノヴィア、アーシア・アルジェントの両名を異端とするしかなかったのです……………」

恐らくは全てだろう———それらを言い終えたミカエルは、俺に頭を下げた。

その声音には悔恨の念も含まれていた。

『……………演技ではない。恐らく此奴にとつても、苦渋の決断だった

のだな』

なら、俺が言うべき事はただ一つ。

「…頭を下げる相手が違う。それは今度の会談の時に、二人に下げるべきだ。それと——」

「勿論、彼女達には説明させてもらいます」

……分かっていないじゃないか。

——

「では、今日の本題に入りましょう。あなたを呼び出したのはこれを授けるためです」

そう言つて、ミカエルは眼前に一本の剣を召喚した。

……天界側のこの男が召喚すると言う事は、聖剣の類か。

「これはゲオルギウス——ドラゴン・スレイヤー聖ジョージと呼ばば伝わりやすいでしょうか？彼の持っていた龍殺しの聖剣、アスカロンです」

いや、聖ジョージとか言われても分からんのだが。

あれか、新しいコーヒーのメーカーか？

『それはジョー○アだ』

「特殊儀礼を施してあるので、あなたでも扱えるはずですよ」

眼前で輝くそれを、しかし俺はただ簡単に手に取る気は起きなかった。

「どうしました？」

「…アンタ正気か？こんな貴重な業物、どの勢力の派閥でもない俺に託して何になる？」

一応悪魔に多少肩入れしているから悪魔側と捉えられるが、俺は一応どの勢力の人間でもない。

だと言うのに、目の前の天使はそんな物を態々俺に託そうとしている。

普通に考えれば罨、好意的な意味でも訳の分からない事をしているこの男の心理が、俺には謀りかねる。

「私は今度の会談は、三大勢力が手を取り合う大きな機会だと思っています。既に御存知ですのお話しますが、我等が創造主——神は先の戦争で亡くなりました。敵対していた旧魔王も戦死し、墮天使の幹部達も沈黙。アザゼルも戦争を起こす気はないと口にしてます。言わばこれは好機です。無駄な争いを無くすためのチャンスです。このまま小規模なイザコザが続けば、何れ三大勢力は滅んでしまう………仮にそれを避けたとしても他の勢力が攻め込んで来てもいいかもしれません。先の戦争時、三大勢力は一度だけ手を取り合いました。今度も手を取り合える事を祈って——貴方に願を掛けたのですよ」

ふむ、俺にとってはどうでも良い事だな。

『戦争になるやもしれんと言う事だろう。であれば、相棒の家族が危険なのだぞ?』

そうなった場合は俺が三大勢力ごと滅ぼせば良い。

『な………』

何を驚く?

俺は——家族を守る為なら鬼にも修羅にも、咎人にもなり果てると決めているのだからな。

「言いたい事は分かった。なら、俺がその剣をどう使おうが文句はあ  
るまい?」

「ええ」

……言い切るか。

顔の割に中々肝の据わった男だ。

「……なら、受け取っておいてやる」

これを受け取る事で、俺の家族が平穏を享受出来るなら、喜んで受け取ろうではないか。

「では、赤龍帝の籠手と同化させてみてください」

俺は久方ぶりに籠手を展開させる。

……正直な話、これを前に展開したのが何時だったか覚えてないレベルで使っていないな。

『……相棒』

まあ良いか。

俺は泣きの気配を見せ始めたドライグを無視して、聖剣を籠手に同化させた。

「上手くいって良かったです。私はそろそろ行かねばならないのでここで失礼します。……アーシア・アルジエントとゼノヴィアには必ず償いを果たしましょう。それでは、会談の時に」

そう言うと、ミカエルは一瞬の閃光の後、姿を消していた。

俺は出る等とは一言も言っていないのだが。

――

「お茶ですわ」

ミカエルが去った後、俺は姫島の居住区へと上がっていた。

……美味しいな。

「驚きましたわ。イツセー君ったら、ミカエル様を前にあんな啖呵を切るんですから」

「……で？何故俺を上げた？態々そんな事を言ったり、茶を振る舞う為ではあるまい」

茶を飲みながら俺が横目で見据えると、姫島の顔から笑顔が消えた。

「……イツセー君は、何でもお見通しですね」

「……少なくとも、お前が墮天使の血を引いている程度なら知っている」

「！」

…やはり、墮天使関連か。

俺が以前アザゼルの話をした際、此奴は一目には付かない程度に顔を陰らせた。

加えて、初めて会った時から感じていた、リアス達とは異なるチャクラ……そう、半分が墮天使だった。

それに関しては塔城もそうなのだが……まあ、この話題は今は無関係ない。

恐らくはその事だろうな。

そう思い姫島の言葉を待っていると、姫島は巫女服の上を肌蹴させた。

そして広がった翼は——悪魔の物と、墮天使の物。

「イツセー君の言った通り、私は墮天使の血を引いてるわ。……この汚れた翼が嫌で私はリアスと出会い、悪魔となったの。でも、その結果、生まれたのは墮天使と悪魔の翼を持ったおぞましい生き物。ふふ、この身に汚れた血を持つ私にはお似合いかもしれません」

そう言つて自らを自嘲する姫島。

「……私のような悍ましい生き物、本来ならいてはいけない存在なのにね……」

「……それだけか？」

「え？」

俺は立ち上がつて、一言そう言った。

「いてはいけない存在、そう俺に肯定してほしいのか？それとも否定してもらいたいのか？……いや、違うな。お前が今語った言葉に、本音なんて物はない。——お前はただ、自分が何者か分かっていない。それだけではないのか？」

「………ったら………。だったら分かるの!?何でも見通している風な眼をして!!………こんなつ、悪魔なのか、墮天使なのか………私でも分からない事が！貴方には分かると言うのっ!？」

俺の言葉が何かに触れたのか、今までは見せた事がない様子で——  
まるで駄々っ子のように、姫島は喚いた。

……………何でも見通している風な眼、か。

「……………確かに。俺は全盛期ほど、全てを見通せる訳ではない」

「……………？」

「だがな、それでも俺には一つ、分かる事がある——お前は、姫島朱乃だ」

「！」

驚きで固まる姫島に構わず、俺は奴の目を覗き込む。

「他者を甚振るのに悦楽を見出すお前……………何時も柔和な笑顔で空気を和ますお前……………他者よりも繊細で脆いお前……………墮天使と悪魔の血を引くお前……………それらは全て、お前をお前足らしめる物だ。お前を他の誰でもない——姫島朱乃としてな」

「い、っせー……………君」

「……………本当の自分が分からないなら、これから探していけば良い。まだまだ人生は長いんだ。だが……………これだけは覚えておけ。どんな自分自身になろうが、お前はずっと、俺にとっては、ただの姫島朱乃だ」

……………全く、小娘の相手は苦勞する。

「……………イツセー君ッ!!」

と思いつつ帰ろうとしていたら、姫島に押し倒された。

「……………ありがとう……………ありがとう……………ッ！」

どう引き剥がそうと思っていたが、俺の胸に縋り付いて泣き続ける姫島が視界に入ってきた。

それは、まるで自分の存在を再確認するかのよう。

「…………ハア、今回だけだからな」

俺は仕方なく、泣き止むまでイズナにしているみたいに姫島の頭を撫でる事にした。

## 第二十二話 「会談（参加してるとは言っていない）」

夜。

全員が寝静まっているであろうこの時間帯に、学園の方から多数のオーラを感知した。

時間的にも、恐らく会談が始まったな。

『相棒、本当に参加しなくて良かったのか？』

何を言う、奴等が何かを話し合うのに人間の俺が必要になると思っ  
か。

それに明日も普通に学校があるんだ。年寄りはいあまり夜更かしは  
しないんだ。

『なら何故起きている？』

……何故だろうな。

俺でも理由が分からん。

『それなら、妹達に何かあった時の為、たとえば良いんじゃないのか  
？』

……………一本取られたな。

そうだな、そう言った理由にしておくか。

俺は酒を飲みながら（何、未成年？精神年齢は二十を超えてる、気  
にするな）、駒王学園の動向を探っていた。

すると、学園の方で大きなオーラの揺れを感知した。

「……………このままゆっくり眠ればよかったんだが」

どうも俺の周りでは騒動が絶えないらしい。

こればかりは前世から変わらないな。

いや——俺は騒動を起こす側だったな。



俺は鎧甲冑を着込み、

「飛雷神の術」

駒王学園へと飛んだ。

――

時はイツセーが飛雷神で転移する前まで遡る――

アザゼル side

俺、アザゼルは三大勢力と和平を結ぶ為にこの場へとやってきていた。

今現在この場にいるのは冥界のサーゼクス、天界のミカエル――  
―そして、サーゼクスの妹であるリアス・グレモリーとその眷属達が集まっている。

……………赤龍帝である兵藤一誠にも声をかけるようリアス・グレモリーにも頼んだんだが、いざ始まってみると、奴は姿を見せなかった。

曰く「学業に差し障るから無理」だそうだ。

……………ま、まあ良いさ。

ああ言ったタイプの男は大体人の頼みは聞かん傾向にあるからな。

で、率直に結論を述べると――和平は成立した。

まあ、何とかこれで肩張ってた均衡状態は無くなるだろう。

……それに、一介の眷属悪魔に頭を下げるミカエル、なんて珍しい絵も見れたしな。

「そういえばアザゼル」

「ん？」

「一誠君を呼んでいたそうだね」

サーゼクスがその話題に触れてくる。

すると全員の視線が、俺の方に集中する。

あのヴァーリまでもが、だ。

やれやれ、あの男はこんな人気者なんだねえ。

「ああ。この際だから一つ聞きたかったんだ。奴にな」

「イツセーの、何を？」

「何者か、だよ。この会談の前に、アイツの事は調べ上げたんだが特にその経歴に異常はない。そう——奴が戦いを始めたのはリアス・グレモリー達と関わってからなのしかない」

サーゼクスの報告によれば、秘密裏にはぐれ悪魔と戦っていたそうだが。

だがそれを差し引いても……

「奴の戦闘能力は異常すぎる。この間奴が消したコカビエルがいい例えだ。奴は仮にも先の戦争を生き残っていた猛者だぞ？なのにそのコカビエルが……話を聞く限りじゃ手も足も出ずに倒された。しかも教会の戦士にしか使えんデュランダルを使って、だ」

「……多分、イツセーは全く本気を出していなかったと思うわ」

「須佐能乎すら使っていませんでしたしね……」

ホラ、この有様だ。

奴はもう、ただの人間としてカテゴライズするには危険分子すぎるんだ。

「……………それもそうだがアザゼル。君は報告では神器所有者を集めていたそうだね」

「ああ、それはだな——」

その時だった。

一瞬、時が止まるような錯覚を覚えたのは。

これは……………停止世界の邪眼、か？

動ける奴はミカエルにサーゼクス、ヴァーリにグレモリー眷属の一部だけ……………か。

そして外を見れば、警備に当たっていた者達がローブを着た怪しい連中に攻撃を受けていた。

——ちっ、このまま穏やかに終われると思ったのによ。

「さて、今の状況だが見ての通り俺達はテロを受けている。時間を停止せられ外にいる警備の奴らも全滅だ。そして、時間を停止する能力を持つ奴は少ない。そう考えると……………」

「っ！ まさか、ギヤスパーがテロに利用されているというの!?!」  
そういうこったな。

さて、問題はハーフヴァンパイアのいる旧校舎までどうやって行くか、だが……………」

「兎に角、今はテロリストの活動拠点となっている旧校舎からギヤスパー君を取り返すのが目的だ」

「お兄様、私が行きますわ。ギヤスパーは私の下僕です。私が責任を持って奪い返します」

「言うと思っていたよ。だが旧校舎までどう行く？ 魔術師が沢山いる以上、通常の転移も阻まれる」

「部屋に、未使用の『戦車』を保管していますわ」

「…成る程、キャスリングか」

……………ほう、感情を抑え込めるとはな。

こりゃ将来有望の高い悪魔だな、サーゼクス。

「だが君一人で行くのは危険だ」

「ならば僕が同行します」

「頼んだよ、木場祐斗君」

そっちは決まったな。

んじゃ……

「ヴァーリ、お前は外で派手に暴れろ。敵の目を引くんだ」

「……了解」

ヴァーリは窓を開けると、手早く鎧をまとい、外の連中に攻撃を仕掛けた。

それと同じタイミングで、部屋に魔法陣が展開された。

「これは——レヴィアタンの魔法陣」

サーゼクスにしては珍しい、苦虫を噛み潰したような顔。

だがそこにいる魔王少女の物とは違う。つまり——

「書物で見たことがある。あれは旧魔王のものだ」

と、デュランダル使いがそう呟いた。

それと同じタイミングで魔法陣から出てきたのは、ドレスを着た妖艶な女。

「ごきげんよう、現魔王サーゼクス殿、セラフオール殿」

旧レヴィアタン——カテレア。

「先代の魔王レヴィアタンの血を引く者、カテレア・レヴィアタン。これはどういうつもりだ？」

「もちろん——あなた方を滅ぼすため」

その瞬間、カテレアから巨大な魔力弾が放たれた。

が、それをサーゼクスは難なく防いだ。

「カテレア、なぜこのようなことを？」

「先程も言ったはずです。あなた方を滅ぼすため、と。我々はこの会談の反対の考えに至りました。神と魔王がいないのならばこの世界を変革すべきだと……今回の攻撃は我々が受け持っております。そして我々はこの世界を滅ぼし、再構築するのです！理念、法、『シス

テム』も含めてね」

……………ブツ

「クックック、アツハツハツハツハ!!」

思わず俺は堪え切れずに爆笑する!

するとカテレアは面白く無さそうにこっちに振り返った。

「オイオイ、今時世界の変革って……………TVの中の悪役だけだと  
思ってたぜ? そう言うの、直ぐに死ぬ奴程ほざくんだよなあ」

「アザゼル……………貴方は何処まで人を愚弄する!!」

激昂したカテレアは魔力をたぎらせる。

「……………サーゼクス、ミカエル。手え出すなよ」

「……………カテレア、降るつもりはないのだな?」

「ええ、サーゼクス。貴方は良い魔王でした……………が、最高の魔王ではない。だから、私達は新しい魔王を目指します」

「そうか、残念だ」

話は纏まったみたいだな。

俺は校舎の壁を吹き飛ばし、外へと飛び出す。

「へいカテレア。俺といっちょよハルマゲドンとでも洒落こもうか?」

「望む所よ! 堕ちた天使の総督!!」

カテレアも俺と同じ目線へと浮かび上がる。

とその時、さっきと同じ感覚が俺の中を突き抜けた。

まさか———時の停止が消えたのか?

「……………ちっ! まさか、この力が破られるとは……………」

ビンゴみたいだな。

「——もう少し静かに交戦できんのか、貴様等は」

そしてそれに被さるように掛けられた声は、酷くこの場に似つかわしくない、静かなものだった。

まさか……………そう思い、俺は校舎の門を振り返る。

「人の妹が起きてしまったら、どうしてくれるんだ？」

予想通りというか——そこにいたのは、古い鎧甲冑を着た、特徴的な髪形を持つ、赤目の人間（？）、兵藤一誠だった。

「おいおいどうやってきたんだ？」

一応結界は張っていたはずなんだがな…。

「そんなもの俺には無意味だ。それよりどういう状況だ？三十字以内で答えろボラギノール」

「アザゼルだ!!もはや原型留めてねえよ!!」

痔の薬じゃねーかそれ!!

「イツセー先輩!!」

と、旧校舎からあのハーフヴァンパイア達がやって来ていた。

……………まあ、聖魔剣使いに背負われながら、だが。

「僕、やりましたあ!!」

見ればハーフヴァンパイアの手には小瓶が。

……………この現象が解決したって事は、恐らくは此奴の血か。

「ふん、上出来だ。ギヤスパー」

……………あれ?俺ボラギノールなのに向こうは名前呼び?

……………もう、考えるのは止めた。

「何者ですか、彼は?見た所、ただの人間のようですが…………」

おいおい、此奴見る目無いのか?

つつても、普段から化け物オーラ醸し出している訳じゃねーからな、この男は。

「何者だ、ズベ公」

ハハッ、カテレアをズベ公呼ばわりかよ。

「…ッ!! 正当なレヴィアタンであるこの私を……やってしまいなさい!」

カテレアの言葉を皮切りに、無数の魔法使い達が兵藤一誠に対して攻撃を仕掛ける。

「アザゼル! 今すぐ防御用の結界を張って!!」

は? どういう意味だよりアス・グレモリー。

だがその声は決してふぎけてる物ではないので、一応は張っておく。

無数の攻撃に対し、兵藤一誠が取り出したのは——

「団扇?」

三つの勾玉の文様が刻まれた、巨大な団扇だった。

まあ、団扇つつーより、牛魔王が持っている芭蕉扇に近いが。

一体そんなんで何を———とっていると、奴はそれで攻撃を防ぐみたく前方へと突き出した!

俺は爆発する! そう思って僅かに目を細めたが……

『……………?!』

何故か、先程まで存在していた攻撃現象は全て消え失せていた。

一瞬の静寂の後、奴は口を開いた。

「———うちは返し」

刹那———団扇から発生した物凄い暴風が辺り一面を襲った!!

その衝撃は凄まじい物で、その場にいた無数の魔法使いは一瞬にし  
て吹き飛ばされる！

かく言うこつちも……………結界を張っているが凄まじい衝撃だ  
……………ッ!!

やがて風が止むと、兵藤一誠に攻撃を仕掛けた連中は殆どがボロボ  
ロの状態でその場に倒れていた。

あの風、物理的被害も催すのか。

見ろよ、この学校の校舎が一瞬にして瓦礫に早変わりしたぐらいだ  
ぜ？

「う、うう……………」

「何だよ、この男……………」

「まだ踊れそうだな。三下軍団」

今度は複雑に手を動かし始めた。

と思つたらそれは一瞬で終わり、最後に両腕を強く握った。

「木遁・樹界降誕」

軽く地面が揺れた後、奴の周りの大地が隆起していく——そし  
て、大地を突き破つて巨大な樹木が咲き始めた！

それらは意思を持っているかの様に倒れていた魔法使い達を次々  
と血祭りにあげていく！

「ぎゃああああ!!」

「た、助けて——ッ!!」

……………参ったな。

こんなにも躊躇なく同じ人間を殺せるかねえ、一介の高校生だろ？  
「テロリストだという此奴らを同じ人間だとは思わん。唾棄すべき存  
在なのは、お前も分かっているだろう？」

まあそりやそうだな。

見れば樹木はヴァーリが戦っていた連中にも襲い掛かっていた。

「なんという……………!!」



驚くカテレア。  
ま、そりやそうだよな。

数分後、学校があつたこの地は無数の木々で溢れかえっていた。

「貴様のような人間、見た事がない……………!!」

「…言いたい事はそれだけか?三下」

「ツ!!」

激昂するかのようにして魔力を高めるカテレア。  
だが奴は涼しい顔だ。

と、その時、無数の光弾が俺に襲い掛かってきた!

「…世話が焼ける」

兵藤一誠はそう呟くと、伸び切つて沈静化している樹の蔦を伸ばしてそれらを振り払った。

「サンキュ。手間が省けたぜ」

「自分の尻ぐらひは拭つて貰いたいものだ……………で、このクレーターはお前の仕業か。白龍皇」

—— やつぱりな。

つつーか、俺もやきが回つたもんだな。

「悪いなアザゼル。俺としては此方の方が面白そうなんだ」

「……………つたく。なあヴァーリ、一つだけ聞くんぜ」

「ん?」

俺は翼を出現させ、ヴァーリと同じ目線まで飛ぶ。

「うちの副総督のシエムハザが、三大勢力の危険分子を集めた組織—

—— カオス・ブリゲード 禍の団が動き始めてるのを察知してんだ」

「ほう、流星はアザゼル。情報網が速いな」

「そして……………そのトップに立っているのが———『無限の龍神』オー  
ウロボロス・ドラゴン フイス—」

その言葉に、リアス・グレモリー達は勿論、サーゼクス達も驚愕を隠せないでいた。

唯一の例外は——今地べたに座り込んで欠伸をしている、兵藤一誠ぐらいか。

「まったく、どんな事ならアイツは驚くんのだ？」

「まあいい。」

「……ああ、そうだよ。だけど、俺も彼女も世界だの覇権だのには興味がなくてね。カテレア達は彼女の力を利用してよくつついてきただけだ」

「ヴァーリ、貴方は本人を目の前にしてよく言ってくれますね……」

カテレアは心底不満そうな口ぶりだ。

「お前は言い返せんだろう。」

「……で、そこにいる彼は何者なのですか？」

「兵藤一誠。今代の赤龍帝だ」

それを聞いてか、カテレアは驚いた顔をする。

「道理でこの場に……彼の力は危険すぎます。この場で殺した方が無難ではないかしら」

「止めておいた方がいい。君では勝負にもならず瞬殺されるだろう……まあ、かく言う俺もなんだが」

「……あのヴァーリがそんな事を言うとはな。」

だが、今重要なのはそれじゃない。

「今回の件は、我ら旧魔王派の一人、ヴァーリ・ルシファーが情報提供と下準備をしてくれました。彼の本質を理解しておきながら放置しておくなど、あなたらしくありませんね、アザゼル。……自分の首を自分で絞めたようなものです」

「ま、そうなるな」

苦笑いする中、リアス・グレモリーが口を開いた。

「ルシファー……どういいう事？」

おっと、そういやこの事実は俺達墮天使サイドしか知らねえ事だったな。

「我が名はヴァーリ・ルシファア。死んだ先代の魔王ルシファアの孫である父と人間の母の間に生まれた混血児。所謂ハーフだ」

ヴァーリの背中から光の翼と共に悪魔の翼が幾重にも生えだした。

「嘘よ！そんな事が……………」

お前達の驚きはもつともだが……………そのあり得ない存在が、此奴なんだな。

「いいや事実だ。そう——コイツは過去現在、そして未来永劫に於ても、最強の白龍皇だろうさ」

「奇跡と言う言葉は、俺のためにあるのかもな」

全く規格外な存在だぜ、育てて於いて言うのもなんだがよ。

と、ここで兵藤一誠の確認を試してみれば——

「……………」

ね、寝ていやがる……………!!

さ、流石に戦場のど真ん中で眠る奴がいるかよ!?

「…………ゲフン！さてと、それは兎も角だ。その急激なパワーアップ

…………オーフィスの『蛇』か？」

「そうです！無限の力を、世界変革の為に借りたのですよ。お陰で貴方と戦える。サーゼクスやミカエル、そしてセラフォルも倒せるチャンスです」

…………今更思うんだが、ドーピングしてまでの変革なんて、カツコ付くものかねえ。

そう思いながら俺は自作の神器の短剣を取り出す。

「それは…………」

「…………俺あ神器マニアが過ぎてよ。自作で作ったりもするんだよなコ

レが。まあ、殆んどはガラクタ同然の奴ばっかだけだよ。全く、神器を開発した神はスゲーよ。俺はそこだけは神を尊敬してんだぜ？」  
「安心なさい。新世界で神器等と言った玩具は絶対に作らない。そんなものがなくとも世界は機能するのですから。——何れは北欧のオーデインにも動いてもらわなくてはなりません」  
「それを聞いて益々ヘドが出るぜ。ヴァルハラ!?アース神族!?横合いからオーデインに全部かつさらうつもりかよ。まあ良いや……と言うよりもな、俺の楽しみを奪う奴等は——消えてなくなれ」

バランス・ブレイク  
—— 禁 手 !

俺はそう吠えると、短剣から光が発せられる。  
そして短剣の形が変化し、鎧となる。

そう、此奴が俺の中で最高傑作の人工神器——

『パニシング・ドラゴン白い龍』と他のドラゴン系神器を研究して作り出した、俺の傑作人工神器だ。『ダウンフォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍』、その擬似的な禁手状態——  
『ダウンフォール・ドラゴン・アナザー・アーマー墮天龍の鎧』だ」

つつても、機能をバーストさせて無理矢理この形態を発動、維持させているに過ぎないのが、通常の神器との違いだ。

ま、核さえ無事なら幾らでも作り直せる。

「ハハハ！流石だな、アザゼル！」

ほうら、ヴァーリですら大興奮する出来だ。

「さあーて待たせたなカテレア………来いよ」  
「舐めるなっ!!」

特大のオーラを纏って、カテレアは猛スピードで俺の懐へと飛び込むが——遅いな。

ザンツ!!

「オイオイ、折角意気揚々と禁手したのによ……ま、良いや」

「ガッ…ハッ…!!?」

ま、こんなもんだろ。

カテレアは吐瀉物を吐き出す。

「これ程とは……！ですが、ただでは死にません!!」

カテレアは血を吐きながらも何やら体に怪しげな紋章を浮かばせながら、俺の左手に触手を巻き付けた。

「ほお、相打ち狙いか？」

「こうなった以上、貴方に逃げ場はありません！私が死ねば貴方も――」

バシユツ!!

けっ、生きる取引にしちや安すぎるな。

「ほれ、逃げ場は出来たぜ」

「自分の、腕を……ッ!?!」

「左手ぐれえお前にやるよ。だから、消えろ」

驚くカテレアの頭部に光の槍を突き刺す。

光が弱点の悪魔だ。カテレアの体は爆発する事無く粒子となって消えていった。

「まだまだ、改良の余地があるな。もう少し俺に付き合ってもらうぜ、龍王ファーブニル」

そう言って残った宝玉にキスをした後、俺はヴァーリに向き直る。

「さてヴァーリ、次はお前か？片腕は無くしちまったが、お前の相手は取れるぜ？」

「それは魅力的だけど、俺は早く兵藤一誠と戦ってみたいんだ」

はあ、此奴は筋金入りのバトルマニアだな。  
対する兵藤一誠だが――

「ごごたは終わったのか？」

いつの間にか起きていたらしい。

軽く腕を伸ばすと、欠伸交じりにそう言ってきた。

「さあ兵藤一誠。この時を待ちわびていたよ」

ヴァーリは腕を広げて兵藤一誠を待つが、肝心の本人は――  
にヴァーリを見ることなく歩き始めた！  
――特

「お、おい！」

「何処に行く気だい？」

「決まってるだろう――家に帰る」

.....は？

「ど、どう言うつもりだい?!」

「…俺はさっさと眠りたいんだ。それに、旧ルシファアーだか何だか知らんが、自らの力に驕っている糞餓鬼と幾ら遊ぼうが何のメリットもない」

あ、遊び.....。

此奴、ヴァーリすら格下に見てるのかよ。

しかも餓鬼扱いかよ！

絶句する俺達に構わず、奴はいよいよ校門を出ようとした。

と何を思ったか、ヴァーリはこんな事を言い出した。

「.....そうだ。良い事を思いついた」

「.....」

「君の両親——そして、君の妹である兵藤イズナを、俺が殺すと  
言ったらどうする?」

静寂の中放たれたその言葉に反応する様に、兵藤一誠はぴたりと足  
を止めた。

「そうすれば君も俺と戦う気になるだろう?それに——君の家族  
も、老いて死ぬより天龍に殺された方がよっぽど劇的な人生になる  
……そうは思わないかい?」

……アイツ、何つー事を。

兵藤一誠が断れないと踏んで態とそう言ったな。  
とは言え、兵藤一誠が断れば躊躇なく殺すだろうがな。

……さあ、どう出る?

『……………!!』

後ろを振り返ってみると、リアス・グレモリーとその眷属達は揃っ  
て顔を青ざめさせていた。

……………どうしたんだ?

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

!!!!!!!!!!!!

その時だった——まるで、心臓を鷲掴みにされた、そんな錯覚に陥ったのは。

そして時を同じくしてこの場所が大きく揺らぎ始めた。

「……………おい」

漸く兵藤一誠が振り返ったが——奴は、笑っていた。

そして奴の体から湧き出る濃密な魔力が、大地を割り、夜の空を大きく裂いていく!!

おいおい……………これは、最上級悪魔とか、魔王クラスだとか、そんなちやちなもんじゃ断じてねえ!!

これは——神クラスのそれだ!!!!

「そんなに遊んでほしいか?——良いだろう、たつぷりと遊んでやる」

薄ら笑いを浮かべると同時に、奴に纏わりついていたオーラが一段と大きくなる!!

自らが想像していた物以上だったのか、ヴァーリもその顔には焦りの表情を浮かべていた!

『アルビオンよ』

突如、奴の左手の甲が光り輝き、そこから声が響いた。

——ここで登場とはな、赤龍帝・ドライグ。

『ドライグー!目覚めていたのか…………いや、それよりも何なのだ!?その男のプレッシャーは!?』

『今の内にその宿主に別れを告げておけ。いや——もうお前との



因縁も今代で終わるやもしれんな』

『何……!?!』

アルビオンの驚愕を他所に、ドライグは淡々と語り始めた。

『この男は魂だけとなった俺達ですら、その気になれば殺せる。そんな男だ……そしてその宿主の小僧は、この男の最も触れてはいけない逆鱗に触れた——いや、踏み躪ったと言うべきか』

ドライグの言葉が続く中、兵藤一誠を覆う魔力が巨人の形に形成されていく。

『そういえば言っていたな、アザゼルよ。この男は歴代でも最強の白龍皇だと。ああ、それは認めよう』

初めは半透明の骸骨の巨人だったそれだが、筋繊維を纏うかのよう  
に、さらに濃密な魔力に覆われていく。

『だがな、この兵藤一誠は——最凶の赤龍帝だ』

グオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

天に向かって吠えるそれは、二面四碗の阿修羅となっていた。

「お前がどれだけ泣き叫ぼうが——俺は一切手を緩めんぞ」

そう呟いた兵藤一誠の顔は、常人なら見ただけで――魔王すら殺せそうな、凄惨な冷笑を浮かべていた。

## 第二十三話 「兵藤一誠という名の修羅」

アザゼル side

世の中には、アツと言ってから言葉が出ない時がある。

何か信じられない物を見た時とか、奇妙な体験をした時とか

.....

今、俺達はそのまさに言葉が出ない状況を間近で見させられている。

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

「——ッ!!?」

今、耳を劈く轟音を上げて校舎の瓦礫に叩き付けられたヴァーリ。身に纏っていた白い鎧は簡単に砕け散り、その銀髪が血で染まっていた。

「————おいおい、随分と倒れるのが早いな」

ズン!!!!

満身創痍のヴァーリに、まるで他人事のように掛けられた声の後に、ヴァーリの体にうねった剣が突き刺さった。

ヴァーリは成すがままに持ち上げられると、再び瓦礫の山へと無造作に投げ捨てられた。

「遊んでくれと駄々をこねたのはお前だぞ?——ルシファー」

そんなヴァーリにゆつくりと歩み寄るのは、赤龍帝・兵藤一誠。

そして兵藤一誠が一步踏み出すのと同時に、音もなく動く青い半透

明の阿修羅。

「ぐっ……………」

——さつきからこの繰り返しだ。

奴が兵藤一誠の家族を殺すと言ってから、ヴァーリは袋叩きに合っていた。

そしてヴァーリがどれだけ攻撃しようとも、あの半透明の巨人はビクともせず、当然、中にいる兵藤一誠自身も無傷だ。

ふらふらと、ヴァーリは力なく立ち上がった。

だがそんな事はお構いなしに、今度は数珠状に連なった勾玉状の塊を放った。

《Divide Divide Divide Divide Divide  
!》

ヴァーリは前方に手を翳して、半減を行う。

そしてそれを魔力の砲撃で相殺した———と思っていたら、あの巨人が持つ剣がヴァーリ目掛けて飛んできた!

「!」

躲そうとしていたが、先に受けたダメージのせいで思うように動けず、巨剣はヴァーリへと突き刺さった!

「!!」

悲鳴を上げる事すらままならず、ヴァーリの体は大地へと落下していく。

「う、ぐう……………!!」

——圧倒的だ。

この勝負———いや、奴自身は勝負とすら思っちゃいないだろう

が——ヴァーリに勝ち目なんてない。

「……………こんな物か」

そして、かけられた言葉は、酷く冷たかった。

兵藤一誠は満足に動けないヴァーリを容赦なく蹴り飛ばす。

もう兵藤一誠は、ヴァーリを敵としてすら、認識しちやいない。

奴の認識じゃ、ヴァーリはその辺の道端に落ちてる小石を蹴って遊ぶようもんだろな。

「——立てないのなら、立たせてやろう」

グツと、ヴァーリの胸を踏みつけて、兵藤一誠はヴァーリの瞳を一瞥すると、再び蹴り飛ばす。

すると、先程まで苦しそうに呻いていたヴァーリが、震えながらも立ち上がった！

「——来い」

ヴァーリに向けて手を動かすと、ヴァーリはなんと吸い寄せられるように兵藤一誠の元まで行きやがった！

が、寸前まで到達したところで巨人に殴り飛ばされる！

「があ!!」

「兵藤一誠！ヴァーリに何をした!？」

俺は気になって聞いてみた。

すると奴は、

「幻術だ。俺を殺すか、俺が術を解かん限り、あの雑魚は一生俺に挑み続けるようにしてある」

…………………………何てゲツスイ事しやがる。

「下衆い？立てん彼奴に手を差し伸べてやってるんだ。逆に感謝してほしいぐらいだが」

満身創痍になりながらも、無理やり奴に挑むヴァーリ。

だがその度に切られ、吹き飛ばされ、燃やされていく。

「奴が死なんようにしてあるのも、幻術の一つだ。簡単に死んでしまったら面白くないからな。奴の脳は今、致死量の傷を一切意識しない状態になっている」

……無理矢理生きている状態ってわけか。

こりや、彼奴が満足するまで、ヴァーリはずっとサンドバックって事かよ。

つつーかそんな幻術、いつ掛けたんだ。

「最初に奴と戯れた時だが？」

いや、そんな事も分からないのか？みたいな顔されてもよ……………。  
後さり気に人の心読むなよ。

「……………おい、雑魚」

そんな心中の俺にかまわず、奴はヴァーリへと歩み寄る。

「お前、覇龍は使えるのか？」

——なんて事を聞きやがる！

『貴様！これ以上何を望む!?もうヴァーリは——』

「黙れ白蜥蜴。ガラクタに宿った貴様の意見など聞いていない……………俺はこの屑に聞いている」

アルビオンの悲鳴をその言葉で一蹴すると、兵藤一誠は胸倉を掴み上げた。

「おい、答えろ。ハイか、イエスカ」

「……………える」

「もつとハッキリと答えろ」

「……………使用は、可能だ……………」

その返事を聞いてか、兵藤一誠は鼻を鳴らして、ヴァーリを放り投げた。

そして、倒れこんだヴァーリの眼前に、何かを投げ渡した。

瓶？

一体何だっつてんだ……………

「——まさか、あの時先輩が回収していた……フェニックスの涙?!」

な、何だと!?

……：……：そういやリアス・グレモリー達は以前、冥界のレーティングゲームでフェニックスと戦ったって、レイナーレが言っていたな……その時の土産か?

「——拾え」

兵藤一誠はヴァーリにそう命令する。

今のヴァーリは完全に兵藤一誠の言い成り……：……：意思とは無関係に、ヴァーリは震える手で瓶を拾うと、傷口に振りかける。

すると、ヴァーリの体中の傷はあつという間に完治した。

「……何の真似だ?」

「さつさと使え。覇龍をな」

有無は言わさない迫力を見せる兵藤一誠に、ヴァーリは一旦目を閉じると、禁じられた呪文を詠唱する。

「——我目覚めるは、覇の理に全てを奪われし二天龍なり。夢幻を妬み、無限を想う。我、白き龍の波動を極め、汝を無垢の極限へと誘おう——」  
『ジャガーノート・ドライブ覇龍』!!」

《Juggernaut Drive!!!》

白い光が辺り一面を覆い、光が晴れると、そこには巨大な鎧姿のヴァーリがいた。

そう——ヴァーリは僅かな間だが覇龍をコントロール出来る。だがそれでも、奴自身の膨大な魔力を命代わりに消費しての話だ。果たして兵藤一誠相手に何処まで持つか……。

だがその本人は特に顔色も変えてはいなかった。

寧ろ——





のチャクラ・魔力を吸収する性質を持っている。そして——それを餌に龍は更に成長していく」

「!!」

兵藤一誠の言葉通り、龍はどんどんと胴体を太く成長させやがる！  
加えてヴァーリの鎧には亀裂が生まれていく！

「ぐっ……………!!」

《Half Dimension!》

ヴァーリは起死回生の一手として、樹木の龍の質量を半減させる！  
それを受けて、龍はその質量を減らしていく！

「——火遁・龍地吼」

——このまま脱出なんて事、此奴がさせる訳ねーか。

大地に手を叩きつけた後、ヴァーリの足元から龍を模した炎の柱が  
噴き出てきた！

それらは一気にヴァーリに纏わりつく——つて、今のヴァーリ  
は樹木に絡まれてる！

そこに炎が発火すれば——

「火葬代はいらん。ありがたく思え」

「が、ああああああ!!!!!!!!  
ああああああ!!!!!!!!」

予想通り、ヴァーリ!!!!の肉体は樹木の龍と共に激しく燃え上がる！  
逃げようにも、ヴァーリ!!!!の体にはあのバカみたいに太く成長した樹  
木が絡みついている！

——肉の焦げる音を立て続けた数分後、漸く炎は沈静化した。

煤になった樹木から這い出たヴァーリは、力なく倒れる。

もう、鎧すら発現させる気力もないんだろう……………。

「——ふん」

だが、奴は容赦なくヴァーリの背中を踏みつける！

「今のお前は俺の幻術で死ねない状態だ。聞こえているだろうから  
言っておいてやる————本当の覇龍は、ここう使うのだ」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

ヴァーリを踏みつけたまま、兵藤一誠は初めて鎧を身にまとった！

一体何を……………

「——ジャガーノート・ドライブ覇龍」

《Juggernaut Drive!!!》

———と想っていた俺達の目の前で、奴は当たり前のように覇龍になりやがった!!!

『貴様、呪文なしで……………!?!』

「あんな過去の怨念に執着した連中の戯言など、唱える必要があるのか?」

『———まさかっ!?!』

『そうだ、アルビオンよ。この男はいとも簡単に屈服させたよ……………

歴代の赤龍帝

達の怨念をな』

……………この男、本当に人間か?

「おい！歴代の怨念は……………俺が調べた限りじゃ、途轍もない怨念に包まれ二天龍ですら干渉出来ねー筈だ！」

俺が気になって尋ねると、兵藤一誠は何てことはないように答えた。

「それはそうだろう。こいつ等は見下していたお前達に封印された莫

迦二人だからな」

『……!』

「それに……こいつ等に出来なくとも俺には出来た。それだけだ——さて」

兵藤一誠はヴァーリを幻術で無理矢理立たすと、眼前で指を二本立てた。

「冥土の土産に……貴様には本当の須佐能乎を見せてやろう」

そう言ったと同時に、兵藤一誠の周りを覆っていた魔力が急に大きくうねり出した!!

そして——気付けばその巨人は俺たちの視界の遥か上にまで成長していた!

フォームはフードを被った修験者のような出で立ちになっていた………!

「定まれ……」

覇龍の姿のまま、兵藤一誠が拳を握ると、そのデカブツの魔力が安定していく。

「魔力が安定していく………」

「……また、形態が変わっている?」

サーゼクスの指摘通り、修験者の衣が鎧へと変わっていく。祈りのように組んでいた両手は解かれ、背部からは翼が形成されていく……更に、翼の先端に手が二つ形成され、その手には納刀された刀が生まれる。

そしてその顔は——烏天狗のような物へとなっていた。

——ハハツ、此奴はもう、俺達が太刀打ち出来る次元を  
超えていやがる。

最早笑いしか出ねえよ。  
信じられるか？

俺達を天から睥睨する烏天狗のような武者の巨人を扱うのが、人間  
なんてよ。

「……これが、完成体・須佐能乎だ」

そしてよく見れば、巨人の額に収まっていた兵藤一誠。  
それほどまでに膨れ上がるのか、これ……。

「此奴は破壊そのもの。一太刀で神羅万象すら砕く……お前達がかつ  
て忌み嫌ったドラゴンにすら匹敵するほどのな」

鎧武者の巨人が、兵藤一誠の言葉に続けて刀を抜刀した。

その時の風圧だけで、この周囲に張っていた結界が崩壊した！

「……ルシファアの血と共に、砕け散れ」

鎧武者の巨人が、大きく刀を振りかぶる！

不味い、あれだけの巨体があんなデカい刀を振るったら……!!

——と思っていたが、何時まで建っても衝撃は来なかった。

それどころか、鎧武者の巨人の巨躯が一瞬にして霧散した！

それを受けて着地する兵藤一誠。

「おい、一体どう言うつもりだ？」

此奴はヴァーリを本気で殺すつもりだった。

それなのに何故……。

「——お前達の結界があ之余波だけで崩壊した以上、完成体の力

を振るえば、この街に甚大な影響を及ぼす。そうなれば、俺の家族も危険なんぞな」

「……………ハハツ、事前に調べてはいたが、此奴はホントに——筋金入りの家族思いなんだな。」

「それに……………個人的に興味がある」

興味？

訝しげに思っていると、奴は立ったまま呆然としているヴァーリへと向かった。

兵藤一誠が肩を押すと——ヴァーリはそのまま倒れた！

「……………気絶していたのか。それに、幻術も解いていたのかよ」

いつの間に……………と思っていると、兵藤一誠は面倒臭そうに答えた。

「俺が完成体を発動させた時だ……………普通なら崩れ落ちると思っただんだが、此奴は立ったまま意識を落としていた」

クツク、とほくそ笑むと、

「此奴が俺への恐怖で戦う事を——復讐を辞めるのか、それとも……………」

そこで言葉を切ると、奴は口元を歪ませる。

「——そのあり得ないを考えるのもまた、一興だろうか？」

俺の目を見てそう言うのと、

「——じゃあな」

奴は閃光のようなスピードで消えていった。

つて、

「これをどうにかして行けやああああああああああああああああ  
!!!!!!」

第二十四話 「女が複数寄れば……………五月蠅い」

俺があのだ……………兎に角、何かと戦って数日後。

……………誰だったか忘れた。

そもそも戦ったのかも定かではないのだが……………まあいい。  
忘れる程度なら大した奴でもないのだろう。

……………そうそう、俺の家に（何故か）新しい住人が増えた。

「うふふ、イツセー君♪」

「ちよつと朱乃！くつつきすぎよー！」

……………そう、何を隠そう、今日からここにいるオカルト研究部の  
女子部員が俺の家にホームステイすることになった。

……………つたく、原因はサーゼクスのあの一言だ。

何が『今後眷属女性陣は、兵藤一誠の元に住まう事で親睦を深め合  
いなさい』だ。

因みにそれを伝えたあ、あ……………アポカリプスは須佐能乎で空高  
く打ち上げた。

運が良ければ生きてるだろう、多分な。

それは兎も角……………今、俺の両腕にはリアスと姫島が腕を組んで  
きている。

正直に言おう……………

「……離れる。暑い」

そう、暑いのだ。

コイツらは今の季節を理解してるのか？

ただでさえ他の奴より脂肪を無駄に蓄えてると言うのに、こうやって人にくつついてくる……故に、夏と言うのも相まって非常に鬱陶しい。

「そんな事言わないでよ、イツセー」

「そうですね。普段から私達への教育で疲れてるであろうイツセー君を癒してあげたいのですわ」

「だったら離れる。イズナを愛でてこそ俺は癒されるんだ」

俺を普通の煩惱だらけの思春期男子だと思うな。

「はう、イツセーさんが満員御礼ですう！」

「うむ、ここは中々手が出せないね……この二人が強敵か」

そしてその教会コンビ、少しは人を助けようとする素振り位見せたらどうだ。

「……第一、部屋が足らんだろう」

そう、俺の家はそんなに大きくない。

この人数は流石に部屋が足りなさすぎる。

いつその事、この居候組は外でテント張って過ごさせるか……？

そう思っていた俺の元に、聞きたくなかった新情報が寄せられた。

「あらイツセー。それは大丈夫よ？何でもリアスさんのお兄さんが家を改築してくれるらしいから」

な……………

「……母さん。冗談は大概にしてくれよ」

「本気よ？」

「……………それに、こんな奴等のホームステイをどうして……」

「こら、こんな奴等とか言わないの」



頭にチョップを喰らった……全く痛くないが。

「それに……イズナの事ばかりだったアンタにこんなに可愛い女の子達が知り合いだったなんて、予想外でね♪これなら、孫の顔も安心して見れるわ〜」

「……ただの腐れ縁だ」

孫で……少しは俺達の年齢をだな。

俺の恨み言は残念ながら、母さんの鼻歌によって消された。

「ただいま〜……お兄ちゃん？」

「!?」

と、ここで我が愛しのマキシマム・ラブリーエンジェル、イズナが帰宅した！

驚いて振り替えるが、既にイズナの視界には、俺の両腕で組み付いている二人の痴女……言い訳するには、少し厳しい。

「……お兄ちゃんの、スケコマシ」

「ぐう!?」

ツン、とそっぽを向いたまま、イズナは無言で階段を登っていった。

……いい……いい……

「イズナに……嫌われた……!」

そうだ……死のう。

そう思い至った、とある夏の日であった。

## 第五章：冥界合宿の……猫!!!

### 第二十五話「冥界に行く事になった修羅」

さて、俺達学生は現在は所謂夏休みと呼ばれる長期休暇となっている……その中でも働いている全国の父さん方には敬服の思いだ。

そんな明るる日の早朝、俺は何をしているのかと言うと――

「1997……1998……2000……」

近所の河原にて、片手で逆立ちしながらの腕立て伏せを行っていた。

まあそれだけだと味気がないから、俺に掛かる重力を更に倍加、加えて加重岩の術も併用している。

一般人がやれば真面に動けなくはなるだろうが、これぐらいでもしなければ特訓とは言えんからな。

さて、朝食の時間と他の修行も考慮すると、あと二百といったところか……少しペースを上げよう。

腕立て伏せを行った後は、軽く隣町まで走り込み（勿論重力込みで）、その後は仙術の基本である自然と一体になる訓練（柱間から奪った時は輪廻眼の力だったからな）、術の精度が落ちてないかの確認――  
――これらを終えて、ようやく俺は帰路に着く。

「ただいま」

「お帰りイッサー」

食器を洗っている母さんにそう声をかけてお俺は食卓に着く。

「イッサー君、今朝から何処へ行っていましたの？」

「……さあな」

姫島の質問を軽く流しながら、味噌汁を啜る……うん、美味しい。

この味付けは……

「今日の当番はリアスカ」

「…良く分かったわね」

「少し塩気が強めだからな」

まあ、美味しいから文句はないんだが。

「ご馳走様〜」

と、ここでイズナが先に朝食を食べ終えていた。

制服に着替えているところを見るに、恐らくは部活か。

「イズナ、ちゃんと熱中症対策はしていくんだぞ？」

最近は酷暑だからな。

改築されたこの家の冷房なら問題はないが……外だとそうもいきまい。

「もう、イズナ子供じゃないよお……でもありがとつ、お兄ちゃん！」

ああ、今日も我が妹は天使だ……！

元気よく食卓を後にしたイズナの背中を見送りながら、白米を掻き込んだ。

ああ、言い忘れていた。

「お前ら、勝手に俺の部屋で眠るな」

「「え、駄目!?!」」

駄目に決まってるだろう。

しかも何故裸なんだ。俺でなければ貴様ら今頃貞操を失ってたぞ。もう少し女は慎みを持ってもらわないとな。

—————

そして食後、オカルト研究部の部員全員とミナトが我が家に集まっていた。

「冥界に？」



……と、まあ何やかんやで生きていた先生（イツセー君は舌打ちしてた）も一緒に冥界に行く事になり、この場は一旦お開きとなった。

## 第二十六話 「電車で冥界に向かう時代」

さて——俺達は今、電車で冥界に向かっている。

流石に自分が慣れていた駅にこんな広大なホームや電車があると  
は思わなかった（KONAMI感）

まあ外の景色は変な色が広がっているが。

「どのくらいで到着するんですか？」

「大体一時間程度ですわ。この電車は次元の壁を正式な方法で潜り抜けて冥界に向かいますの」

「へえ……凄いですね」

ミナトは感心した様子だ。

「何だ。小学生の時に冥界に向かう際に壊した壁はそれか」

『!?』

何を驚く？

——ああ、

「心配せずとも、逮捕される前に逃げるさ」

「いや、そうじゃないんだけど……」

ではなんだと言うんだ。

まあ良いか。

俺は腕を組んで眼を瞑る——特にする事もないから、眠りにつこうとしたら、隣に姫島が腰掛けてきた。

「うふふ、イツセー君。もし宜しければ膝をお貸ししましょうか？」

.....

「朱乃！そんな真似、主の私の前で——」

「なら、遠慮なく借りるぞ」

俺はリアスの言葉を遮って、姫島の膝に頭を乗せる……ふむ、

中々心地良いな。

『……ッ!?!』

途端に、周りからは信じられないとばかりに口をあんどりと開けた間抜けな顔で見られた。

「……っ／＼／」

——やれやれ。照れる位なら、何故こんな事を言ったのやら。

俺は周りの涙目、嫉妬の視線を無視して、今度こそ眠りに付いた。

——後、涎垂らして寝た餡掛け墮天使に、幻術を掛けておいた。

延々と俺の須佐能乎に追いかけて回される夢を見させてやろう。

鬼畜？知らんな。

—————

「イツセー君、着きましたわ」

「……ん」

姫島の声で眼を覚まし、首を鳴らす。

「良い寝心地だったぞ、姫島」

「そう言って頂けて嬉しいですわ♪」

さつきは照れていた癪に、今はこうしてご機嫌な様子で俺の腕に絡み付いてくる。

やはり女心と言うのはわからんな。

「イツセー！今度は私が膝を貸してあげる！」

「気が向いたらな」

「い、イツセーさん！私も、何時でもお貸しできる覚悟です！」

「そんな下らない事で一々覚悟を決めるな」

たかだか膝枕一つでよくもまあ……………青いと言う他、あるまい。因みにアメンボ野郎は降りなかった。

何でもサーゼクス達と会談があるのだとか。

それは兎も角、奴は何故顔が真っ青だったのだろうか(すつとぼけ)そして俺の顔を見るなり震えるとは失礼な。

今度は完成体と覇龍のコンビを二十体位夢に遣わしてやろうか。そんな事を思いながら電車を出た。

『お帰りなさいませ、リアスお嬢様!』

———そう言えばコイツ、お嬢様だったな。

「イツセー?その「お前お嬢様だったな」みたいな目線は何?」

「良く分かったな」

「少しは否定してよ!」

等と下らないやり取りをしていると、目の前にあの銀髪メイドが出てきた。

「お帰りなさいませ、リアスお嬢さま。道中、無事で何よりです」

「ただいま、グレイフィア。元気そうで何よりだわ」

「馬車をご利用したのでお乗りください。グレモリー家の本邸までこれで移動します」

馬車とはまた大仰だな。

「私はイツセー、アーシア、ゼノヴィア、ミナトと乗るわ。恐らく不慣れでしょうから」

別に尾獣の上に乗ったりした事があるから慣れとか関係ないのだが。

見ればミナトも苦笑いしている。



——まあ良いか。

そうこうしている内に、本邸に着いたらしく、俺達は馬車から降りた。

こんな我が儘姫の為に、よくもまあ集まる物だな。

「悪かったわね！我が儘で!!」

「自覚があるなら矯正しろ。後、人の心を勝手に読むな」

脛にローキックを打ち込むと、リアスはレッドカーペットの上で蹲った。

滑稽だな。

と、人混みから誰かが飛び出てきた。

「リアスお姉様！お帰りなさい！」

そいつは何とか立ち直ったリアスに抱きついた。

「ただいま、ミリキヤス！大きくなったわね」

誰だ？

「この子はミリキヤス・グレモリー。お兄様——サーゼクス・ルシファー様の息子なの」

……ほお、シスコン一筋だと思っていたが、致す事は致していたのか。

——それは兎も角、コイツは将来大物になるだろう。

俺の直感ではあるが。

「ミリキヤス・グレモリーです。よろしくお願いします！」

……そう言えば、現魔王は襲名だったな。

だからこの小僧はグレモリー姓な訳だ。

「兵藤一誠だ」

「……あ、貴方が兵藤一誠さんなんですわね！僕、貴方のファンなんです！もし宜しければ、握手をお願いします！」

「……ファン、だと？」

どういふ事だ、俺は悪魔陣営に何かしたのか？

それはまあ追々あのアントラー……だったか？に追及（物理）するとして、俺は目の前の小僧の手を取り敢えず握った。

すると奴は嬉しそうに跳び跳ねていた。

一体何が何やら。

そのまま上への階段を登っていると、一人の女と出くわした。

見た目はリアスにそっくり、とは言えその髪色は亜麻色で、目付きは少し悪い。

「ただいま戻りました。お母様」

「お帰りなさい、リアス。それと、眷属の方々も、ようこそ」

………若いときに色々やらかしたのだろうか。

あの若さで二児の母親とは。

「初めまして、兵藤一誠君。リアスの母の、ヴェネラナ・グレモリーと申します」

「兵藤一誠です。改めまして、宜しくお願いします」

一応は敬語を使っておくか。

理由は特になが。

「悪魔は魔力で見た目を自由に出来るのよ。お母様はいつも今の私ぐらしいの年齢好なお姿で過ごされてるの」

リアスが俺達にそう教えてくれた——成る程。

「要は若作りか」

——刹那、この場の空気が凍った。

「……グレイフィア。何処か一眠り出来る部屋に案内してくれ」

「………か、畏まりました」

俺は別に何も気にする事はなく、グレイフィアに部屋への案内を頼んだ。

全く、老いは誰しも嫌なことなのだ——悪魔然り。

しかし……生命の気まで若いのはどういいう理屈なのだ？

## 第二十七話 「修羅は龍王と戯れる」

さて、俺が冥界に来て翌日の事。

「喰らえっ!!」

「っ!」

俺は目の前の巨大な龍と戯れていた。

奴が吐き出したブレスを須佐能乎の腕で防御し、カウンター気味に須佐能乎の剣を投げ飛ばした。

「むん!」

だが、それは横槍の魔砲撃により消失させられる。

横を見れば、俺に迫る蒼窮の体躯——ティアマット。

「まだまだ行けるだろう!? イッセー!」

「……当然だ」

俺はティアマットが放つ様々な属性の砲撃をかわしつつ、もう一体の龍へと肉薄する。

「良い根性だな! 少年っ!!」

ガキイイイイイン!!!

目の前の龍の拳と須佐能乎の拳がぶつかり合い、大気が爆ぜる。

——押してダメなら、

「……………っ!」

「ぬおっ!」

引いてみる、だな。

僅かに此方側の力を弱めると、向こうの龍の体躯が前のめりになる。

揺らいだその体躯、そして無防備な顎に向けて、俺は須佐能乎第二形態の拳でアッパーを繰り出す。

「がっ!!」

アッパーで浮かび上がる体躯。

俺はその無防備の状態で、須佐能乎の腕と共に印を組む。

「雷遁・雷豪雨」

無数の雷の矢を降らし、龍の鱗に大きなダメージを与える。

「——ッ!?!」

「タンニーン!!——!?!」

「他者の心配とは余裕だな、ティアマツト」

俺は大地を隆起させ、ティアマツトの体を揺らめかせる。

足が僅かに鑑を踏むのを見逃さず、須佐能乎の両手に青い螺旋状の球を二つ形成し、それをティアマツトにぶつける。

「須佐能乎螺旋丸!」

「ガッ——!!!」

ティアマツトはあつという間に吹っ飛ばされ、周りの山々を粉々にしつつ、漸く止まることが出来た。

「ぬう……………まだ痺れが残っているな」

「ふうっ……………さ、流星はイツセーだな」

まあ、こんなものだろう。

「特訓に付き合ってくれて礼を言うぞ。ティアマツト、そして——  
——龍王・タンニーン」

今回は、リアス達眷属一同で、あの……アリクイの特訓メニューを受けている中、暇を持って余していた俺に対して、ティアマツトが特訓を施してくれると言ってきたのが始まりだ。

そして約束の場所に来てみると、そこにはティアマツトの他に紫の鱗を持つ龍がいたのだ。

それがこの龍——タンニーンと言うわけだ。

久方ぶりに少し楽しめたな。

こんなもの、冥界でしか出来ぬから、冥界に来たのは正解だったろう。

「しかしティアマットよ、お前の話していた通りだな」

「む？」

俺は今朝自分で作った稲荷寿司を頬張りながら、二人の話に耳を傾ける……………少し酔を多くしすぎたか。

やはり母さんが作る稲荷寿司にはほど遠いな。

「人間だと言うのに、この俺達の本気にならなければ……………いや、本気でも負けてしまう程の実力者とはな」

「だろう？ 何せこの私すら、イツセーには敵わなかったからな」

俺はそう簡単に勝利は譲らんさ。

「覇龍すら自由自在に使いこなすからな」

「何だ?!……………少年、お前は本当に人間なのか？」

「失礼な。俺はちゃんとした人間だ」

どいつもコイツもコメント欄も……………何故俺を人外扱いするのか。

俺だって泣くぞ。そして終いには世界を滅ぼすぞ。

「にしても……………籠手は使わないのか」

「使う機会がないだけだ」

と言うか、こんなガラクタに頼る理由がない。

精々が今もこうして重力を重くしているだけだからな。

「そ、そうか……………(ドライグめ、何と不憫な…………)」

良かったなドライグ。憐れみを貰って。

『そんなものいらん！うおおおおおん!!』

喧しいぞ。

念仏唱えて昇天させてやろうか。

そう思いながら、俺は周囲に目を配らす。

何せ周囲の山々は全て瓦礫になっているし、その辺の大地は大きな裂け目が出来、河原に至っては流れが変わっているし、土砂で埋もれ

てしまっている。

「少しはしやぎすぎたか」

——まあこの後、木遁やら何やらで直すことになるのだが。

——

特訓を終えて、俺は近くで温泉を見つけ、湯に浸かる。

「……中々良いな」

疲れも共に取れていく感覚だ……。

その中で俺は特訓中のアイツ等——特に、姫島と塔城を思い浮かべた。

『奴等、何も無茶をしてなければ良いが……』

姫島は墮天使の血を、塔城は己の本当の力を忌み嫌い、恐れている。

だがそれを乗り越えなければ、奴等はお荷物になってしまう。

それは恐らく二人とも自覚している筈だ。

だが何なのだろうな………無茶をやらかして倒れる塔城が思い浮かぶのは。

そんな事を考えていると、入り口から物音が聞こえた。

「………何しに来た。ティアマツト」

入ってきたのは、ティアマツト。

バスタオルで体は隠してはいるが、その反則的なスタイルは全く隠しきれない。

寧ろ——あの巨大な胸が強調されていて、思春期男子であれば慌てふためくのは想像に難くない。

まあ、俺は思春期なんてとうの昔に終わっているが。

「なあに、イツセーの背中でも流してやろうと思つてな」

「……そうか」

俺は湯船から上がる。

それと同時にだつた。

バスタオルを剥がしたティアマットに、床に押し倒されたのは。

「……何をする」

一応無駄だろうとは思うが、俺は声を掛ける。

だがやはり、ティアマットは聞く耳持たず、更に密着してくる。

「……す、すまない。イツセー」

「……」

「お、お前が欲しくて、堪らないんだ………！」

——龍の発情期か。

色に浮かされ、俺へと密着してくるコイツの瞳は、酷く微睡んでいた。

猫であれば、千切れんばかりに尻尾を揺らしているだろう。

切っ掛けは、さっきの特訓か。

「さっき………イツセーに触れられて、私の中に衝撃が走ったかと思うと……お前に抱かれたくて、壊れてしまいそうなんだ………！この思いが、強すぎるんだ………お、お前には、申し訳ないと思つている………だが、だが………！」



——俺としては、このまま気絶させて去っても良い。

だが、気絶して直る物でもないと、頭の片隅で考える。

それに龍の発情期を抑える薬など聞いた事がない。

作れるとしたら恐らく秘境に住む、世俗から離れた者——つまり、あの墮天使には作れないだろう。

このまま放つても、往来の真ん中で発情されるなら——そう考えが至ると、俺はティアマットを逆に押し倒した。

「い、イツセー……………？」

「……………言っておくが、」

優しい物は、期待するなよ——そう吐き捨てて、俺はティアマットの口を塞いだ。

## 第二十八話 「修羅は過去を聞く」

「はい、そこでターン。……筋は良いと思っただけでしたが、中々お上手ですね」

ティアマツト——もとい、ティアと致す事を致した翌日。

俺は塔城が倒れた事を聞かされた。

まあ、ある程度予想はしていたが驚きはないが。

俺としては何故この年増……ヴェネラナ婦人と躍りに興じねばならんのか疑問に尽きんだ。

別に苦ではないから構わんがな。

——後、ティアの奴なんだが、あれから更にスキンシップしてくる様になった。

決して眼には見えんのだが、奴の眼にハートが浮かんでいる気さえする。

しかも……

『イツセー……私の、身も心もお前だけの物だ。私の中は……もうお前の形を覚えてしまったのだから……♪……それだけじゃない。あんなに私の中に熱を注いで……もう、お前からは離れられない、お前無しでは生きていけない……イツセー、いや——ご主人様♡』

こんな事をほざく有り様だ。

少しばかり羽目を外しすぎたかもしれんな。

「——では、休憩に致しましょう」

そんな事を思っていると、何時のまにやら休憩時間に。

俺は座り込んで、スポーツ飲料を煽る。

「……………小猫さんの事は、聞かないのですね」

……聞く、か。

「それはアイツが妖怪の血を引く事と関係があるのか？」

「っ！………まさか、気付いてらして？」

「当然だ」

気付かない方が稀有だと思ふのだが。

「…彼女は今、懸命に自分の存在と力に向き合っているのでしょう。難しい問題です。けれど、自分で答えを出さねば先には進めません」  
「だろうな。でなければアイツは一生そのままだ」

「………リアスの言うとおり、貴方は何でもお見通しなのですな」  
アイツは普段俺の事をどういった目で見ているのか分かった。  
今度、多重木遁分身からの全員覇龍で追いかけて回そう。

「………何でも見えている訳ではない。ただ、知っている事は見えているだけだ」

「………知っている”事”を、ですか」

「………どうせ話す心積もりだったのだろうか？———塔城の過去を」

さつさと話せ———俺が目で促すと、ヴェネラナ婦人は瞑目しながらも言の葉を紡いだ。

—————

「———入るぞ」

一応ノックをした後、扉を開く。

正面にはベッドが置いてあり、その上にはやはりと言うか、塔城がいた。

そして隣には姫島。

塔城の頭には猫の耳が生えており、臀部からは尻尾がこれまた生えていた。

「イツセー君。これは………」

「事情は一応知っている。心配は無用だ」

姫島を遮ると、俺は塔城の近くに座る。

「……何をしに来たんですか」

棘が満載だな。

「心配だから来た——或いは、高みの見物に来た。どちらを言えば、お前は満足する？」

態と嫌みたらしく言えば、奴は露骨に顔を反らす。

正直者だな、相も変わらず。

「……おい、何とか言え」

「——よく……強く、なりたい……」

塔城は泣きながら俺に心の内をさらけ出した。

「……そうか。なら、一生泣いておけ」

俺はバツサリと切り捨てて、部屋を後にしようとする。

……と、これだと俺が鬼畜になってしまう。

寸前で立ち止まり、俺は奴に向けて口を開いた。

「——お前だけが特別ではない。力に悩む事、それは一向に構わない。だが、お前の場合は使えない前提で話を自己完結している。結局自分は姉の様に……そんな考えに囚われている奴が、己の弱さを乗り越えられると思うな。そんな様では力を使いこなす所か、お前は姉以上に暴走し、やがては己の手で主を……仲間を傷付ける事になる」

「……っ！」

傷付ける、その一言で、塔城は小さく震える。

「……お前は体ではない、心を先ず鍛えろ。仙術は、心だけでも、力だけでも、技だけでもない。心・技・体——これら三つの基礎を忘れぬ者だけが使える。今のお前では、世界に流れる悪意に飲まれるのが関の山だ」

扉を開くと、俺は今度こそ出ようと足を踏み出す。

「……………掴めないのなら、飲み込んでしまえば良いのだろうか」

そう、二人に告げて。

## 第二十九話 「修羅はペット? を手に入れる」

さて、特訓も終えてリアス達がパーティーなる物へと参加するため、現在はグレモリー家には俺一人だけ。

各個人、各々微々たる物だが成長していた。

うかうかしていると、俺も先を越されそうだな。

『相棒を越せる奴はもう世界を取ったも同然だと思いが……』

失礼な奴だな。

俺としては若い奴等が強くなっていくのを見るのは嫌いではない。どうせなら世界を変革できる程度には強くなってもらいたい物だ。でなければ見ていて面白くないからな。

——しかし、

「退屈だな」

こんなにも退屈な物なのか……後数分もすれば勉強会ではあるが。

一層の事……いや、まだ昼間だ。

自重せねば。

「イツセー、呼んだか?!」

……だが、運命と言うのはこうも残酷なものだと認識させられた。

俺の目の前に現れたのは、中華服を抜群に着こなしたティア。

「……何だその服は」

「ん? イツセーが私を呼んだ気がしてな。急いで着替えてきたのだ。

姫島朱乃の自室から借りたのだ」

アイツの部屋には普段どんな服があるんだ。

そしてその服の使用用途は何なんだ、一体。

……一層の事、煩惱を捨てるために山籠りと言うのも悪くないかも

な。

「どうする——」ご主人様？」

「……………影分身の術」

俺は分身を生み出すと、分身をその場に残して——

「後は頼むぞ」

「了解」

パーティー会場へと向かった。

「……………何だ？シないのか？」

「……………今から勉強会だ」

————

物の数分で会場に着いた訳だが……………何処もかしこも悪魔だらけだな。

『どうするのだ相棒。この中だと流石にお前は目立つぞ』

……………なら、目立たなければ良いだけだ。

俺は気配を絶つと周りを見るために飛び出した。

——周りからは、気付かれてない。

まあ当然だな。

気配は愚か、チャクラや気すら今は無の状態にしてある。

柱間クラスでなければ感知は不可能だ。

『……………ん？』

あの白髪……………塔城か。

何やら追いかけている様だが……………黒猫？

そしてその背後から走ってきているのは、リアス。

『何か有るようだな』

少しばかり……様子を見るか。

「……久し振りね。白音」

そう塔城に語り掛けるのは……着物を着崩した猫女。

気が塔城と似通っているのを考えると————奴が塔城の姉か。

憂いを帯びている表情からは、俺が話に聞いた————力に溺れた仙術使いとは、全くかけ離れていた。

「……姉様」

「————おいおい。この嬢ちゃん、グレモリー眷属だろ？あの噂の」

ん？誰だ、あの猿は。

「美猴、何しに来たの？」

「何しに来たはちよいヒデエだろ？お前が悪魔の領内に行くなんて危険を侵すから来たつてのに…………おい、隠れんぼは終わりにしようぜい？俺っち達仙術使いからすれば、直ぐにバレてんだからよう」

————リアスか。

まあ、アイツは気配を隠すのが下手だからな。

この辺りは要修行だ。

「黒歌。小猫に何の用なのかしら？」

「あら失礼な。可愛い妹の元気な姿を見たいって思うのはダメなの？」

「……貴女が小猫にした事を棚に上げて？」

それすらも何だかきな臭いのだが。



そう思つて眺めていると、周囲に結界が張られた。

「——ただでは返してくれないって訳ね」

「そりやそうにやん。私は、あんた達悪魔を信じられないから。——

——白音を渡しなさい」

「——この子は、私の眷属よ」

まさに一触即発か。

すると、地響きが轟いた。

「リアス嬢。大事は無いか？」

「——タンニーン！」

……ここで登場とは、主人公の様な演出だな。

『いや、主人公はお前だろう』

俺にはそんなもの似合わん。

さて——退屈も飽きてきたし、出張るか。

「随分と楽しそうだな」

「——!?!」

俺は気などを普段通りに戻し、ゆっくり歩むと、全員怪奇現象を目撃したかの様な表情となった。

「イツセー、何時の間に?!」

「……久し振りね、白音」辺りからいたが？」

「最初からじゃない！」

すると俺を見てか、猿顔は驚いた表情を見せた。

「おいおい！まさかコイツって、あのヴァーリをコテンパンにのしちまった赤龍帝じゃねえのかい?!」

「そのヴァーリが誰だか知らんが、銀髪の餓鬼と遊んだのは俺だ」

「その餓鬼がヴァーリだよ!!」

「どうでもいい」

「んな!?!」

取り敢えず、言うことは一つだ。

「消えろ。お前に用はない」

「……そうは問屋が下ろさなかつねい！」

猿は何処からか棍を取り出すと、俺に向けて棍を伸ばした。

棍は勢いよく伸び、無防備な俺に激突——

「へっへへい……?!」

すと思うか？

遅すぎて欠伸が出た。

これなら木場の方がまだ速いぞ。

「ぐううう……放しやがれっ!!」

猿は跳び跳ねて何とか俺から逃れようともがくが、一切動かず。

俺はそのまま力を加えて——棍を砕いた。

「……嘘、だろ？俺っちの如意棒が!!」

「……ほう、今のが如意棒か。ただの爪楊枝かと思つたぞ」

「爪、楊枝……?!」

俺は驚く猿を無視して、瞬時に懐に入り込む。

身構える暇すら与えず、

「俺は、二度同じことと言わん」

「——ッ!?!」

掌底を打って猿を吹き飛ばした。

……一応加減はしてやったのだが。

「美猴!!……っ！」

さて、邪魔者は消えた。

「お前に一つ聞く」

「……」

「何故、嘘をつく？」

「!」

その一言に、奴は肩を強張らせた。

「……何の事？」

「惚けるな。——妹を強引に連れていくのなら、もつと手際よく出来た筈だ。俺の目から見ても、お前はそこそこの使い手だからな」

「……………そこそこ、ね。これでも一応空間術とか極めたつもりなんだけど」

「井の中の蛙、なんとやらだ。お前より優れた奴は世界には大勢いる。……………そんな事はどうでも良い。俺の質問に答えろ」

だが奴は黙秘を貫く。

……………仕方がない。

「無理矢理にでも話してもらおうか」

「っ……………」

俺は奴に幻術を掛け、奴の意識を支配する。

「俺の質問に答えてもらおう。……………何故、主を殺した？」

「……………奴は、まだ幼い、白音にまで……………力を、求めたの……………!」

それを聞いてか、驚いた表情を見せる塔城とリアス。

まあ当然か。

「……………そしてお前は、塔城を守る為に敢えて仙術の特性……………世界の悪意を吸収し、主を殺した」

そうだな?と聞くと、奴は頷いた。

「全ては妹を守る為、そして……………お前はサーゼクスに奴を託した。違うか?」

「……………どういう事、ですか?……………姉様!!」

塔城の叫びに、猫女は後退りする。

ここまで吐かせれば、幻術は必要ないな。

俺は幻術を解き、その場に座る。

「……………!?!……………アンタっ」

「……………お膳立てはしてやった。後は、お前次第だ」

俺は顎で促すと、奴は震えながら、言葉を紡いだ。

「……………あの時の私じゃ、アンタを守りきれなかった。だからっ、私だけに、罪を被せる様に……………魔王に直訴して、アンタを守ってくれる様……………頼んだの……………!」

「……………!」

「でも……………この選択が、結果的に、アンタをもっと辛い目に合わせ……………私じゃ、アンタを守る資格なんて、ないって……………っ!」

「ねえ、さま……………」

塔城は、涙を流しながら奴の言葉を噛み締める様に聞いていた。

「アンタが、グレモリーの眷属になったって聞いて……………不安で、仕方なかった！私の罪を、償わされてるんじゃないかって……………!!  
……………ゴメンね、ゴメンねえ……………白音!!」

「……………謝らないで下さいっ！私は、何も知らず、姉様に守られて……………私は、姉様の苦しみを何一つ、知らないで……………ご免なさい、ご免なさい……………!!」

姉妹は、涙を流しながら抱擁を交わす。

リアスも涙を流しつつ、俺の隣に腰掛ける。

「……………お前が聞いた全てが真実とは限らんと言うことだ」

「ええ……………でも、まさかお兄様は」

「恐らく、塔城の抹殺を捲し立てたのは保守派の奴等だろう。サーゼクスは、塔城を保守派から守る為に、お前に塔城を託したのだろう。そして——奴に感情を取り戻させる為に。……………姉の為に、だろう」

「イツセー……………」

「俺がアイツの立場なら、同じ事をしただろうからな」

たった一人の肉親だ——その存在は、他の何よりも代え難い存在だからな。

—————

「でも黒歌。貴女は冥界では……………」

確か、聞いた話ではお尋ね者だったな。

「……………」

「姉様……………」

恐らくは、自首する腹つもりだな。

だが、それをすればこの女は死ぬより辛い目に合うだろう。  
ならば――

「黒歌」

「……何？」

「俺のものになれ」

『……………ええええええええええええええええ!!?』

五月蠅いぞ、リアス、塔城。

俺は二人を無視して、黒歌の腕を掴む。

「え、え、え?!」

「飛雷神の術」

慌てふためく黒歌と共に、俺はサーゼクスの元へと飛んだ。

そして何やかんやで、黒歌は俺と共にいることを条件に、冥界に来る許可が下りた。

まあ……その他諸々の行動に、俺の監視が付く事になったが。

悪魔側も、今回の件は自分達にも非があると思っただらしい。

悪魔とは契約を守るのが本懐、つまり、契約を破ったのは黒歌の元主。

契約を破る事は悪魔の世界では重罪らしい。

その他の事もあり、情状酌量が認められた結果だ。

兎に角、またこうして姉妹が仲睦まじく暮らせるのだ。

――それだけでも、充分だろう

### 第三十話 「修羅は黒猫と語らう」

「……………」  
「……………」

現在、俺と黒歌は二人でレーティングゲームのVIPの観戦席にいた。

理由は、ここでリアスとソーナ・シトリーの試合があるのだ。

何でもこの間、色々な事があって試合をする事になったらしい。

俺はその場にはいなかったが、その次の日に聞かされた。

「……………ねえ」  
「……………む？」

どの様な成長を見せてくれるのか、僅かに期待を膨らませていると、隣にいる黒歌が話し掛けてきた。

「……………どうして、私が嘘を付いてるって、分かったの？」  
「……………」

——何だ、そんな事か。

「……………俺にもお前同様、妹がいる」  
「！」

「もし仮に俺がお前と同じ立場なら、恐らく…いや、必ず同じ事をした。…でなければ、好き好んで妹を傷付ける姉や兄がいる筈もない。そうだろうか？」

いるのなら、そいつは……………もはや心が怪物の人間と呼ぶに、相応しいだろうな。

「……………不思議ね。私より年下の筈なのに、何だか年上を相手にしてる気分じゃ」

「…そうか」  
「……………ね、この試合——」

「心配なら無用だろう」

「え？」

俺は黒歌の瞳を覗きながら、

「奴はもう、過去を乗り越えた。——それだけでもう、充分な要因だ。それに……」

お前の妹なんだからな。

そう呟くと、黒歌は何処か振り切れた様に笑った。

「……そうね。あの子はもう、私に守られてるだけの弱かった白音じゃないもんね」

「そう言うことだ」

「にやふふ！ありがとねっ、ご主人様♪」

……………お前もか。

—————

さて、試合が始まった。

今現在、塔城が向こうの兵士を戦闘不能にし、残った匙は、ミナトが相手をしている。

『ミナト君……例えば、後輩が相手でも、負けるつもりはねえ!!』

と、大見得を切るのは別に構わんのだが……………今のアイツではミ

ナトに勝つことは無理だろう。

と言うか、奴等はもう新人の悪魔にしては実力が大きく変わりすぎている。

対抗できるのは………恐らくあのサイラオーグ・バルか。

リアスの従兄弟で、バルの滅びの魔力を持たない男。

だが、奴はそんなものがなくとも充分と言わんばかりの闘気を滲ませていた。

パーティー会場でチラリと見ただけだが……奴なら俺を楽しませてくれそうだ。

『飛雷神・二ノ段』

『えっ——があっ?!』

匙が上に弾いたクナイのマーキング目掛けて転移し、そのままから空きの背に螺旋丸を叩き込む。

だが——匙は立ち上がった。

『まだ……まだだっ………!』

『……これで終わらせませす』

そう呟くと——奴の身体が真紅に輝いた。

『——九喇嘛モード!』

そう、前世にて発動した奴等親子の尾獣形態。

とは言え、奴の肉体に九尾は宿っていない。

だが奴は自分の魔力とチャクラ、そして己の才でそれを見事に再現して見せた。

俺の須佐能乎と同じ要領と言うわけだ。

まあ本人の魔力量は普通だから、持続時間は短いが。

『——ッ!!』



と、解説している間に、奴の体に施されたマーキング目掛けて転移したミナトが、無数に攻撃を仕掛けた。そして匙は、脱落した。

まあ、ミナト相手に良く持った方だな。

「でも、よくリアスちゃんはその子を眷属に出来たわね」

「それは俺の拷問のお陰だろう」

でなければミナトは今頃人間のままだ。

そして木場、ゼノヴィアの騎士コンビが向こうの女王と騎士を打ち倒した。

間髪入れずに、無数の蝙蝠に変化したギヤスパーが、逐一敵の居場所を味方に伝える。

例え幻術だとしても、それは塔城の仙術で看破され、ギヤスパーの魔術で無効にされる。

……フン、少しはやるようになったな。

「ひゅー、怖いにゃん」

あれぐらい強くなって貰わねば困るさ。  
でないと楽しみがない。

「——ほお、人間の小僧がこんな所にいようとはのお」

「……………何の様だ。ジジイ」

黒歌が慌てて背後を振り向けば、そこには小柄な老人がいた。  
隣にはスーツ姿の銀髪女。

「……………って、イツセー!!このお爺ちゃんっ」

「分かっている。態々こんな人間の所に来ようとは、随分暇な神なのだな」

「ほっほっほ。気付いておったか」

当たり前だ。

態とらしく力を垂れ流しておいてよく言う。

「ワシの名はオーデイン。北欧の神じゃよ——神クラスに近い力を持つお前さんの顔を見たくてのお」

「……」

「……ふむ。己の力に驕らん、良い瞳をしとる。だが、何処か飢えておる様じゃのお」

………伊達に年は食っていない様だな。

「まあ良い。それと………こんなところでやるより、もうちつとマシな場所でやった方が良いぞよ?」

そう目の前のジジイが笑うと、黒歌は顔を真っ赤にする。

……何を想像したのかは、大体見当がつく。

「お、オーデイン様! 神なのですから、もう少し慎みを持ってください!」

まるでボケ老人の介護だな。

「アンタ、あまり運が良い方ではないな」

「……放っておいて下さい!!!」

そう言うと、ジジイとヘルパーは出ていった。

「……ね、ご主人様」

「……何だ」

「………私は、ご主人様のモノだから、どんなプレイだって喜んで受けるにゃん♪何ならここで——」

黒歌は着物の帯を緩めると、此方に抱きついてきた。

「………私を騷て?」

.....

「……少しは慎みを持って」

「にゃん!？」

俺はチョップを浴びせて奴を引き剥がす。

気づけば、リアス達の勝ちだった。

### 第三十一話 「帰宅する修羅」

冥界で過ごし、早数日、俺達は人間界に帰る時がやって来た。

「リアス、次期当主として恥じぬ生き方をするのですよ」

「たまには手紙も出さないね」

「はい。お父様、お母様」

俺はそれを遠巻きから眺めていた。

「にゃふふく♪」

……………熱い。

「…黒歌。離れろ」

「えく？だつて私はご主人様の元にはいないといけないし」

「誰が四六時中くっつけといた」

「…だつて、ご主人様が「俺のものになれ」って……………だからこうしてくっつくのは当然にゃん！」

「…ハア」

あんな事を言ったのは失敗だったか。

それを見たリアス達が騒ぎ出すという騒ぎがあつたが、数分後には電車は動いていた。

電車に乗って数分後、塔城が何故か俺の膝の上に乗ってきた。

何だと思ひ塔城を見ると、奴は笑顔で——

「先輩……………にゃん♪」

……………すり寄ってくる猫が一人増えた、か。

どうやら俺はこの世界で女関連のトラブルが尽きないらしいな。

そう嘆く俺の側では、猫姉妹が楽しそうに笑い合っていた。

……………まあ、良いか。

――

数時間後、俺達は家へと帰宅した。  
帰宅後は全員思い思いに過ごしている。

俺はと言うと――

「ここはこの公式だな」

「えつと……………こう?」

「ああ、正解だ」

イズナに夏休みの宿題を教えていた。  
俺はとうの昔に終わらせた為、今こうしてイズナの面倒を見ている。

鍛錬ばかりでは気を張り詰めすぎるからな。

……………序でに言えば、黒歌がないのは、塔城と共に日用品の買い物に繰り出しているからだ。

察しのいい読者共なら分かるだろうが、奴もこの家に住む事になった。

母さんは全く否定する事無く快諾した。

少しは否定しても良いんじゃないのか、そう言ったら額に凸ピンを食らった。

「……………お兄ちゃん」

「ん?」

イズナは俺に何かを訊ねたそうにしていた。  
が、首を小さく振ると、

「……………ううん、何でもない。お茶、入れてくるね」

「あ、ああ」

そう言うと、俺に質問をさせないように、そそくさとイズナはリビングへと向かっていた。

俺はと言うと、普段は天真爛漫で元気一杯のイズナが初めて見せた——  
——愁いを帯びた表情を垣間見て、茫然としていた。

その瞳に隠された真実、俺はそれが分からず、一人考えに耽っていた。

『相棒、お前にも欠点はあったんだな』  
『どういう意味だ。』

『なあに。これはお前自身で気付くべきだ。俺が言うべき事ではない』

「……………そうか。」

ドライグの言葉通り、俺はイズナの憂いの正体が何なのかを考えていた。

……………そのせいか今日アジアに求婚した一人の悪魔の事など、俺の頭からはすっかり消え去っていた。

「お待たせ、お兄ちゃんー！」

「……………ん、ああ」

だが俺は、この時知らなかった。

肉親であるイズナと、あんな関係になってしまう等と——

それは恐らく、誰にも予測は出来なかった。

『……………お兄ちゃん、私は』

## 番外幕 「兄の思い、妹の想い」

夏休みも佳境を迎えつつある夏の昼下がりに。

「ねえ、お兄ちゃん」

俺の部屋には妹のイズナが訪れてきた。

「どうした、イズナ？」

「えつとね、その……………」

俺が用件を聞くと、イズナは顔を赤らめて恥ずかしそうに身をくねらせていた。

……………くつ、今手元に一眼レフカメラ（イズナ撮影用）があれば、余裕で三十枚は写真を撮っていたことだろうに……………！

俺が内心膝を叩いている事など露知らず、イズナは決心したかのように口を開いた。

「わ、私とお出かけしよー！」

—————

「お兄ちゃんとお出かけなんて、久しぶりだね！」

「そう言えばそうだったな」

イズナの可愛いお願いなど断る筈もなく、俺はイズナと共に近所の大型店舗にやって来ていた。

「リアスさん達に構うのも良いけど……………私の事、忘れないでよっ！」

そう頬を膨らませて愚痴るイズナの姿に、こちらの頬は緩みっぱなしだ。

「ああ、気を付けよう」

「えへへ」

俺は申し訳なく思い、イズナの頭を撫でる。

イズナはされるがまま、俺に頭を撫でられている。

「…じゃあ、今日はイズナに構ってやれなかったお詫びだ。何でもお兄ちゃんが奢ってやるぞ」

「ホントに!? やったー!」

イズナは大きく飛び跳ねて喜びを表現した………因みにスカートの中身は覗いていない。

リアス達と同じような、艶やかなタイプの下着なんて、見ていない。

イズナよ、あまり無理な背伸びはするなよ。

お兄ちゃんはそれを何処の野郎に見せるため、等と言われたら泣く自信があるからな。

……兎にも角にも、可愛らしく駆け回るイズナの姿は、他の何にも代えがたいほど素晴らしかった。

「あんむ……美味し〜♪」

小休止ということで、俺達は近くのカフェに来ていた。

俺は珈琲、イズナは名物のパフェ?なる物を食べていた。

イズナは小動物の様に備え付けの果物を頬張る………うむ、やはりイズナを於いてこの世に可愛い物など存在せんな。

「お兄ちゃん、今日はありがとう」  
「む?」

俺が癒されている中、イズナは唐突に俺に礼を言ってきた。

「イズナの我儘に付き合ってくれた事だよ」

「何だ、そんな事か」

俺はカップを置いて、イズナと改めて向き合う。

「お前は俺にとって掛け替えのない存在だ。例えばどんな迷惑でも、我儘でも、俺はそれを受け入れる。妹を笑顔にするのは、兄の役目だからな。だからイズナ、お前が気負う必要なんてないんだ。お前が真に大切にしたい者が現れるまで、お兄ちゃんがお前の力になってやる」  
「……やっぱり、お兄ちゃんは優しいね」

イズナは目尻を光らせてそう言ってきた。



「——ありがとつ、お兄ちゃん!!」

——

買い物から帰宅して数時間が経過して、辺りはもう闇に包まれていた。

『相棒。答えは分かったのか?』

……全く見えん。

だが今日一日は、イズナに変な様子は見られなかった。

『……そうか』

お前には分かると言うのか?

『こう言うのは第三者の方が気づきやすい物だ……つと、相棒、お客さんだ』

「……イズナか?」

扉越しに感じた気配はよく知った物なので、俺は扉が叩かれる前に声を掛けた。

そして扉が開かれ、そこにいたのはイズナだった。

「……凄いね、お兄ちゃん」

「……まあな」

手で招くと、イズナは静かに入ってきた。

そして俺のベッドに腰を下ろした………妙に距離が近い気がする。

「……お兄ちゃん」

「ん?」

俺がイズナの言葉を待っているが、中々イズナは口を開こうとしない。

どうしたのかと思っていると、イズナは漸く口を開いた。

「………私、お兄ちゃんの事が——好き」

その一言は静かであったが、静寂が広がるこの部屋には、とても強

く響いた。

「……お兄ちゃんも、好きだぞ」

俺はそう一言返す——が、イズナが望む答えではなかったらしい。

何故なら……イズナは此方をじっと見つめるだけだからだ。

この時のイズナは——怒っている。

「うん、知ってた。お兄ちゃんの好きは……likeの方だって。でもね……」

——私は、ずっとloveの方だよ？

「……………」

先ず、耳を疑った。

次いで、本能が意味を理解し、漸く体ごとイズナの方へ向け——  
—そして、口を塞がれた。

イズナの、口で。

「……………!?!」

「……ふ、あっ」

時間にしては一分程度だろうか、それぐらい短い時間であったが、イズナは静かに離れた。

イズナは艶めかしい息を吐くが、俺は未だに理解が追い付かず、その場に固まっていた。

「ふふっ、お兄ちゃんにファーストキス、上げちゃった」

「……イズナ」

嬉しそうに微笑むイズナに対し、俺の心中は大いに荒れていた。  
何故イズナはこんな真似を？

実の兄に対して及ぶスキンシップの度を越えている行為を、何故こんな躊躇いもなく行っただ？

やはり心が理解できない——いや、理解したくないのか、俺は暫くしてから口を開いた。

「…イズナ、幾ら何でもこれはやってはいけない事だ」

「……何で？」

俺がイズナを諭そうとする中、イズナは唐突にこう返してきた。

改めてイズナの顔を見ると、そこには苦悩が滲み出た表情のイズナがいた。

「……何で、とは」

「分かんないよっ！……確かにお兄ちゃんは、私の家族。でも……私は、お兄ちゃんが好き!!それは……兄妹だからって否定されなきゃいけないの!?!」

激昂したイズナに押され、俺はベッドに寝そべてしまった。

起き上がろうとしたが、それよりも早く、イズナが俺に乗りかかってきた。

「っ、イズナー！」

俺は初めてイズナに向けて怒鳴るが、イズナは聞く耳を持たない。

「…お兄ちゃんは、嫌い？私の事」

「……」

そんな事はない。

俺が先ほど言った言葉に嘘偽りはない——だがそれは、あくまで家族としてだ。

だがイズナは……肉親以上の感情を、俺に抱いてしまった。

俺は論理云々を並べてイズナを何とか鎮めようと試みる。

「…イズナ、落ち着け。お前が抱いてる感情は、いけないものだ」

「何で？何でなの？」

「……俺は、あくまでお前の兄だ。お前が望むその答えは決して肉親に向けるものではないんだ。血を分けた者同士は、決して結ばれはしないんだ」

「……分かってるよ、ホントは」

「…イズナ」

「でも……」

イズナは何か切れたかのように、俺に自身が抱いていたであろう想いの丈を吐き出した。

「それでも、愛しちやっただよ!!お兄ちゃんの事を!!いけない事だっと思ってたけど……でも、抑えられないの!!……あの時から私は、お兄ちゃんが好き!愛してるの!!」

あの時……?

「覚えてない?お兄ちゃん、車に轢かれそうな私を、助けてくれたよね?」

——思い出した。

イズナがまだ小さかった頃、信号無視のトラックに轢かれそうになったイズナを、間一髪で助けたとき、か。

「……あの時、お兄ちゃん、私にこう言っただよ?」

『泣くなイズナ。何があっても、どんな理不尽なことが起きても……お兄ちゃんが、お前を守ってやる』

…確かに、泣きわめくイズナに向けて、宥める意味で言った。

だがまさか、覚えていようとは……いや、あの時の俺の軽率な発言で、こんな事に。

「あの時の約束、お兄ちゃんはずっと守ってくれた……そんなお兄ちゃんだから、好きになったの。お兄ちゃんとしても……一人の男の人としても」

「イズ、ナ……」

この場の空気に飲まれたのか、俺にも余裕が無くなっていく。

——いや、それだけはダメだ。

俺は、イズナの兄なのだから。

実の妹を、異性として意識するなど………！

「イズッ——！」

それ以上は聞きたくないのか、俺が口を開くより早く、イズナは俺の口を塞いだ。

先ほどの触れるだけのものではなく、今度は舌まで入ってくる……

！

俺は必死に追い出そうとするが、イズナは巧みに俺の舌に上手く絡め、俺の抵抗力を削ぎ落としていく。

そして漸く解放される———と思っていた俺の目の前で、イズナは服に手をかけ始めた！

「お兄ちゃん……イズナの全部、見て、ちゃんと味わって？」

そう妖しく微笑むイズナの笑顔に———俺は不覚にも、女を見てしまった。

## 第六章：体育館裏の堀さん

### 第三十二話「兄として……男として」

「……………ん」

朝日がカーテンの張られた窓から指す、晴れやかな朝。

俺は微睡から目を覚ますと、腕の中に温もりを感じた。

「……………んう、お兄ちゃん」

……………やはり、夢などという都合の良い事にはならんか。

「俺は……………」

俺は——最低だ。

守るべき、家族として愛すべきイズナを……………穢してしまった。

誘惑されたから、等と言いつきは言えない。

何故なら俺自身、初めて見せたであろうイズナの“女”としての顔

……………それに魅せられてしまったのだから、な。

今、そのイズナは気持ちよさそうに眠っていた。

「イズナ……………」

俺は、俺はどう接していけばいい？

これからの、イズナと……………

「ん……………おはよう、お兄ちゃん」

俺が自問自答を繰り返していると、イズナが目を擦りながら目を覚ました。

「あ、ああ。おはよう」

俺もそう返すと、イズナはピッタリとくっついて来た。

「……………えへへ。お兄ちゃん、温かいね」

「……………イズナ、俺はっ」

「良いよ。何も、言わなくて」

「！」

イズナは顔を上げると、にこやかな微笑みを向けてきた。

そこには後悔や後ろめたさといった思いは、全く見受けられない。「私達は、本当の兄妹だから結婚は出来ないけど……こうして、ずっと傍にいられるだけでも、私は幸せだから」

「イズナ……」

「…それに、謝るのなら、私の方だよ。私の我儘で、お兄ちゃんが、辛い思いをして……」

「っ、違うー！お前は……お前は何も悪くない！」

「そうだ、あの時だって——俺は振り解こうと思えば振り解けた。」

だが、出来なかった……いや、あの時の俺にも、少なからずあったのだと、今になっては思う。

イズナを——離したくないと。

それは兄としても、恐らく……一人の男としても、なのだと思う。

——悩む必要など、なかったわけだ。

答えは、もう既に出ていたのだから。

「……イズナ」

「?どうしたの、お兄ちゃ——」

そう思い至った瞬間、俺は初めて、イズナに口付けた。

離さないように、確りと抱きしめて。

「……イズナ。俺はお前を、愛していたんだ」

「！」

「迷惑を沢山掛けるだろう……お前に不快な思いをさせてしまうだろう……だが、だが、それでも」

ずっと、俺の傍で笑っていてくれ——

これは言うなれば……俺なりのけじめだ。

イズナが俺を愛してしまったのなら、俺も、イズナを愛そう。

これからも、この命がある限り——ずっと。

何も言葉を発さないイズナに不安を覚えた俺は、イズナの顔を覗き込む。

イズナは——泣いていた。

「お兄ちゃん……私っ、嬉しい……嫌われるんじゃないかって、ずっと、怖かったっ。もう、昨日みたいな関係に戻ることで、出れないんじゃないかって……！」

そう思いの丈を吐き出すイズナを、俺は再び抱きしめる。

「…何を言っている。お兄ちゃんは絶対に、お前を嫌ったりなどはない」

「うんっ、うん……！」

「例え周りに何を言われようとも、生きていこう……これからも、ずっと」

「うん……うん……！」

俺はイズナの涙を拭いた。

俺はこれまでも、これからも——イズナを愛し続ける。



何があっても。

### 第三十三話 「弱い犬ほどよく吠える」

俺が実妹のイズナと結ばれてから数日が経過した頃………とは言っても俺の周りを取り巻く環境は何も変わってはいなかった。

だが両親には速攻でバレた。

その事で先日俺達兄妹は呼び出されてしまった。

「……多くは言わないわ。イズナがアンタの事を好きだったのは明白だったし」

「………母さん。イズナを責めないでやってくれ」

「別に怒ってる訳じゃないわ………ねえイズナ」

「？」

母さんは一息つくつと――

「こんなダメダメな息子だけど、未永く宜しくね」

「……うん！」

思わず床に頭を打ち付けた俺は悪くない筈だ。

「は、反対しないのか……？」

啞然としながら俺は聞くと、母さんは事もなげに言い放った。

「あら、じゃあアンタのイズナへの気持ちは偽物だっていうの？」

「そんな事はない！俺はイズナを愛している!!」

「お兄ちゃん……」

「だったらそんな二人の仲を引き裂いたりなんて出来ないわ。………だけ」

――学生の内はちゃんと避妊すること！

………母さん、今でも思うよ。

それは違うだろう、と。

「……」

「こんにちは、ディオドラ・アスタロトです。アーシアに会いに来ました」

「……誰だったか、この男は。」

「夏休みの時、アーシアさんに求婚してきたアスタロト家の当主ですよ」

「そうミナトが耳打ちしてくるが……正直イズナの件で頭が一杯だったから覚えていない。」

「リアスさん。単刀直入に言います。『僧侶』のトレードをお願いしたいのです」

「……イツセー先輩。ひよつとして僕でしょうか?！」

「万に一つもその可能性はないと断言できるな」

「それはそれで酷いですよお!」

「奴が求めているのはどうせ——」

「僕が望むのリアスさんの眷属は——『僧侶』アーシア・アルジェント」

やはりか。

「そう言つて胡散臭い笑顔をアーシアへと向ける。」

「アーシアは俺の手を握ってくる。」

「……まあ、こんな胡散臭い奴の求婚など、受け入れる訳がないか。」

「「こちらが用意するのは——」」

「自分の眷属が乗っているであろうカタログらしきものを出そうとした男にリアスは間髪入れずに言う。」

「だと思つたわ。けれど、ゴメンなさい。その下僕カタログみたいなものを見る前に言つておいた方がいいと思つたから先に言うわ。私

はトレードをする気はないの。それはあなたの『僧侶』と釣り合わないとかそういうことではなくて、単純にアーシアを手放したくないから。——私の大事な眷属悪魔だもの」

リアスはそう言い切った。

元々比べる気もトレードする気も無いのだろう。

下僕愛ここに極まる、だな。

だがこう言う馬鹿は嫌いではない。

「それは能力？それとも彼女自身が魅力だから？」

しつこい手合いだな。

まあこう言う馬鹿はしつこいのが世の常だからな。

「両方よ。私は、彼女を妹のように思っているわ」

「——部長さんっ！」

アーシアは手を口元にやり、瞳を潤ませていた。

普段の日常生活でも、アーシアはリアスを姉のように慕っているし、リアスもアーシアの事は妹のように可愛がっている。

……今思えば俺の部屋に勝手に入ってきたのもこの二人が最初だったからな。

「二緒に生活している仲だもの。情が深くなって、手放したくないって理由はダメなのかしら？私は十分だと思うのだけれど。それに求婚したい女性をトレードで手に入れようというのもどうなのかしらね。そういう風に私を介してアーシアを手に入れようとするのは解せないわ、ディオドラ。あなた、求婚の意味を理解しているのかしら？」

もうさっさと諦めてお帰り頂きたい。

だが奴は物怖じせずに微笑むだけ。

「——わかりました。今日はこれで帰ります。けれど、僕は諦めません」

ディオドラは立ち上がり当惑しているアーシアに近づく。

そして、アーシアの前へ立つと、その場で跪き、手を取ろうとした。「アーシア。僕はキミを愛しているよ。大丈夫、運命は僕たちを裏切らない。この世のすべてが僕たちの間を否定しても僕はそれを乗り越えてみせるよ」

そう言つて、アーシアの手の甲にキスをしようとする——その寸前で、俺はアスカロンの切っ先を奴の眼前に突き付けた。

「さっさと帰ったらどうだ？」

「……なんの真似かな？人間風情が」

「……ふん、やつと腸ほんしやうを見せたな」

薄ら笑いを浮かべる奴には基本ロクなのがない……これは生きていく上で重要な事だとは思うのだがな。

昨今の教育現場ではそれを教え広めていないのが嘆かわしい。

「先人の偉大な教えだが……手の込んだ料理ほど不味いものだ。どんなに真実を隠そうとしても、隠しきれるものではない。お前のその薄ら笑いと今の言動がその証だ。——哀れな求婚悪魔君？」

「……僕を馬鹿にしているのか？」

「ああ。下劣な本性を能面の顔で隠した気になっている、哀れで卑屈な上級悪魔君」

「っ！……ふん、君が何を言おうとも、僕は必ずアーシアを手に入れる」

奴のその言葉に対し、俺は——心の底から笑いが溢れてきた。

「……くっくっく」

「……何が可笑しい」

「……これが笑わずにいられるか？今の発言、お前はただアーシアを物のように見ているだけ。結局、齒が浮くような求婚をしようがお前の本性はただ玩具が欲しい子供の我儘——いや、人形が欲しいだけなのだろうか？違うか？」

「……っ!!」

それを聞いた虫けらは俺を睨み付ける。

……こんな程度か。

これならあの白い龍の宿主の……誰だったか？

まあ良い、あの男の方がまだマシだな。

「……僕はアーシアを必ず手に入れる。何があってもね」

そう言っつて、虫けらは帰って行った。

——弱い犬ほどよく吠えるとは、よく言った物だ。

いや、弱い蠅ほど煩い、か？

————

「何あのヘナチヨコ?!なんか無性にムカつくにや!!」

夜、風呂から上がり部屋に戻ると、何故だか俺のベッドの上で憤つてる黒歌。

「何をしている」

「ご主人様を待つてたにやん」

「……さつさと部屋に戻れ」

「そうはいかないにやん!今日はご主人様と……」

黒歌は少し間を空けながら、着物を大きく着崩して、俺へと絡みついてきた。

「エツチしにきたの♪」

「……前から馬鹿な奴だとは思ってはいたが、まさか本当に馬鹿だったとは」

最近の若者の貞操概念はどうなってるんだ。

俺が嘆いていると、黒歌は頬を膨らまして此方を睨んできた。

「私は本気にやん!何なら、今すぐご主人さまとの子供だって欲しいし……」

「その本気を向けるベクトルが間違っている気がするのだが」

「うー!じれったいにやん!だったら……こうにやん!」

黒歌は俺に突然飛びついてきた。

別に躲しても良かったのだが、そうすると話が余計に拗れそうだったので止めた。

俺を上から見下ろす黒歌。

何時も着ている浴衣は殆ど肌蹴っており、乳房が丸見えだった。

おまけに尻尾は左右に激しく揺れており、完全に臨戦態勢だった。

「ね、っ主人様あ……………シよ？」

尻を下げて、甘えた声で擦り寄る黒歌……………こうなったら、俺のやるべき事は一つ、だな。

何だかんだ言っても、女を抱けるのは損ではないからな。

### 第三十四話 「転校生は幼馴染」

「んにゃ、ご主人様あ……………」

朝、黒歌の寝言によつて目が覚めた。

見れば、黒歌も俺も一糸纏わぬ裸体だった。

……………そう言えば、黒歌を抱いたのだったな。

今日は学校だと言うのに、よくもこんな事を……………散らばった服や着物、多数の使用済みの避妊具を見て、思った以上に、年相応な性欲があるのだなと実感する。

「んう……………ご主人様、おはよ♪」

黒歌は目を覚ましていきなり、俺に頬擦りをしてくる。

「……………体は平気か」

「うん、大丈夫にゃん……………ご主人様の、凄く大きかったにゃん」

昨日の情事を思い浮かべてか、黒歌は顔を真っ赤にする。

俺としては早く学校に向かう準備をせねばならないので、黒歌を無視して下着を身につける。

「あの時のご主人様の言葉…………『一生俺から離れられない様にしてやる』って……………キヤー!!!」

……………朝から元気だな。

俺は布団で悶える黒歌を放置して居間へと向かう。

「飯が冷めるぞ」

そう言い残して。



――

二学期。

どうも最近の若者と言うのは、夏休みと言う大きな休みの間にあか抜ける者が多いらしい。

椅子に座りながら眺めていて、中々面白いのだ。

あか抜けた奴とそうでない奴の雰囲気は、見ても分かる程に違うのだから。

「おい！隣のクラスの吉田の奴……何と三年の御姉様相手に一発決めたらしいぞ！」

「何だとお!？」

今日も今日とて、変態コンビこと松田と元浜は平常運航らしい。それを変態女眼鏡こと桐生が弄るのが定番の光景だ。

こうしていると、平和と言うのは良いものだ実感する。

前世でこの年では乱戦真っ只中だったからな。

「よし、席につけー」

担任の号令で、全員が席に付く。

「えー、唐突だが今日は転校生を紹介するぞ。では入ってくれ」

ガラリ、と扉が開き、教室に女が二人入ってくる。

一人は黒歌、もう一人は――

「塔城黒歌です、宜しゅうおたの申します♪」

「紫藤イリナです！皆さん、宜しくお願いします！」

俺の（自称）幼馴染らしい、教会の女戦士だった。

「紫藤イリナさん、貴女の来校を歓迎するわ」

「はい！皆さん！初めまして――と言うより再びお会いした方の

方が多いですね。改めて……紫藤イリナです！教会、いえ、天使様の使者として駒王学園に馳せ参じました！」

オカルト研究部と紫藤のやり取りを傍らで眺める。

……だが、紫藤の気が以前のものと異なるのはどういう事だ？

「……先輩、姉様は変な事をしていませんでしたか？」

「……多分な」

まあ、あのヘンテコな挨拶のお陰か、本人はあつという間にクラスに馴染んでいたが。

それは兎も角、何故コイツは俺の膝に乗っているんだ。

「……嫌ですか？」

「……好きにしろ」

もう、突っ込むのも辟易する。

そして紫藤はミカエル様は偉大云々と言い始める。

相も変わらず信仰心の強い女だ。

そしてアーモンドチョコに神が死んだ事を聞かれ、膨大な涙を流していた。

俺は無神論者なのでどうでも良いのだが。

そして紫藤が祈りのポーズを取ると——背後から翼が生えた。

……天使？

アリのキリギリスが言うには、和平が成立したことで、悪魔が使っているあの駒の技術が天界にも伝わった事で、所謂転生天使が生まれ出せる様になった、とのことだ。

違いは天使の場合、トランプで転生するらしい。

将来は悪魔と天使でレーティングゲームの交流試合を行うのだとか。

まあ俺は参加できんから、どうでもいい。(最近周りとの実力差を嫌でも自覚し始めた)

と、何を思ったのか、紫藤が俺の目の前にやって来た。  
怪訝に思っていると、手を差し出された。

「……………」

「…………改めて初めまして、だね。私は紫藤イリナ。イツセー君が、小さかった頃の幼馴染だよ」

小さかった頃の、と言われても、俺には全く覚えがない。

頭を唸らせていると、自分の前世の記憶に埋もれていた、容姿の全く異なる少年と遊ぶ、栗色の毛の中性的な容姿の少女がいた。

——— ああ、そう言うことか。

「……………お前はどうかやら、本当に俺の幼馴染だったらしいな」

「……………」

呆気にとられる紫藤を、「だが」と抑える。

「俺はお前と別れて暫くして、事故に遭った」

「っ!？」

「そのせいで…………俺はお前と別れてからの記憶が殆ど無かった。だから覚えがなかったんだ」

そう言うとき、紫藤は何処か安堵した顔つきになる。

「…………まあ、そう言う事だから、改めて宜しく頼む」

「……………うんっ!」

### 第三十五話 「馬鹿は三日会わずとも括目しないらしい」

……………これは、一体。

僕達は今、ディオドラ・アスタロトとのレーティングゲームの舞台となる場所にいた。

だけど、ゲームは最悪の形で中止となった。

——禍の団の、襲来によって。

そしてもう一つ……………ディオドラは、禍の団と繋がっていたんだ。

奴はその混乱に乗じて、アーシアさんを連れ去り、僕たちは奴の言うゲームに参加させられる事になった。

ディオドラの眷属を蹴散らして進んでいた僕達。

……………まあ、向こうの女王と戦う際、部長と朱乃さんの一悶着もあったけど、僕達は誰一人欠ける事無く進んでいった。

そして進んだ先には——

「……………フリード?」

そう、あの外道神父——フリード・セルゼンが、物言わぬ骸となつて転がっていた。

だがその体は極めて気色の悪い怪物の物となっていた。

「……………外傷を見るに、一撃で葬られたと見て間違いないわね」

部長の言葉通り、フリードの体には、何かで斬つたような跡以外、目立った外傷はなかった。

だがその体からは夥しい数の血が噴き出ており、フリードの体を赤

く染め上げていた。

「……これをやったのが誰だか……まあ、ある程度は見当はついて  
いるけど。皆、急ぎましよう」

部長の言葉に、僕達は頷く。

そして、神殿の最奥部へと進んでいった。

そこで見た物は――

「がっ、ああ……………ツ!!?」

「……………どうした?もつと踊って見せろ、木偶」

全身を痛め受けられ血を吐くディオドラと……………そんなディオ  
ドラを冷たく見下ろす、イツセー君がいた。

……………やっぱり、イツセー君だったのか。

でも、どうやってここに?

「…漸く来たのか」

イツセー君は此方に気づくと、他人事のように声をかけてきた――  
「ディオドラを踏み付けながら。」

「ぎゃああ!!」

「…イツセー、どうやってここに」

「この木偶が転移するのに合わせて、俺も跳んだだけだ」

彼は無言で気を失っているアーシアさんを見やる。

つられて見ると、気を失っているらしいアーシアさんの手の甲に何  
やら紋様のようなものが浮かび上がっていた。

「……………そうか、飛雷神の術!」

ミナト君が、合点が行ったように口にした。

「もしもの事を考えて、一応マーケティングしていたが……………功を奏した  
らしい。まあ、このゲームが初めから無効になると言うのは、アザゼ

ルに吐かせたのだが」

……アザゼル先生。

「では、やはりフリードを倒したのも」

「……ああ、あの蛆の事か」

イツセー君はさして興味無さそうに呟く。

「ベラベラと煩かったから、閉じてやった。……まあ、おかげで此奴の良  
い趣味が聞けた」

「……良い趣味？」

「聞きたいか？」

それからイツセー君は話した。

ディオドラの——吐き気を催す下劣な趣味を。

「……こんな奴の為に、アーシアは!!他のシスター達は!!!」

激昂したゼノヴィアは、デュランダルを取り出す。

今にもディオドラに斬りかからんとしている。

「止めないでくれ、イツセー。此奴は……私が斬る」

「……好きにしろ。もう楽しむ価値もない」

そう語ったその瞬間——ミナト君から声が上がった!

「——皆さん!大変です!」

「どうしたの、ミナト!」

「アーシアさんの拘束具が、外れないんです!」

——何だって!?

それを聞いた僕達は慌ててアーシアさんの元へと向かい、手足の枷  
へと攻撃を加える!

だが——枷は全く外れる様子を見せない!

「そんなっ!?!」

「一体どうなって……!?!」

そんな中、イツセー君は冷静にディオドラの髪を掴むと、彼の眼を  
一瞥した。

「あの手足の枷は何だ。答えろ」

彼が命令すると、ディオドラは虚ろな目のまま口を開いた。

「……あの装置は機能上、一度しか使えない。が、逆に一度使わないと停止できないようになってる。——あれはアーシアの能力が発動しない限り停止しない。その装置は神器所有者が作り出した固有結界のひとつ。このフィールドを強固に包む結界もその者が作り出している。——『絶霧』結界系神器の最強。所有者を中心に無限に展開する霧。そのなかに入ったすべての物体を封じることが、異次元に送ることすらできる。それが禁手に至ったとき、所有者のすきな結界装置を霧から創りだせる能力に変化した。——『霧の中の理想郷』デイメンション・クリエイト、創りだした結界は一度正式に発動しないと止めることはできない」

「発動条件と、この結界の能力は」

「……発動の条件は僕か、他の関係者の起動合図、もしくは僕が倒されたら。結界の能力は——枷に繋いだ者、つまりはアーシアの神器能力を増幅させて反転させること」

「効果範囲は」

「……このフィールドと、観戦室にいる者たち」

回復の反転——と言う事は！

「アーシアの回復能力を考慮すると、全員お陀仏か。よく考えられている」

僕たちの驚愕を余所に、イツセー君は一人笑うと、アーシアさんを縛っている枷へと向かった。

「イツセー、何を……」

部長の疑問に答えず、イツセー君は右手で枷に触れながら、左手で印を結んでいく。

印を結び終えたイツセー君は、

「…解け」

そう低く呟いた。

すると——手足の枷は音も立てずに消滅した！

その場に倒れこんだアーシアさんを受け止めるイツセー君。

一体どうなって…？

「もしかして、幻術？」

「ああ。発動条件の任意の者にを、俺へと書き換えた。俺を発動者とする事で、この結界の処遇を決められるようにした。…後遺症はないだろう」

アーシアさんに向けて指を立てると、アーシアさんは目を覚ました。

「……イツセー、さん？」

「さあ、帰るぞ」

イツセー君がそう言うと、アーシアさんはイツセー君に抱き着いた。

「…私、信じていました！イツセーさん達が、助けに来てくれるって………！」

「……勘違いするな」

「へ？」

だけどイツセー君は彼女を引きはがすと、背を向けた。

「俺はお前を助けたつもりはない。ただそこに転がっている木偶が良い顔をするのが気に食わなかったから、ここへ来ただけだ。…俺がそう言っている以上、助けてくれた等と決め込むのは烏滸がましい事だ」

「で、ですが……！」

「奴を弄った過程で、偶然お前が助かった………それだけだ」

………流石にその照れ隠しはどうかと思うよ、イツセー君。  
見れば、アーシアさんも苦笑いだし。

——でも、彼女は嬉しそうに目尻を光らせていた。

「——アーシア」

「は、はい！」

イツセー君は背を向けたまま、アーシアさんに語り掛けた。

「ここにいたい——以前お前は、そう意思表示しただろう？なら



「……………確りこの場所にしがみ付いておけ」

「!——はいっ!」

そう嬉しそうに頷くアーシアさんは、その場で祈りのポーズを取っていた。

「何を祈ったんですか?」

「……………秘密です」

ミナト君の言葉に、恥ずかしそうに笑むアーシアさん。

帰ろうとしていた僕達だったが、イツセー君だけはその場から動こうとしなかった。

「……………アーシア」

「え……………きこや!?!」

イツセー君はアーシアさんに近づくと、彼女を抱き寄せた!

刹那——天井から降ってきた一筋の光と共に、二人の姿が消えた。

「神滅具で作った結界が人間ごときに壊されるとは……………霧使いめ、手を抜いたな。計画の再構築が必要だ」

聞き覚えのない声。

僕達の前に現れたのは数百を超える旧魔王派の悪魔。

ほとんどが上級悪魔と見られるが、中には最上級悪魔クラスの者も数人いた。

そして——中央にいる二人の男。

この二人のみ、明らかに他とは違うオーラを放っていた!

「……………誰?」

「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ。私は偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く、正当なる後継者、シャルバ・ベルゼブ

ブ」

「同じく、真の魔王アスモデウスの正当なる後継者、クルゼレイ・アスモデウス」

——旧魔王か!!

と、ディオドラ・アスタロトはシャルバ・ベルゼブブを見ると懇願しながら口を開いた。

「シ、シャルバ……助けておくれ……キミと一緒になら、こいつらを殺せる……旧魔王と現魔王が力を合わせれば——」

が、その言葉は続くことなく、シャルバの手から放射した一撃がディオドラの胸を容赦なく貫いた。

「愚か者め。あの娘の神器の力まで教えてやったのに、モノにできずじまい。オーフィスの『蛇』を使ったにもかかわらずあの無様な戦い方……たかが知れているというもの」

嘲笑い、吐き捨てるようにシャルバは言う。

ディオドラは床に突つ伏すことなく、チリと化して消えていった。

「さて、サーゼクスの妹君。突然で悪いが、貴公には死んでもらう。理由は言わずとも分かるであろう?」

「サーゼクス様の妹、だから?」

シャルバが冷淡な声でそう語る。

シャルバは目を細めながら口を開いた。

「その通りだ。不愉快極まりないのだよ。我ら真の血統が、貴公ら現魔王の血族に『旧』などと言われるのは耐えがたいことなのだ。故に我らは現魔王の血族を滅ぼすことにしたのだ。——サーゼクスの妹よ、死んでくれたまえ」

「——真の血統? 真の魔王? ……堂々と挑む度胸もなく吠え面を掻いていて、よくも抜け抜けとほざけるわね」

「何……?」

対して部長の口から紡がれたのは、彼らに対しての侮蔑だ。

不愉快そうに顔を歪めるシャルバと、部長が予備動作なく腕を振

るったのは、ほぼ同時だった。

すると——クルゼレイの腕が、消し飛んだ。

「——ッ!?!」

今しがた起きた現象が信じられないと言わんばかりの表情で、クルゼレイは言葉もなく地に膝をついた！

シャルバもまた、驚きに満ちた表情で部長を凝視していた！

「……………あなた達の考えなど、欠片も理解したくないわ。でも、一つだけ言えるのは——私の可愛い眷属に手を出した事、万死に値するッ!!」

それと同時に、僕達もそれぞれ戦闘態勢に入る！

「下らなく足掻くか……………ならば、全員ここで朽ち果てるがいいッ!!」

シャルバの言葉を皮切りに、戦闘は始まった。

### 第三十六話 「荒れるぞ、止めてみる」

……ここは一体。

複数の群れの中でひと際偉そうな木偶の光を浴びたと思ったら、この世の物とは思えない空間にいた。

『ここは次元の狭間だ』

次元の狭間？

よくは分らんが、通常の空間とはまた異なる空間と言う事か。

……通常の空間を隔ててこの次元の狭間が存在しているのか？

まあ良い。

疑問は尽きないが、兎に角早く脱出しなければな。

この空間——俺は兎も角アーシアには毒だろうからな。

俺はアーシアとこの空間をオーラで遮断させ、辺りを見渡す。

だが出口らしき物はない……寧ろ、万華鏡のようにあらゆる色と  
いう色を織り交ぜた景色が無限に続いている。

……まるで幻術の世界のようだ。

色が付いてはいるといったが、恐らくこの空間自体は無色。

それが延々と続いているのだろう。

この空間の気に当てられて消滅、なのは妥当だな。

この次元には、変化がない。

人間と言うのは、同じ景色が続く——変化がないと、己を失いかねないからな。

俺は須佐能乎を発動する。

恐らく……第二形態でも十分なはずだ。

リアス達の気配は………この辺りか。  
俺はリアス達の気配がする方角の空間に、須佐能乎の腕で干渉する。

空間は俺の干渉を拒むかの如く光を発するが、そんな物は俺には関係ない。

—————  
グオオオオオオオオオオ

空間を強引に抉じ開け、飛び出す寸前、何かの咆哮が—————俺の脳に響いた。

—————

「くっ………いい加減にしつこい！」

旧魔王二人が率いる軍勢と抗戦を続けること数時間。

驚いた事にシャルバ・クルゼレイの二人を除いた他の悪魔達より、僕達の力量が上だった為、何とかそれら相手には無傷で切り抜けられた。

だが目の前の二人は流石に旧魔王。

中々一筋縄ではいかない……！

「貴様らが死ぬ事で、冥界の真の栄光へと繋がるのだ！何故それが分からん!?」

片腕を失ったクルゼレイ・アスモデウスが攻撃を続けながらそう吠える。

「そんなの知った事ではないわ！コソコソと陰湿なテロ行為しか出来ないあなた達の言い分など!!」

「っ、ぐううっ!?!」

部長は果敢にそれを滅びの魔力を障壁のように薙いで消滅させ、素早く踏み込んで滅びの魔力を纏った強烈な蹴りを見舞う！  
後ずさりするクルゼレイの反撃は、

「僕らの王は取らせない！」

赤いチャクラの衣を纏ったミナト君が振り払った！

そのままミナト君は腕を構えると、掌に高速回転する手裏剣を生み出す！

「風遁・九尾螺旋手裏剣!!」

そのまま手負いのクルゼレイに向けて撃ち放つが、寸での処でシャルバが駆け付け防御する！

ミナト君の一撃が轟音を上げながら辺りを吹き飛ばしていくが………二人はまだ健在だった！

「……ぐっ。下級悪魔風情が……!!」

だがシャルバの腕は酷いダメージを負っていた！

それと同時に、ミナト君の衣が解除される。

「くっ、もう限界か……!」

「死ねえ、小僧!!」

「っ!」

その隙について新手の敵が襲い掛かってきた！

ミナト君は冷静に往なしながら目を閉じる——すると、彼の眼に隈取が現れた！

「……ふっ!」

ミナト君が繰り出した拳は回避された——筈が、それを躲した敵は吹き飛ばされた！

「ゼノヴィアさん!」

「イツセーの規模ほどではないが、任せろっ!」

背後に飛んだミナト君と入れ替わる形で現れたゼノヴィアは、デユランダルに纏わせた光を特大の刃状に形成！

それを吹き飛ばされた敵と背後に控えていた軍勢に食らわせ、一瞬で消滅させた！

——  
だけど

「……まだ、出てくるみたいです」

小猫ちゃんの言葉通り、際限なく召喚される敵の増援……流石にこのままだと、疲労でアウトだ！

全員が肩で息をする中、シャルバは勝ち誇った顔を見せる。

「よくもここまで足掻いてくれた、だが……もう終幕だ！このまま我らの野望の贄となるがいいっ!!」

シャルバから特大の魔力が放たれようとする中——その声は響いてきた。

「群れなければ真面に吠える事すら出来ん駄犬の分際で、よくもまあ大口を叩けるな」

『!?!』

刹那——無数に飛来してきた勾玉が旧魔王の軍勢に降り注いだ！

断末魔を上げる事無く大部分が消滅していく！

「な、何だこれは!?!」

やっぱり……彼はこんな程度で死ぬ男じゃなかった。

「どうやら全員生きているらしいな」

目の前に聳え立つのは、二振りの剣を持つ鬼の阿修羅。

そしてその中央にいるのは——アーシアさんを抱えた、イツセー君だった。

イツセー君は須佐能乎を解除すると僕達の眼前に降り立った。

「イツセー……アーシアも無事だったのね………良かった」

「俺がそう簡単に死ぬとでも？」

「…あなたの事だから、そこまでの心配はしていなかったけれど。でも良かった、無事で………」

「…泣いている場合か」

イツセー君は気絶しているアーシアさんを部長に渡すと、改めて旧魔王派を見渡す。

「な、何故貴様がここに!?!それにどうやって次元の狭間から……!」

「………よくもまあここまで尻拭いも出来ん連中が集まったな」

「何イ………!?!」

「まあ良い。多いのに越した事はない………今の俺は、少し不機嫌だからな」

イツセー君は口角を上げると、再び須佐能乎を発動する！

「けどそれは僕達をも覆うかのように発動され、あつという間に僕達の視界は——遙か上になった。」

「…完成体!」

「……お前達には悪いが、こいつ等とは今から俺が遊ぶ」

「……構わないわ。私達も、疲れてるから」

「そうか——よく頑張ったな」

——え？

僕達は全員イツセー君らしからぬ激励に呆然としているが、それに構わず須佐能乎は動き出した！

「怯むな！たかだか人間風情が作り出した児戯！突破出来ん事はない!!」

そうシャルバの言葉と共に、一斉に須佐能乎へ向けて攻撃が浴びせられるが——ダメージどころか、衝撃すらない！



驚愕する彼らを嘲笑うかの如く、須佐能乎は手にした刀を大振りに振るった！

すると——遙か遠方の神殿ごと、悪魔の軍勢が一刀両断にされた！

「な——」

言葉の出ないクルゼレイに向けて、イツセー君は印を組む！  
それに合わせて、須佐能乎の手も同じく印を組み始める！

「火遁・劫火浄滅」

印を組み終えたと同時に、須佐能乎の口が開く！

その口腔からは、辺りを覆う規模の爆炎が吐き出された！！

「こ、こんなところ——！！！！」

クルゼレイ達を飲み込んでいく爆炎！

悲鳴を掻き消しながら、爆炎は大地をも焼き焦がしていく！

「馬鹿な!?クルゼレイはオーフィスの『蛇』で前魔王と同じレベルにまで力を引き上げられているのだぞ！それが何故人間如きに——」

「それが辞世の句か」

「!!」

狼狽えるシャルバを無視して、須佐能乎は刀を未だ燃え立つ炎の海へと突っ込む！

刀身に炎が燃え移り、周囲の気をも焼け焦がしていく！

「須佐能乎・劫火ノ御剣」

大地を喰らせシャルバを宙へと浮かせると、須佐能乎は一瞬で眼前へと踏み込む！

そのままの勢いで後ろ手に持った刀を振りかぶる——刀身の炎が消え去り、須佐能乎が刀を鞘へ納めた瞬間、シャルバのいた周囲からけたたましい轟音が響いた！

「ば、バカな……！真なる血族であるこの私が!!ヴァーリにすらまだ一泡吹かせていないのだぞ!?おのれ——ッ

!!!!!!

その断末魔を最後に、シャルバ・ベルゼブブはその場から姿を消した。

第三十七話「無限と夢幻？知るかそんな事より体育祭だ」

「…………やはり、こんな程度か」

まあ、そこまで期待していたわけではなかったが……所詮は雑魚に産毛が生えた程度か。

俺は須佐能乎を解除して地に降り立った。

「お前ら、無事だったか」

そして後から現れた……アンドレとティア、そして龍王タンニン。

「ええ、と言つても殆どイツセーが片付けたのだけど……」

「何を言っている。よく粘っていた方だ」

俺がそう言つと、全員が驚いた顔を見せた。

「…何だ」

「イツセー、お前何処か体調が悪いのか？」

「至って健康体なのだ」

まったく失礼な奴だ。

と、何やら複数の気配を感じたのでそちらを振り向く。

「やあ、兵藤一誠」

そう俺に語り掛けてきたのは——何処かで見た覚えのある男だった。

「……誰だ」

「おいおいおい！流石にそれは酷いんじゃないのか?！」

「黙れ猿。さつさと野生に帰れ」

「ひでえ!!」

「ヴァーリ・ルシファー。以前君に負けた、弱つちい白龍皇だよ」

「悪いが記憶にないな。取るに足らない雑魚など、どれも顔が同じだからな。……で、何をしに来た」

「あるものを見に来たのさ……君も見たらどうだ？損にはならないと

約束しよう」

興味はなかったが、一応は空を仰ぐ。  
すると、虚空に穴が開いた。

他の奴等は全員仰天している。

それもそうか。

今、俺達の目の前にいるのは、空をも覆いかねないほどの巨躯を誇る、赤い龍。

『赤い龍』と呼ばれるドラゴンは二体いる。一体は君に宿るヴェールズの古のドラゴン。そしてもう一体は——」

「黙示録に記されし、終末の獣と並ぶ赤い龍……アホカリユブス・ドラゴン『真なる赤龍神帝』・グレートレッド」

この世界の伝承は暗記出来る程度には覚えているが、実際には見たのは初めてだ。

「——そう、通称『D×D』と呼ばれる、この世で最も偉大なドラゴン。そして奴はあの次元の狭間に住み着き、永遠にそこを飛んでいる」

「御大層な肩書の割に、引き籠りか。なら、たかが知れてると言うものだな」

「流石だね。そんな事を言えるのは君だけだろう。グレートレッドは、オーフィスの目標でもあり、俺が倒したい相手でもある」

「お前程度、奴にとっては蠅以下だろう」

「ああ、分かっているとも。だからこそ、俺は今以上に強くなる。そして——真なる白龍神皇になる。赤だけ上位が存在しているのに、白だけ存在しないのは、解せないからね」

…本気か。

「随分と青臭い夢だな——だが、悪くはない」

「！」

「それは兎も角、そこにいるのは誰だ」

『!!』

全員が驚いた様子で俺が見ている方を振り返ると、そこには全身黒ずくめの少女がいた。

「彼女がオーフィス。『禍の団』のトップだよ」

「…我、必ず静寂を手に入れる」

そう呟くと、オーフィスは指鉄砲でグレートレッドを撃ち抜いた。そして何を思ったか、俺の方へと振り向いた。

「その為には赤龍帝。お前の力が必要」

「何が言いたい?」

「私の仲間になつてほしい」

『!』

思いがけない発言に全員が驚いた顔を見せる。

「……何を言い出すかと思えば。下らん戯言だな」

「何故?」

「俺は誰の足に就くつもりもない。ましてや……ホームシックを患つた奴の言うことなど、誰が聞か。さっさと失せろ」

俺が周囲に魔力を展開すると、オーフィスは僅かに後退つた。

「…その状態でも、我に少し劣る程度。でも全力出せば、どうなるかわからない。……グレートレッドを倒す為には、なんつ……!」

ぼそぼそと喋る奴の首めがけてアスカロンを振るうが、寸での所で躲された。

「三度目は言わん。——疾くと、失せろ。孤独な龍神」

「……我は、帰る」

何処か寂しそうに呟くと、オーフィスは消えていった。

「——哀れだな」

俺は奴の姿を見て、そう呟いた。

本当に——哀れな子供だ。

—————

さて、時は流れて体育祭当日。

俺は騎馬戦に参加する直前、アジアに呼ばれてグラウンドの端へと来ていた。

「あ、イツセイさん」

「何か用か」

「……先日は、本当にありがとうございました！」

……まだ言っているのか。

俺は溜め息を吐いて、アジアの頭に手を置いた。

「何度も言わせるな。俺はお前を助けたつもりはない、ただ自然の成り行きでそうなっただけだ」

「それでも、何度だって言いますから！——イツセイさん」

「なん——」

気付けば、俺の口は塞がれていた。

アジアの、唇で。

「大好きです、イツセイさん。ずっと、ずっと傍にいますから！」

そう顔を赤らめて告げるアジア。

「……………そうか。なら、勝手にしろ」

「へ？え…？」

俺が一切動じてない姿を見てか、アジアは羞恥で顔を震わせていた。

なけなしの勇気を振り絞ったは覚悟はいいが——

「まだまだ、小娘だな」

「っ!!／／／」

そう耳元で囁いてやると、蒸気機関車のように顔中から湯気を出し

て固まるアーシア。

俺はその様に笑うと、アーシアを放ってグラウンドへと戻った。

リアス達と言い、アーシアと言い————本当に、飽きない小娘共だ。

## 第七章：放課後授業の覇天神龍 第三十八話「逢引のち、邂逅」

イツセーだ。

先日冥界での一騒動を終わらせて、体育祭を終わらせた数週間後の話だが……………

「イツセー君♪」

「……………」

何故か俺の腕には、姫島が引っ付いていた。

しかも何時もと違い髪を下ろし、年頃の女が着そうなカジュアルな服装で、だ。

端的に言えば、今俺は姫島と逢引をしている。

何故なのか俺にも理由が分からんが、姫島曰く以前の騒動での報酬、らしい。

何でも敵の女王を先に倒した方が俺と逢引する権利が与えられると塔城がほざき、そいつの相手をしていたりアスと張り合った結果との事だ。

雷の速度は今のリアスには超えれんからな。

致し方なしとは言え、本人の意思を無視して行うとは解せぬ。

今度塔城はお仕置き確定だな、と心に誓う中、姫島が上目遣いに聞いてきた。

「ねえイツセー君」

「…何だ」

「今日一日だけは…………イツセー、って呼んでも良い？」

「……………好きにしろ」

投げやり気味に言うと、姫島は花が咲いたような笑顔を見せる。



「やったあ。ありがとう、イツセー。あ、後ね……」

「……まだ何かあるのか」

「……わ、私の事も……朱乃って、呼んでほしいの。……ダメ？」

……夢見る乙女か。

もうさっさと終わらそうと決意し、俺は朱乃の手を掴んだ。

「行くぞ……朱乃」

「！——うんっ」

……単純な女だ。

後ろから此方を追いかけてきている連中もな。

——

さて、一周り回ったところでリアス達を撒き、着いた先はそういった宿泊施設が立ち並ぶ路地裏へと来てしまっていた。

「おい、さっさと行くぞ」

「………よ」

だが朱乃は俺の服の端を掴んだまま動こうとしない。

「………良いよ。私、イツセーになら………」

「馬鹿を言うな」

その場から去ろうとするが、尚も朱乃は微動だにしなかった。

「イツセーは……私達の事、女だと思ってるの……？」

「………女ではないのか？」

「っ、だったら！」

「前にも言った筈だ。お前達小娘に、欲情などする気はないとな——

——で、北欧の神というのは覗き見が趣味なのか？」

俺が物陰に声をかけると、そこからローブを着た小柄な老人が出てきた。

「ほっほっほ。女子からの誘いを断るとは、お主も中々罪づくりな男じやて」

「俺が誰を抱こうが俺の勝手だ。だが……この女はそういう対象ではないのは、確かだ」

「!」

後ろで朱乃が顔を強張らせたのを背後で察したのと同時に、銀髪の女が前に出てきた。

「オーデインさま……このような場所をうろろとされては困ります!

……か、神様なのですから、キチンとなさってください!」

そう言えば、あの時は鎧を着ていたな。

この介護士擬きは。

「よいではないか、ロスヴァイセ。お主、勇者をもてなすヴァルキリーなんじゃから、こういう風景もよく見て覚えるんじゃない」

「どうせ、私は色気のないヴァルキリーですよ。あなたたちもお昼からこんなところにいちやだめよ。ハイスクールの生徒でしょ? お家に戻って勉強しなさい勉強」

「余計な世話だ、生娘」

凶星であろうことを吐き捨てると、介護士は泣き叫び始めた。

「き、生娘え!? 私だって好きで処女じゃないのにいいい!!!……つて言うか! 自分が年上みたいに振る舞わないの! 一応あなたよりは年上です!!」

「そんな餓鬼臭い精神年齢だから未だに男を知らんのだろう? 生娘介護士」

「だあれが好き好んでこんなクソジジイの介護なんかするかああああ!!!」

「ロセ、儂泣くよ?」

と、下らないやり取りを繰り返していると、朱乃が武骨な男に迫られていた。

「あ、あなたは……!」

「朱乃、これはどういうことだ?」

男の方はキレ気味で、声音に怒気が含まれている……流れるチャク

ラの色からして、此奴の肉親か？

そう思っていると、男は朱乃の腕を引つ張ろうとする。

「とにかく、ここはお前が来るべき場所ではない。早く去るんだ」

「いや、離して！」

「朱乃！いい加減に——！」

俺は男の首筋にアスカロンをピタリと添える。

「年頃の娘の扱いがなっていないのではないか？——父親なのだろう、貴様」

「……………如何にも」

男は朱乃の手を放すと、此方へと振り返った。

「私は墮天使陣営グリゴリの幹部、雷光のバラキエル——君の言うとおり、朱乃の父親でもある」

……………取り敢えず、朱乃は母に似たのだな。

### 第三十九話 「God降臨」

「いやー、態々すまんのお」

「いえいえ、神様にお茶を差し出せるなんて、光栄ですから」

あその後、ジジイを我が家へと案内し、母さんに事情を説明。

母さんは「へえ、神様なんだ」と言うリアクションだけだった  
……………。

家の母さんの胆力は俺をも越えるな。

他の奴等は全員驚いていたが。

「で、神が何故こんな所へ？」

「ま、ちと野暮用でな。下手な場所より、この地の方が安全じゃからな」

嘘は言っていないか。

そのジジイはリアス達を卑猥な目線で凝視し始める。

スパン！

そして、あの介護士生娘にハリセンで叩かれた。

一応上司な筈だろうに……………相当人望のない神なのだ。

「これでも慕われとるわい！」

「人の心を勝手に読むな」

腐っても神と言うことか。

「こやつは儂のお付きヴァルキリーじゃ」

「ロスヴァイセと申します。以後、お見知りおきを」

ヴァルキリー……………戦乙女か。

そしてジジイは気味悪く笑いながら言葉を紡いだ。

「彼氏いない歴年齢の生娘ヴァルキリーじゃ」

「知ってる」

「わ、私だって好きで独り身じゃないんですよおおお!？」

ロスヴァイセは泣きながら叫ぶ。  
身を切り裂く思いとはこの事か。

「そうじゃ、赤龍帝よ。ロスヴァイセをお主の嫁に貰ってはくれんかの?」

『!?!』

「な、何を言っておられるのですか?!」

顔を赤くして狼狽するロスヴァイセ。

「興味ない」

「……!」

俺としてはどうでも良いので断らせてもらおう。

「お主のお眼鏡には敵わんかの?」

「……別に。まあ顔や身体付きは人並み以上に整ってはいるとは思いますが。もう少し自信を持ってもいい程度にはな」

まあ俺からしたらだからどうしたと言うのだが。

「………ほ、本当ですか?」

すると俺の言葉が衝撃的だったのか、不安そうに俺に尋ねてきた。

「嘘を言っただけですか?………何だ、何か不服か?」

「………いい、いえ!」

じろりと眼を覗き込んで聞くと、向こうは静かに引き下がる。

心なしか頬が緩んでいる気がするが………どうでも良いか。

「ふむ、お主は中々女子を落とすのが上手いのお」

「落としているつもりはない」

人をたらしみたいに呼ぶな。

………周りからの視線が痛いのは何故だ。

で、肝心の姫島はあの男——父親と再会してから機嫌が悪い。

普段の笑顔すらなく、その眼は酷く冷たい。

まるで親の仇の如く——相手は親だが、ここまで肉親に憎しみを抱くのは中々無いだろう。

少し気になってきた。

俺は部屋を出た姫島を追いかける……勿論間を開けて。

——

「朱乃、お前と話がしたいのだ」

「……気安く名前を呼ばないで」

バラキエルは姫島の名を呼ぶが、当の姫島は素っ気ない。

今にも人を殺しそうな声音……おい誰だ、俺に「お前だよ」と言わんばかりの視線を送るのは。

画面の前の奴等か……忌々しい。

この二次元と三次元の壁を壊せば良いものを。

……話が逸れた。

盗聴を続ける。

「……赤龍帝と逢い引きをしていたのは何故だ？」

見た目に違わず、武骨な男だな。

今時逢い引き等と言うのは、俺ぐらいなものだと思っただぞ。

「私の勝手でしょう？ 何故あなたにとやかく言われなければならないのかしら？」

「……お前は彼の何を知って信頼している？」

「……どういう事？」

「……彼は今、我々三大勢力の中では最も警戒されている男だ。普通の人間でありながらコカビエルを赤子の手を捻るかの如く滅ぼし、歴代最強の白龍皇をも圧倒、禁じられた力をも息をするかの様に使いこなす。彼の危険性は、身近にいるお前が良く分かっている筈だ」

……どうやら三大勢力もお気楽な集団ではないらしい。

まあ恐らく、サーゼクスやアザゼルはあまり明言はしないだろうから、他の上層部連中か。

この発言は娘を思つての親心なのだろう。

実際、他人からは得体の知れない化物だろうからな、俺は。

「……彼を、イツセー君をそんな風に言わないで。確かに彼は可笑しなレベルで強いわ。だけど、その中で相手を虐げようとする思惑なんじゃない。他人や————戦えないご家族の為に戦う……不器用でぶつきらぼうだけど、優しく頼りになる男の子よ。………噂や他人の意見だけ飲み込んで判断するなんて、やっぱり最低ね」

あの木偶相手は流石に弄る気満々だったのだが。

「私は父として——」

「今更父親面しないで！あの時母様を見殺しにした癖に!!」

……………ハア。

「人の家で親子喧嘩は止してもらおうか」

『!?』

見ていられなくなったので出ることにした。

前世の俺を考えると、あり得ない行動だな———こんなにお人好しではなかった筈なのに。

「……イツセー君、聞いてたの?」

「俺が都合良くこの場に現れると思うか?」

この空気を読んでこの場に来る奴は超能力者だな、恐らく。

或いは、余程の馬鹿か。

「ぬっ！男が盗み聞きなど！破廉恥な……やはり、娘に卑猥なことをしているのか!………そうはさせんぞ！逢い引きなど認めん!!」  
「日本語が滅茶苦茶になっているし、俺は小娘相手にそんな事をする趣味もない」

第一俺は卑猥なことをされてる側だが。

だが向こうは聞く耳持たず、雷光を迸らせる。

「……話を聞け」

「ッ!?……ぬ、う……!」

埴が明かないので幻術を掛けてバラキエルの動きを止める。  
バラキエルは抵抗するかの如く身を固めるが、最後には膝を付いた。

「お前達の過去は知らんが、お前達の蟠りをこの家に持ち込むな。  
……アンタ、今はこの場から去った方が良い。娘を思うならな」  
幻術を解くと、バラキエルは静かに立ち上がると、背を向けた。

「……すまん」

そう小さく呟いた男の背は、あまりにも小さく見えた。

それを見送って直ぐに、姫島は俺に抱き着いてきた。  
涙を流しながら、その肩を震わせて。

「ご免なさい、イツセー……。今は、今だけは、このままで  
……」

……俺以上の不器用だな、この親子は。



## 第四十話 「肉親を失う痛み」

「……………」

俺は現在、特訓に精を出すリアス達を眺めていた。  
まだまだ粗削りではあるが、それでも以前より成長している……………  
将来が楽しみだな。

「よお、イツセー」

「何だ、お前か」

俺は隣に腰かけたアザゼルを見ずに問いかけた。

「しっかしあいつ等、冥界での修行より更に洗練されてるな」

「そうでなくては楽しみがない」

「もしかしたらお前をも超えるかもな」

アザゼルは笑うが、俺としてはそれも願ったり叶ったりだ。

「それならもつと楽しめそうだな」

「…………お前、案外最強って地位には興味ねえんだな」

「そんなものに固執するから、弱くなって、墜ちていく。大事なものは今の己に慢心しない事だ」

「…それは、学ぶべき心構えだな」

それだけ言うと、アザゼルは暫く無言になる。

「朱乃とバラキエルの事なんだがな……………」

だが、漸く口を開いたかと思うと、その内容は姫島の事だった。

「母親を見殺しにしたと言っていたな」

「…………俺がいけないのさ」

そこから、俺は姫島が墮天使を恨む経緯を聞いた。

「…………あの任務は、バラキエルにしかこなせない任務だった。だから、俺がアイツと朱乃から母を、妻を奪つちまった」

「…………それで俺にどうしろと?」

「…………俺から言ったんじゃ、恐らく話はまた拗れちまう。だけどっ」

「アイツが本音を吐き出せる存在が俺、か?」

そう聞くと、アザゼルは静かに頷いた。

俺はそれを聞いた後、立ち上がる。

「……………悪いが、俺は漫画の主人公ではない」

「……………」

「——俺には俺の、やり方がある」

「……………」

「……………」

「…待たせた」

俺はアザゼルと共に目を瞑って家の地下空間にて————来訪者のバラキエルを待ち構えていた。

「…一体、何の用だ？」

「……………来たか」

「?……………!」

一体なのを、と訝しげになっていたバラキエルであったが、その場に現れたもう一人の来訪者に目を見開いた。

「……………朱乃」

そう、姫島だ。

この女も前もって俺が呼んだのだ。

「……………イツセイ君」

「姫島、お前は以前言ったな……………もう、父親ではないと」

「……………認められないわ。母様は、この男の為につ!」

姫島はバラキエルを強く睨み付ける。

「……………そうか。なら」

俺は手元に召喚したアスカロンを————バラキエルに向けて振るった。

「…っ!」

バラキエルの頬からは、一筋の血が伝った。

俺は固まる三人に構わず、アスカロンの切っ先をバラキエルに向ける。

「——俺がこの場でこの男を、殺す」

「っ!!」

俺はその言葉を最後にバラキエルの懐へと入り込む。

対するバラキエルは刀身が体に食い込む寸前で後ろに飛んで回避した。

「…!!」

「おいイツセー!?!」

「……本気の様だな。ならばごちらもっ!」

バラキエルは雷光を迸らせると、そのまま広範囲に向けて放った。

俺の動きを捉え切れない故の広範囲攻撃、か。

流星は墮天使随一の武人だ。

だが——

ドスッ!

「……なん、だと!?!」

俺は大地にアスカロンを突き刺し、迫りくる雷撃を——吸収した。

「返すぞ」

「っ!」

刀身から吸収した雷撃を返品し、バラキエルはそれを相殺する。

攻撃現象が消滅したのを見計らって、俺はアスカロンを投げつけた。

「姑息な!——ッ!!」

それを雷光を纏わせた腕で薙いで弾くが、アスカロンに施されたマーキングへと転移した俺は、一瞬の内にバラキエルの懐へと入り込む。

驚きつつも対処しようとするバラキエルよりも速く、俺は顎にアツパーを食らわせる。

そうして浮かび上がったバラキエルの肉体に、チャクラの糸で手繰り寄せたアスカロンで一閃した。

「ぐおおお!!」

苦悶の声と共に飛び散る鮮血。

それを姫島は、何かを言いたげな沈痛な表情で見守るのみ。

崩れ落ちるバラキエルの腹に、風遁のチャクラを圧縮・回転させ、押し留めた塊をぶつける。

「風遁・螺旋丸」

「ツ!!!」

唸りのような悲鳴を飲み込み、バラキエルは壁際まで吹き飛ばされた。

バラキエルは立ち上がろうとするが、上手く立ち上がれず膝を付いてしまう。

「…アンタがいる以上、姫島は過去を乗り越えられない。過去に阻まれ、本当の意味で強くなれない……だから、今ここで殺す。アンタの死が、姫島を更に強くするからな」

俺は一步、一步とゆっくり歩み寄る。

「アンタ自身、妻を失ったその時から苦しんでいたのだろう?ならば尚の事、ここで果てるべきだ。……俺がその苦しみから解き放つ」

肩で息をするバラキエル。

俺は答えを待たず、アスカロンを振り上げた。

「……………姫島。肉親を失うと言うのは———こういう事だ」

「止めてツ!!!」

アスカロンの切っ先がバラキエルの脳に刺さる直前、アスカロンが俺の手元から弾かれた。

その原因は、雷を放った姫島だ。

当の姫島本人は涙を流しながら、茫然としていた。

——殆ど無意識、か。

「……漸く、本音を吐き出したな」

俺はアスカロンを拾い、改めてこの親子へと振り返る。

「口ではどうとでも言える。だが、その心は違う。心には何時も本音が溢れている。お前にはまだ父親が必要……そして、母が殺された事件も、父に非がある訳ではないと分かっていた—— 本当に不器用な親子だ。初めから本音で話せば、こんな事をせずに済んだ物を」

「イツセー、君……」

「お前、だから態と……」

俺はバラキエルに近づき、医療忍術でバラキエルの体の傷を癒す。

「……傷が」

「お前達親子には、互いがまだ必要なのだ……アザゼル」

「……ああ」

俺の言いたい事を察したアザゼルは、俺と共に地下空間から去った。

「イツセー、お前も大概不器用な奴だな」

上へと上がる際、俺はアザゼルにそう言われた。

「だから言った筈だ。俺は漫画の主人公ではない、とな」

……全く、柄にもない事をしてしまった。

後はお前次第だ——朱乃。

## 第四十一話「God降臨」

イツセーだ。

俺は今——空に浮かぶ男を見上げている。

「…馬鹿と悪役は高い場所が好きとは、よく言ったものだな」

「……………前世の俺にも覚えがあるのだから、昔の偉人は素晴らしい言葉を残したものだ。」

「はっはっは！神を前に何たる不遜!!だが、貴殿はそれだけの實力を持つという証拠！」

「そちらも随分と不遜な神だ……………悪神ロキ。その娘ヘル」

全く、リアス達があ爺の警護をしている最中に、とんでもない相手と出くわすとはな。

『そういう割には随分と高揚しているではないか、相棒』

当然だ。

まさか神と戦える機会が来ようとは……………心躍らずしてどうする？

「神であるならば……………その實力、俺に見せてくれ」

俺はゆらりと魔力を周囲に展開する。

須佐能乎を発動し、まずは拳を振るう。

「ほう、それが貴殿の妙技！一度しかと見てみたかったぞ！」

ロキは魔法陣を展開、須佐能乎の拳は奴に触れる事無く——遥か後方の山で爆発が起きた。

「……………転移魔法か」

俺の須佐能乎を飛ばすとは、やはり神の名に嘘はないということか。

「しかし、態々山の方へと転移させるとはな」

「我とて無用な殺生は好まんのだよ。我が用があるのはオーデインただ一人なのだ、兵藤一誠——最凶の赤龍帝」

……………人前でドライグの力なぞ使った覚えが全くないのだが。

まあそんな事はどうでもいいか。

『……相棒』

「貴殿がいくらその身に宿る龍の力を使わずとも、貴殿は赤き龍に取りつかれた者という事実は変わらぬさ」

「……………」

「お喋りはこの位にして……消えてもらおう、赤龍帝」

ロキは手元に幾重もの魔法陣を展開……………攻撃用と、捕縛用か。

俺の予測通り、半分の魔法陣からは魔力の奔流、後の残りからは鎖が此方へと襲い掛かってきた。

「その鎖は貴殿を何処までも追い掛ける！そして……………ヘル！」

「……………はい、お父様」

ヘルが虚空に傘を向けると、空間が歪み始める。

やがてその中から、夥しい数の醜悪な魔物が湧き出て来る。

……………あれが北欧の地獄、ヘルヘイムの魔物か。

感心する傍ら、俺は印を結ぶ。

「火遁・豪火滅却」

チャクラを炎に変換し、一気に吐き出す。

魔物は殆ど焼却したが、鎖だけはしぶとく俺を追い掛けてくる。

……………あちこちが焼け焦げていたが。

俺は須佐能乎の腕を振るわせ、その剣で鎖を薙ぎ払った。

「……………からかうつもりであったのだが、その認識を改めねばならんか！」

そう言うと、ロキは俺へと単身向かってきた。

「お父様！」

「手出しは無用だ、ヘル！」

ロキは手元に魔方陣を発動、その手には剣が握られていた。

すかさずアスカロンで受け止めると、刀身からは熱を感じた。

「つ……………素晴らしい反応速度！」

「神性を感じるが、これもお前の玩具か？」

「そう、この剣は神剣レーヴァテイン！あらゆる物を燃やし尽くす神



にのみ握ることを許された剣なのだ！」

「ふん、レバ刺しごと握った程度で勝ち誇って貰っては困る」  
「っぬ!？」

俺は力でロキを押し退けると、アスカロンに炎を纏わせる。

それを見てか、ロキもレーヴァテインに炎を纏わせた。

「貴殿の炎と我がレーヴァテインの炎!どちらが上なのか……………面白いつ!!」

「———剣義・豪火滅却剣」

息巻くロキに構わず、俺はアスカロンを振るう。

それをロキは受け止めるが———直ぐに顔色を変え始めた。

「っ……………まさかっ!」

ロキはその場から離れ、レーヴァテインを消した。

そこへすかさず、ヘル本人の攻撃が俺に向かってくる。

「———うちは返し」

俺はアスカロンと入れ違いで召喚したうちはで攻撃を吸収、そのまま暴風として跳ね返す。

「っ!!」

……………が、ロキはそれを魔方陣で吸収して霧散させてしまった。

……………そうではなくてはな。

「……………驚いたぞ。まさか我がレーヴァテインをも燃やそうとは!」

「言った筈だ。レバ刺し程度の得物で、勝った気になるなど」

「……………貴殿を生かしておけば、この先確実に我が驚異となる。ならば

———ここで確実に殺しておこう」

ロキは再び魔方陣を展開する。

その輝きと共に姿を現したのは、巨大な狼。

赤き双眼が、俺を睨み付ける。

「灰色の狼、北欧……………成る程、その犬が神喰狼フェンリルだな？」

「如何にも！神をも穿つ牙を持つ我が息子！フェンリルの力の前では、如何に貴殿と言えど抗えぬ！」

「……………心が踊る」

「何時まで踊っていられるか！さあフェンリル、目の前の人間を切り刻め!!」

「——待つのじゃ、ロキ」

犬が此方に飛びかからんとする中、背後から声が聞こえてきた。

そちらを振り向くと、そこにはジジイ——もとい、オーデインがいた。

「おお、我が主神オーデイン！態々我が元へと姿を見せようとは！」

「お前さんが危険なペットを解放しようとしておるからな」

「イツセー！まだ噛みつかれてないな!？」

アザゼルがそう聞いてくる。

あの犬には噛みつかれてはいないが……………

「あそこの神は噛み付いて来たぞ」

「上手いこと言ってる場合か！」

「オーデインよ、今一度だけ聞く！まだこのような愚かなことを続けるおつもりか！」

「そうじゃ。少なくともお主らよりもサーゼクスやアザゼルと話していたほうが万倍も楽しいわい。だいたいのお、黄昏の先にあるのは終末。つまりは滅びじゃ。それを自ら引き起こそうとするなど、それこそ愚かな行為じゃと思わんか？」

「……………成る程、答えは分かった。これで気兼ねなく貴方を滅ぼせる！フェンリル!!愚かな主神の喉笛を掻っ斬れ!!!」

ロキの命令通り、犬が此方に向けて飛びかかる。

俺はすかさず犬とジジイの間に立つ。

「アザゼル、手出しはするなよ?」

「お前、何を——」

俺が前方へと差し出した左腕を、フェンリルは躊躇なく爪で斬り飛ばした！

『——ッ!?!』

全員の驚愕とロキの哄笑が見詰める中——俺はフェンリルの出っ張った口元を踏みつける。

『グルルルル……ッ!』

「な、に……?!」

「……随分嫉の悪い犬だな」

俺は退かした足でフェンリルの顎を蹴り上げる。

その一撃でフェンリルの体躯は宙へと浮かぶ。

「……たつぷりと調教してやる、有り難く思え」

此方へと噛み付こうと飛び付いてきたフェンリルを右腕で抑え込み、

「千鳥流し」

『——ッ!!!』

雷遁のチャクラを流し込む。

眼も眩む発光を上げながら、電流はフェンリルの身体を傷付けていく。

千鳥流しを終えると、フェンリルは未だに敵意剥き出しの瞳で睨み付けている。

俺は口角を上げて、そのままフェンリルを離し——右拳を叩き込んだ。

それを受けたフェンリルはロキへと吹き飛ばされていく。

「……まさか、フェンリルをも!!」

「……得意気に召喚した割には、大したことのない駄犬だな」

「……一度、計画の再構築が必要か。ここは退かせてもらおう

う  
た。ロキはマントをはためかせると、その場から犬と女共々姿を消し

## 第四十二話 「怠惰の龍」

ロッキーが襲撃した後日。  
俺達は家にいた。

何でもロッキーへの対抗策を編み出す為だとか。

その関係かどうかは定かではないが、何故か白龍皇の小僧もいる。

因みに俺の腕は元通りになった。

アジアには泣かれたが、俺としてはハンデを与えたつもりなので、泣く理由が分からん。

それに命があるだけまだマシだ。

「で、誰にロッキー対策の案を乞う気だ？」

「イツセー、それだとロキがボクサーになっちまう。『ヘルー!!』とか叫ぶロキとか誰得だよ」

「知らん」

「——ゲフン!……ご教授を願うのは、『スリーピング・ドラゴン終末の大龍』、ミドガルズオルムだ」

……………ほう。

「確か五大龍王の一角にして、ロッキーが創造した龍だったか」

「……そこまで知ってたのか」

「だが相当な巨体だった筈だ。どうやって呼ぶ？」

「二天龍と五大龍王……ティアマツト、タンニーン、そしてヴリトラの力ドラゴン・ゲートで龍 門を開く。奴の意識だけを呼ぶって訳だ」

「成る程」

俺はチラリと横目でティアを見る。

奴を呼べと言ったのはその為だったか。

するとティアは何を勘違いしたのか、此方に近付き、囁いた。

『イツセー……もしかして、私が欲しくなったか?』

『……馬鹿かお前は』

……頭痛が痛いとはこの事か。

――

そのまた後日、俺達は怠惰の龍を呼ぶべく、特別な空間にいた。

そこにいたのは、紫の鱗を持つ龍――タンニーン。

「久しいな、兵藤一誠」

「先に来ていたのか、タンニーン」

「うむ。堕天使の総督に言われここに来たのだ。……そちらがヴリトラの小僧か」

タンニーンは匙をジロリと見詰める。

睨んでいる訳ではないと言うのに、匙は生まれたての小鹿の様に震えていた。

「た、たたた、タンニーン?!」

「落ち着け、馬鹿」

「いてえ!?!」

俺は落ち着きのない匙を拳で諫める。

当の本人は今度は地面を転がっていた……よし。

「今度は腕ひしぎだな」

「止めてやれイツセー、可哀想過ぎるわ」

後ろから現れたアザゼルに止められた……チッ。

「地の文で舌打ちすんなこのドS!!……始めるぞ」  
アザゼルが描いた魔方陣の上に乗ると、其々の場所が光を放ち始めた。

それぞれ赤、青、白、黒、金、紫と。

確かドラゴンの特徴を反映した色だったな。

そう考えていると、光が強くなり、この場を照らし出す。

そうして現れた魔方陣の中には――巨大な龍がいた。



『ダディとワンワンとお姉ちゃんのことかあ。いいよお。あの三人にはこれといって思い入れはないしねえ。あ、タンニーン、一つだけ聞かせてよお』

「なんだ？」

『ドライグとアルビオンの戦いはやらないのお？』

此方を見てミドガルズオルムは尋ねてくる。

「やらん。今回は共同戦線を張っているからな」

『へえ、まあでも赤の方がかなり強そうだしねえ。勝負になるか分かんないもんねえ』

それを受けて、ヴァーリが此方を見てくる。

俺としてはどうでも良いので流しているが。

『まあいいやあ……。ワンワンが一番厄介だねえ。只でさえ強いのに、噛まれたら死んじやうことが多いからねえ』

「イツセーは腕を噛み千切られたが生きてたぞ」

『当たり前が良かったんだねえ』

「んなもんあるのかよ!？」

アザゼルが吠える。

『でも、弱点はあるんだあ。ドワーフが作った魔法の鎖、グレイプニルで捕らえることができるよお。それで足は止められるねえ』

「：オーティンから貰った情報では、フェンリルは強化されていてな。それでお前から更なる秘策を得ようと思っているのだ」

『へえ……。ダディったらワンワンを強化したのかなあ？なら北歐に住むダークエルフに協力してもらって、鎖を強化してもらえばいいんじゃない？確か長老がドワーフの加工品に宿った魔法を強化する術を知ってるはずだよお』

アザゼルがヴァーリの方を指さす。

「そのダークエルフが住む位置情報を白龍皇に送ってくれ。この手の類のことはヴァーリの方が詳しい」

『はいはい』

ヴァーリが情報を捉え、口にする。

「——把握した。アザゼル、立体映像で世界地図を展開してくれ」



「フェンリルに関してはこれで何とかなるか……残るはロキとヘルか」

『ダデイとお姉ちゃんか……。あの二人は特別厄介だねえ。お姉ちゃんは魔物や死人を何千万と召喚できるからねえ』

「一匹一匹は強くなかったが……数の暴力としては申し分無しだったな」

『お姉ちゃんは大量に魔物を召喚した後は暫く動きが止まるよお。ちよつとの間だけけど、そこを突けばいいんじゃないかなあ』

「成程……で、残るはロキか」

『ダデイを倒すとしたら結局は正攻法しかないかなあ。そうだねえ、ミヨルニルでも撃ち込めばなんとかなるんじゃないかなあ。通用するかは分かんないけどお』

雷神トールの鉄槌か。

『そうそう』

「ミヨルニルか……。確かにそれならばロキにも十分通じるだろうな。だが、雷神トールが貸してくれるだろうか……。あれは神族が使用する武器の一つだからな」

『それなら、さっきのダークエルフに頼んでごらんよお。ミヨルニルのレプリカをオーディンから預かってたはずう』

「ほう、そうか。助かるよ」

と、ここでドライブがある言葉を溢した。

『相棒のあの力なら、恐らくロキにも対抗できるのではないか？』

「あれか……。どうだろうな。まだ実践で使っていないからな、安定するとは限らん」

そのやり取りを聞いて、全員が驚いた顔で此方を凝視する。

「……イツセー。お前、まだ手の内あんのか」

「……いざとなればそれを使う。が、保証が出来んから、その鉄槌で倒せるのを願うかな」

あれは俺ですらまだ御せない力だ。

周りの空間にすら作用してしまう程にな。

『へえ、やっぱり君は……。うんうん、でもあの時より良い目をして

るよお』

……………あの時、だと？

「貴様、まさか…………」

コイツ、俺の前世を知ってるのか？

『んー、何の事かなあ。…………ふああ、もう眠たくなってきちやっただまたねえ』

「あ、ああ。済まなかったな、ミドガルズオルム。起こしてしまつて」  
『良いよお。また何かあったら起こしてねえ』

それを最後に、ミドガルズオルムの映像は消えた。

## 第四十三話 「決戦?・前」

久しぶりだな、イツセーだ。

何、裏の方で会っただと?

そんな外部事情は俺の管轄外だ。

「何か良い意見はないかしら?」

で、現在は今度の学園祭の出し物を決めている最中だ。

とても神との対決前とは思えんが………まあ、平常心を保たせるという意味では理に適っているか。

「ベタだが、メイド喫茶等はどうだろうか?」

ゼノヴィアが挙手して発言する。

「確かにベターだけど、他の部活でもそれを実施するそうなのよ」

「成程、確かに同じ物では面白みがないな」

「それなら一層の事、ローションとマットでも用意すればいいのではないか?」

「イツセー、それはベターじゃなくてワーストよ」

「ちっ、下らん論理間に縛られおつて」

「第一まだ処女よ!!」

………ほう。

「てつきり男の俺の前で堂々と裸で寝たり湯に浸かったりする物だから非処女かと思っただぞ」

「そ、それは………!」

まあ分かりきっていた事だが。

そしてリアス同様、他の女子部員も顔を赤く染めて顔を逸らした。

「安心しろ、俺はお前達をそういう対象としては見ていない」

そう言うのと、何故だか全員が落雷を受けたかのように、衝撃に満ちた顔をしていた。

「……木場、俺のターンを進めるぞ。シラヌイ骸の効果で、お前のヴァンガードを支配。そのまま他のユニットに攻撃」

「え、あ、うん。ノーガードで」

俺はショックで固まる女子部員を放って、最近ハマったカードゲー

ムを続ける。

異なる世界の俺も龍のクランを選んでいたが、俺も同じ穴の貉か。

――

「……………」

学校からの帰宅後、軽く作戦会議を終えて、俺は現在風呂にいた。

『相棒、あの力…………』

『問題はない。…………多分、な』

『不確定要素は拭えん、と言うのか』

それはそうだ。

まず実践で使ったことが全くないものを運用するのだ、不安と言えば不安だ。

『…お前でも、不安を抱くのだな』

『俺を人外か何かと勘違いしているのか』

『あ、いや』

『ふっ、冗談だ……………だが、今の俺は一人ではない。リアス達や、お前もいる。なら俺は動くだけだ』

『……………そう、だな。なら俺も全力でサポートしよう。お前が戦えるようにな』

『期待している』

精神世界で会話をしていると、この場に誰かが訪れたので、意識を浮上させる事に。

「姫島か」

「……………正解ですわ」

目を開けると、そこにいたのは姫島だった。

姫島は「失礼しますわ」と言い、俺の隣に腰掛ける。

「イツセー君……………その、父の事ですがっ」

「礼などいらん」

「！」

そう言うのと、姫島は驚いた顔を見せた。

「俺は演技とはいえ、お前の肉親の命を奪おうとした。そこに褒められたり、剩え礼を言われる要因などない」

「……いいえ、貴方は私の殻を破ってくれた。それに、私が止めなくとも、貴方は絶対に寸前で止めていた。違うかしら?」

「……」

「沈黙は肯定、ですわ」

姫島は可笑しそうに笑った。

「……で、用件はそれだけか?」

「……いえ。お礼は、これだけではありませんわ」

姫島はそれだけ告げると——俺に唇を重ねてきた。

「……イツセー君は、これでも私を、女として見れませんか?」

そう聞いてくる姫島だが、俺からすれば小娘が無理な背伸びをしているようにしか見えない。

これは姫島だけではない、リアス達もそうだ。

こいつ等が俺に好意を抱いているのは分かる……あからさま過ぎるからな。

だが何処か、俺に女として認められたい、そう言った節が強い気がする。

「見えないも何も、お前は女ではないか」

「そうではなくて……異性としては、見れない?」

「……さあな」

「はぐらかさないで!」

姫島はそう声高に上げて、俺へと覆い被さってくる。

結果としては押し倒されてしまった……何だか最近、こう言うのが多くないか。

そう他人事のように考える俺の眼前では、姫島が不安げに瞳を揺らしていた。

「……お願い、何か言って」

沈黙を保つ俺に痺れを切らしたのか、姫島が切羽詰まった声で答えを急かしてくる。

「……………姫島。お前は俺を性のない存在だとも思っているのか？」

「……………へ？んんっ！」

俺は強引に姫島の口を塞ぎ、舌を突き入れる。

姫島は何が起きているのか理解出来ていないらしく、完全に硬直していた。

「……………ふはっ」

「…俺にも一応、性欲は存在しているんだがな。それを、たつぷりと分かせてやろう」

「い、イツセー……………」

目を白黒させる姫島の様子に笑いつつ、俺は最後通告のように告げてやる。

「後悔、するなよ？———朱乃」

## 第四十四話 「神との戦い」

——決戦の時間。

辺りは既に夕闇が支配し、俺達は現在神様サミットが開かれる高級ホテルにいた。

「……時間ね」

リアスが時計を見て呟いたと同時に、俺はアスカロンから斬撃を放つ。

周りは何事かと目を見開いているが、白龍皇の小僧は察していたらしく、苦笑いを浮かべる。

「小細工なしとは、恐れ入るね」

「——来ますっ！」

仙人モードになったミナトも探知したらしい。

俺が放った一撃は虚空で停止し、そのまま消え失せる。

そこから姿を見せたのは、ロキ親子。

それと同時に発動される、転移用の魔方陣。

「場所の移動か。構わんぞ」

ロキは不敵に微笑むだけ。

俺達が転移したのは、古い採掘場の跡地。

つまりは被害が少ない場所だ。

「逃げないのね」

「逃げる必要などない。どうせ足掻くのだろう？ならばここで全員始末すれば良いこと。違うか？」

「……………全く。」

「もうここから動ける気か？——嘗められたものだな」

俺が魔力を周囲に展開すると、フェンリルが低く唸る。

警戒されたものだな。

《Vanishing Dragon Balance Break

e r!!

そして俺の隣に立つ白龍皇。

「俺の隣に立つのだ。足を引つ張るなよ」

「当然。食らいついて行くまでさ」

……ふっ、生意気な。

「二天龍の共同戦線か！これは心が踊るっ!!」

ロキの歓喜の叫びを無視し、小僧が突っ込む。

以前よりも増した速さで、一気にロキへと肉薄していく。

俺も須佐能乎の腕に勾玉を連ならせ、後方から放つ。

「――八坂ノ勾玉」

空気を唸らせ飛んでいく勾玉を見ても、奴の冷静さは変わらない。

「ふはははは！良い攻撃だ、それにスピードも申し分無し！だが甘いつ!!」

ロキの手元には幾重もの魔方陣が現れる。

防御式で防ぎきると、瞬時に攻撃用に転用され、此方へ放たれる。

小僧はそれを掻い潜る中で、俺は須佐能乎で全て防ぐ。

「……フン」

返す刃で、須佐能乎の剣を放る。

「っ！レーヴァテイン！」

ロキは虚空からあの神剣を召喚すると、その炎で迫る巨剣を焼き払う。

その間にも、小僧は北欧の魔術攻撃を繰り返す。

良いタイミングで放たれたが――俺の予想通り、奴は無傷であつた。

「……なら」

俺は受け取っていた神槌――ミョルニルに魔力を流して宙へと放り上げ、須佐能乎の腕に持たせる。

「……ちい、ミョルニルとは。オーデインめ、それほどまでに会談を成功させたいとは……!!」

「辞世の句としては、飾り気がないな」



ミヨルニルから雷が迸る。

俺はそれを躊躇なく振りかぶる。

「神槌——神鳴落とし」

咄嗟に名付けた技と共にミヨルニルがロキへと迫る。

「ッ!!」

ロキはそれをかわすが——俺は鉄槌の槌の部分のみを轉移させる。

「なっ——」

「言い忘れていたが……飛雷神のマーキングは消えない」

「!!」

驚愕と共にロキがレーヴァテインの刀身を見ると、そこには初戦の際に施しておいたマーキングが確りと刻まれていた。

そしてそのまま——神槌がロキを叩き潰した。

「……………随分と呆気ないな」

呆然と呟く小僧。

……コイツ、これで終わったつもりか？

「何を安堵している。まだまだこれから……………だろうか？ロキ」

「何を——!」

小僧が聞き返そうとした瞬間、空間が新たに歪み始める。

そしてそこから姿を見せたのは——先程叩き潰した筈の、ロキ。

「……………何時から気づいていた？今の我が、分身だと」

「……………数いる神の中で最も狡猾、いや、臆病な貴様の事だ。馬鹿正直に俺達を相手取る筈はない、そう確信を持っていた。それに——

俺の眼を嘗めてくれるなよ」

コイツが最初から分身だと言うのは気づいていた。

だから、俺もまだ全てを出しきっていない。

「何の為に分身を…………」

「俺達の手の内を探るため、だろう？臆病な神よ」

「……その通りだ。赤龍帝、貴殿の手の内までは明かせなかったがな。だが、もうそのミヨルニルの一撃は食らわん！」

ロキの言葉を、俺は鼻で笑った。

「……俺は元よりこんな玩具に頼る気はない。己の力で首を取ってこそだ。お前の分身を相手取るのも面倒だったから使ったまで」

俺はミヨルニルを元の大きさに戻し、須佐能乎の腕で握り潰した。その行為に、全員が眼を見開いた。

「……正気か?!」

「何を驚く?———どうせただの模造品だ、適当に貴様との闘いで壊れたとでもしておく。………バランス・ブレイク禁手」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

ここからが本当の戦いだ。

俺は久方ぶりに鎧を身に纏う。

「……貴殿を真正面から相手にするのは危険だ。だが、フェンリルは強化されたグレイプニルに捕らられている。ならばっ!」

ロキが両腕を上げると、その場の空間がまた歪み出した。

「———ハテイ、スコルっ!!!」

———フェンリルの子供か。

「そんな子犬程度で、俺の足を止めれるとでも?」

「確かにこの二匹だけでは一瞬で葬られるだろう。だが、我がそれに加わるとしたら?そして……ヘル!」

リアス達と交戦していたヘルが傘を上げると、ロキと子犬の周囲に夥しい数の魔物が現れる。

「……群れた所で、所詮雑魚は雑魚だ」

俺が動くのと同時に———多数の魔物が吹き飛んだ。

「ッ!!」

そうして突き出された俺の拳を受け止めるロキ。

だが先程までの余裕な笑みはなく、その顔は真剣そのもの。

「ハティ、スコルツ！この者の喉笛を噛み千切れ!!」

ロキの命令と共に此方へと向かってくる子犬。

「——失せろ」

俺はそれに対し、子犬を睨み付けて黙らせる。

合わせて幻術も発動し、子犬の動きを封じた。

「……っ、ハティとスコルを幻術に掛けるとはっ！貴様……本当に人間か？」

「生憎だが、種族上は人間だ」

「抜かせっ!!」

ロキは零距离で魔術を使う。

俺はそれに対して幻術を発動、ロキを一瞥する。

「……ッ!!」

僅かだが、ロキの動きが鈍った。

その隙を逃さず、俺は距離を取る。

……やはり神相手だと、幻術は持つて数秒か。

ロキは忌々しげに頭を押さえ、俺を睨む。

「くう……神を幻術に陥れるとは！何たる不遜!!」

「……神相手に幻術を掛けるとは、本当に非常識だね。君は」

「持つて数秒が限界だがな」

まあ良い。

この程度で終わるようでは楽しめんからな。

と思っていると——

「……………っ」

俺の腹に、フェンリルの牙が突き刺さっていた。

溜まらずに血を吐く。

……ヘルがグレイプニルを解いて、直ぐ様転移させた所、か。

『イツセー!!』

「兵藤一誠!!」

「フハハハハハ!!先ずは赤龍帝を噛み砕いてやったぞ!!!」

……………くっ

「クククク……………クハハハハハ!!!」

だが俺は、身体中から沸き上がる感情を抑えきれずに、哄笑を上げた。

それは——喜び。

「……………この状況で何をっ」

俺の異常性に、ロキは顔をしかめて尋ねた。

何を、だと？

「決まっている……………命を掛けて、己が力を振るい、精神と肉体を削り合う！これが……………これこそが、本当の戦い!!俺が求めていた、強敵との命の掛け合い!!!これを楽しめるのだ、笑わずにいられるか!?!」

「……………異常過ぎる。貴殿はっ」

「何とでも言え。理解してもらおうとは思わん——さて」

俺は未だに噛み付いて離れない犬を一瞥する。

「じゃれるのはここまでだ——失せろ」

俺は犬の上顎、下顎を掴み——強引に口を開かせた。

「一発には、一発だ」

俺は拳を振り下ろし、犬を大地へと叩き伏せる。

「……………さっさと連れていけ。お前の狙いはこの犬だろう」

「……………見抜かれていたか」

敵わない、そう呟くと、小僧は犬を抑えて転移して行った。

「白龍皇め、フェンリルが狙いだっただか……………!」

さて——

「悪神ロキよ、光栄に思え」

「む?」

「今の俺が持てる全力……………それを見せるのは貴様が初めてだ」

「何…………?」

「ジャガーノート・ドライブ  
覇 龍」

《Juggernaut Drive》  
!!!!!!

俺は覇龍を発動する。

「…………負の念を全く感じない。禁じられし覇の理を、完全に掌握しているのか?!これが、貴殿の全力——」

「誰がこれで終わりと言った」

早合点したロキの言葉を一蹴し、俺は須佐能乎を発動する。

「もしかして、完成体…………?」

「あれは、一体…………」

ミナトが呟く横で怪訝な表情のロスヴァイセ。

ミナトの言うとおり、須佐能乎は一瞬は何時もと同じ巨軀と成るが……………俺はそれを縮ませる。

「っ!」

これにはミナトも予想外だったらしく、言葉を失っていた。

そうしている内に、完成体須佐能乎は覇龍を発動した俺の鎧を覆っていく。

俺が前世で九尾に対して、須佐能乎を覆い被せたのと同じ様に。

翼、尾までもが須佐能乎が被さり、須佐能乎の青い鎧の内側から、覇龍の赤い鎧が怪しく輝く。

そして背中には輪が生まれ、輪に幾つもの勾玉が形成される。

変化が終わえたと同時に——俺とロキのいる周囲の空間が、崩壊を始めた。

「なっ?!」

『!?』

この現象はロキも初めての光景らしく、驚きを隠せずにいる。他の連中も同じく、目が点になっていた。

やがて周囲の空間は、次元の狭間と同じ様な万華鏡の様子が広がる異空間と化した。

その中で孤立した大地が、俺とロキを乗せて浮かび上がる。

「覇の理を、天を征す龍の闘神——須佐能乎・霸天龍神体」

俺はロキの驚愕を張り付けた顔を一瞥し、短く告げた。

## 第四十五話 「終幕の咆哮」

「何だ、その姿は……………!?!」

ロキは此方を見て驚きを隠せないでいた。

そして、辺りを見渡す。

「空間にすら作用している……………このままではっ」

「ああ、この場の空間は消え去る」

俺はロキの言葉を肯定する。

だからこそ、この力を使うのを躊躇していた。

前世の六道仙術＋輪廻眼の状態よりは幾分劣るが、それでも目の前の神を滅ぼすのは容易い。

だが、懸念材料はもう一つある。

「ミナト。リアス達を飛雷神で連れていけ」

そう、リアス達だ。

まだ制御の効かんこの力の側にいさせたら、奴等にも影響を与えかねん。

「何を言ってるの?!あなた一人でも流石にっ」

「……………リアスちゃん。今この場に私達がいてもご主人様の足手纏いにならならないにゃん。ここは……………ご主人様に任せるしかっ」

「……………それは」

気持ちには分らんでもない。

何も出来ない己に歯痒い思いをしているのだろう。

——だが

「……………分かったわ。ミナト、お願い」

「…はい」

そう、それが今お前が下すべき判断。

だがそれは間違いではない、お前が気に病む事はない。

「……イツセー、ちゃんと帰って来なさい」

「無論だ」

俺はここで果てる事は許されん。

俺が出来る償いは——生き続ける事だけだからな。

「飛雷神の術!」

ミナトのチャクラに触れた全員が、マーキングを施していた家の地下へと跳躍していった。

……さあて。

「これで二人きりだな」

「……誰が二人だと?」

そう語る俺の前に立ちはだかるのは、ロキの娘ヘルと子犬。

……勘違いしているな。

——自分達がまだ死んでいない事に。

「自分の状態を見てほざくんだな」

「何を——ッ!?!」

そう言つてヘルは自分の姿を見て、言葉を失った。

何故なら、自分の足が消えていつているからだ。

そしてそれは、犬二匹も同じだった。

「お、お父様——」

ロキへと求めた助けは、崩壊していく空間へと消えていった。

……自分の存在と共に。

「……貴様のオーラだけで、我が子達を!?!」

「……………」

戦くロキに構わず、俺は魔力の剣を抜刀して、ロキの背後へと移動する。



刹那——ロキの体から鮮血が迸った。  
そして遅れて響く斬撃音。

「ぐ、おおおおおおおおおおお!!」

苦悶の声を漏らすロキ。

だが直ぐ様俺の攻撃へと移った。

「消え去れええええ!!」

夥しい数の魔術攻撃を、俺は棒立ちで構える。

まあ、タダで受けるつもりもない。

背部の後輪に連なる勾玉が3つ分離すると、俺を中止に三角形を形成する。

その中央部に魔力のバリアが生まれ、ロキの攻撃を全て防いだ。

「なっ…」

「まだ耐えられるだろう?でなければ、試し甲斐がない」

再び勾玉が分離し、それぞれの鋭角部からレーザー状の攻撃が放たれる。

ロキはそれを防いでいくが、レーザーを放っていない勾玉が直接ロキを切り裂いていく。

「がああ!!」

「——八坂ノ勾玉」

手裏剣状に形成した勾玉を放るが、流石にロキはそれらを全て相殺する。

「ちい、出鱈目な力を!!人間の分際で!!!」

「……フン」

俺はロキへと一瞬で踏み込むと、刀を突き出す。

ロキは防衛用の魔方陣を展開する。

が——

《Penetrate!!》

その音声と共に、刀の刀身はあっさりとしてロキの肉体を貫いた。  
「な、につ……………!!?」

目の前の事実を飲み込めないのか、ロキを自身を貫く刀を睨み付ける。

「倍加・譲渡——そして、透過。ドライブが持っていた力の一つだ」

『…………まさかこの力の発動と共に覚醒しようとはな』

これは俺もドライブも計算外だった。

今のは無意識に発動したからな。

「これでお前は俺が繰り出す攻撃は何一つ防げん。惨めに滅べ。それに——」

もう飽きた。

俺はそう吐き捨てると、肩から須佐能乎の腕を形成し、胸へと全魔力を集約させる。

本当に自身を消すのを漸く悟ったのか、ロキは激しく狼狽し始めた。

「貴殿は…………貴様はっ！下等な人間の分際で、侵されざる神々の領域をも侵し!!尚且つ神をも滅ぼそうと言うのか!!?」

…………惨めな神だ。

「神の領域…………悪いが一度は踏み荒らした場所だ。何ら問題はあるまい」

「!」

魔力は龍の頭蓋と成り、口部には槍が形成されていく。

青ざめていくロキへの興味は、完全に失せていた。

「お前が滅びるべき理由は——俺の仲間、家族に手を上げんとした。それだけで充分だ」

既に殆どが崩壊したこの空間で、エネルギーが激しく嘶く。  
目の前の神を滅ぼさんと、猛き龍は唸りを上げる。

「滅べ——龍槍・神滅ノ咆哮」

そうして放たれた龍の槍は、ロキの悲鳴をも喰らいながら、派手に爆音を轟かせた。

「……………ふっ」

俺は覇龍須佐能乎を解除すると——その場に倒れた。

『急げ相棒！早く脱出せねばこの空間毎消えてしまうぞ!!』

……………分かっている。

だが、体が全く動かん。

『なっ……………!!』

絶句するドライグ。

……………どうやら少しはしゃぎ過ぎたらしい。

もう……………死に時か……………。

『何を言っている?!お前は帰るべき場所があるだろう!お前の仲間も、お前の家族も!!皆、お前の帰りを待っているのだぞ!!』

仲間、家族………それらは全て、この少年、本来の兵藤一誠が得る筈だった物だ。

家族からの親愛も、リアス達からの好意も、アザゼルやサーゼクスからの信頼も………俺は、それを横から奪い取った様なものだ。

本来なら、俺はあのまま死ぬ筈だったのだ………。

『だがお前は、本来の兵藤一誠に託されたではないか！生きることを！！』

……もう充分生きた。

心残りがあるとすれば、奴等の成長を見届けられない事と――

『――お兄ちゃん！』

………イズナ。

「俺だって、叶うなら帰りたい。だがな、もう既に体が動かん身だ」  
『相棒………！』

「付き合ってくれて礼を言うぞ、ドライグ」

『今際の様な事を言うな！！お前の口からは聞きたくもない！！』

「フン……随分センチメンタルな奴だ」

崩壊していく空間を眺めながら他人事の様と言う。

脳裏に浮かぶのは、やはりイズナの笑顔。

リアス達も確かに大切な存在ではあるが、俺にとってイズナは特別なのだと自覚させられる。

「………すまないな、イズナ」

俺は届かぬ詫びを口にし——そつと眼を閉じた。

そしてその空間と共に、兵藤一誠は姿を消した。